
ウィザード～魔法使いは月に照らされて～

有華 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウイザード～魔法使いは月に照らされて～

【Zコード】

Z2585D

【作者名】

有華 桜

【あらすじ】

主人公、月城昂はどこにでもいるごく平凡な男子高校生。唯一他と違う部分といえば、家族を失い一人暮らしを続けている事ぐらい。ある日、自宅のベッドで目が覚めると、そこには見知らぬ少女が立っていた。少女は彼の事を『兄さん』と呼ぶが……。少女との出会いが、少年を危険な『魔法使い』達の争いに巻き込んでいく！現代系ファンタジー小説『ウイザード』の幕が今、開かれる！

第一章／月下の魔法使い 上

過ぎ去つた冬の寒さが未だ少し残る春のとある早朝、ゆらゆらと揺れるカーテンの隙間から照りつける眩しくも気持ちの良い太陽の日差しを浴びながら、俺こと月城昂つきしゆきぱはとあるアパートにある自室のベッドで寝転がりながら心地良く眠っていた はずだった。

「……ねえ、起きて。起きてつてば」

突然だつた。誰かの声が聞こえ、俺は夢の世界から覚醒する。もつとも、どんな夢を見ていたのかなんてのは田覚めた瞬間に忘れてしまうのだが。

さて。少し解説すると、俺は現在ワケあつて一人暮らしの真っ最中である。そんな現状、朝に弱い俺を毎日のように起こしてくれる同居人だの、親だの、兄弟だの、可愛らしい妹だの、そんなものは当然のことく存在しない。一人だけ身近に幼馴染がいるが、毎日のよつに起こしにくるほど可愛らしいものでもない。

朝早く起きると言つことが苦手な俺は、毎日のよつに遅刻ギリギリの瀬戸際にいるような状態で、性懲りもなく遅刻に焦つて朝食すらまともに取れないような忙しい朝を迎えるはずだったのだが、

「おはよつ、兄さん？」

ふと寝ぼけ眼で壁に掛かっている何の変哲もない円形時計に視線を向ける。時刻はまだ早朝とも言つべき午前六時過ぎ。とても俺が起きるような時間帯でないといつ事は先程の説明で十分に理解出来るだろう。それだけならばまだ理解するにあたつての許容範囲内だと言える。たまに何かの気まぐれで早起きをしてしまうこと程度なら年に一度や二度あつてもいい。多少は現実を疑うかも知れないが、それを自分自身の目で確かめればすぐに眞実だと理解できるし、そんな偶然に感謝こそしてもそれ以上の疑問を投げかけたりは断じてしないとも言い切れる。

だが、今この目に映る光景は

「どうしたの、まだ寝惚けてる？ 朝食ならもうすぐ出来るけど、先にコーヒーでも飲んで目を覚ます？」

一人の少女がエプロン姿で立っている。そして、その少女は首を傾げ呟いた。

「……兄さん？」

いやいやいや待てよ待つてくれ落ち着け落ち着いて現実を見る用城昂。まさか一人暮らしな俺の部屋でこんなオイシイ ではなく、こんなおかしなシチュエーションがあつてたまるか。それに『兄さん』と呼ばれた気がするが、俺に妹なんていただろ？ か。それもこんな可愛い妹が もちろんいる訳がない。

記憶を辿つてみても俺はこんな子など知らないし見た事もない。ましてや妹だなんてなんの冗談だ。目を覚まして突然こんな場面に出くわせば、いくら俺が普通の人間だからってこれは夢じやないかと疑いを持つてしまうのも無理はないと思つただが。

「効いてない、って事はないわよね。ううん、確かにちゃんと成功したはず……でもこの様子は」

少女が突然何かを考えるような仕草をして突然ぶつくさと独り言を呟き始め、そして黙り込んでしまう。とにかくこれは好都合、このまま一度寝しちまえばきっと俺は元の平常な日常に舞い戻れるはず。少なくともそうでなければ困るのは事実であり、もしこれが夢だとしても俺はなんて夢を見ていたんだと自己嫌悪するハメになってしまふわけだがこの構造うまい。確かにこうやって毎朝起こしてくれる可愛い妹つてのは健全なる男子にとつては夢のようなもののはずだし。はずだよな？

「ねえ兄さん。わたしの事解るわよね？」

俺が布団を覆い被さつて一度目の眠りについたとするや否や、妄想上の（そつであつて欲しい）少女は何やら困惑つているような声色でおかしな問いをぶつけてきた。布団の隙間から見えるその表情には少し不審の色が伺える つてちょっと待つて欲しい。少しでいいから俺に考える時間くれ。まず第一に俺はこの子の事なんて

何も知らないし記憶はない。解らないのに解るかと聞かれても答えはノーだ。だがこの雰囲気から察するに俺は彼女の事を知つていなければならぬらしい。現に彼女の表情がそう訴えかけているわけで。何と答えればいいのか解らないまま、俺はただ無言でその少女の顔を見つめていた。多分、今の俺はかなり間抜けな顔をしているに違いないだろうと思いながら。

「……えーと「そうして、あたふたしながら言葉に詰まつた俺は、「ここはどこだ……」

訳が解らずに意味不明な返答をしてしまつた。俺がそう呟いた瞬間、目の前の少女はまるで有り得ないものでも見るかのような瞳で、「うそ、まさか記憶喪失にでもなつたって言うの？ そんな、確かに手順は合つていたのに。こんな、おかしいわ……」

先に弁明して置くが、俺は決して記憶喪失などと言つ如何わしい症状になつてているわけではない。解らない事と言えば田の前の少女が一体何者なのかと言う事くらいで、自分の部屋の光景、空気、ベッドの寝心地その他全てに関して覚えていふと言つ事には胸を張つて自身を持てる。

「ねえ、本当に何も思い出せない？ 自分の名前とか、ほら……」「デマを吐いてみたのは良いが、さてどうしたものか。状況を整理するとあまり難しくはなく、ただ朝早く目が覚めたと思つたら田の前に見知らぬ自称・妹な少女が立つていたと言う事だけであり、この謎を解き明かすためにはまずこの少女が何者かを知る必要があるわけだ。なら行うべき事はそう難しくもない、俺が聞いて眞実を答えるかどうかは解らないが試さないよりはマシだと答える。俺は少し間を置いてから不安そうにしている少女に向けて一つの問い合わせ掛けた事にした。

「いや悪い、冗談だ。俺は月城昂。ここは俺の部屋で、俺が一人暮らしをするのに使つてゐる部屋だ。だが……さて、ここで問題です」俺はわざとらしい口調で、「一人暮らしをしているはずの俺の部屋にいるわけがない女の子がいて、さらに『兄さん』だなんて呼ばれ

た場合、俺はどう対処すればいい?」

「…………」暫しの沈黙の後、目の前の少女は静かに溜め息をついで、「やっぱり効いてないのね。困ったなあ、なんとか上手く行くと思つたんだけど」

ますます訳が解らなくなつてきた。『効いてない』つて何がだ? 薬か何かか? そして何が上手く行くはずだつたんだ? まさか俺に妹がいるなんて事を錯覚させようと変な薬でも飲ませたんじゃないだろうな。だが一体それに何の意味がある。

「でもその様子だと、昨日の事は忘れているみたいね。まあ、多分ショックで記憶が飛んでいるだけだと思うから、そのうち思い出すんでしょうね?」

「おい、昨日の事つて何だ? 記憶が飛んでいるつて、俺は昨日は普通に学校へ行つて授業を受けて、それから――」

それからどうしたつけ? 記憶が少し曖昧になつてゐるのか、上手く思い出す事ができない。

「ツ……お前、何を知つてる?」

「女の子に対して『お前』なんて呼び方を使うのは好ましくないわね。はあ、せつかくの計画も失敗だし、どうしたものかな」

「そんなの仕方ないだろ、俺はお前の名前さえ知らないんだ。それくらい先に教えてくれてもいいんじゃないのか?」

そんな俺の返答に、少女は「あ、そう言えばそうね」なんて呆気に取られたような顔をして呟いて、

「私は……そうね。『ルナ』とでも呼んでくれればいいわ。まあ、貴方の妹になる予定だつたから丁度いいし、月城ルナつて名乗る事にしましょう」

「るな……? 漢字でどうやって書くんだ。いや、外国人なのか?」

「それより待てよ。どうしてお前……いや、るなが俺の妹つて事になるんだ?」

「さつそく呼び捨て? まあ、いいけど。ちなみにカタカナでルナでいいわよ。外国人がどうかってのは、まあ説明が面倒臭いからこそなるんだ?」

の際置いとして。何故かつて言つのは少し色々事情があるんだけど……簡単に答えるなら、そうね」うーんと唸つてから、ルナと名乗った少女は俺に向かつて軽く意味ありげな微笑を浮かべて、「貴方がわたしの事を知つてしまつたから、かしら?」

「知つてしまつた、だつて? どう言つ意味だよそれ」

「昨日の事、本当に覚えてないのね。そつち方面の記憶が消えちゃつたのかしら。うーん、そのうち思い出すとは思うけど。簡単に説明するなら」ルナは扉の向こう側から俺の部屋まで踏み入つてきて、「貴方は昨日、わたしの秘密を知つてしまつた。仕方がなかつたとは言え、貴方はわたしの事情に脚を突つ込んでしまつたわけ。その事情はわたしにとつて他人に知られるべきではない事で、本来なら貴方を抹消してでも知られるべきではない事だつた。でも、そうね。一言で言えばわたしは貴方を気に入つたのよ。だから一番最適な方法として、貴方の記憶を操作して、わたしが元から存在している親族、年齢的に考えて妹だと『錯覚』させるように仕向けたんだけど、何故だか効果はなかつたみたい」

ちょっと待つてくれ。いまいち話が良く見えないんだが、俺はようするに昨日ルナと初めて出会い、彼女にとつて知られたくない秘密を知つてしまつたと言うことか。思い出そうとしても何も思い出せない事に苛立ちを感じながら、俺は目線だけをルナに向けて口を開く。

「大体の流れは理解出来たんだが、話の内容が抽象的過ぎないか。これじゃ何も解らないし、俺におま……ルナが妹だと『錯覚』させるなんて方法、一体どうやつて?」

「簡単よ」ルナは、さも当然そうな顔で俺に向かつてそう言い放つた。

「だつて私、魔法使いだもの」

「……、え?」

今、彼女は一体何と言つたのだろうか。俺の耳が悪かつただけかもしれない。いや、そうでなければこれはただの笑い話に成り下がる。魔法使い？　おいおい、いくらなんでもそれは[冗談]にしても程度が低すぎるだろう。

「まあ、普通じゃ信じられないでしょうね。でも実際問題、事実なんだからしようがないわ。わたしが知られたくない事、って言うのもわたしが『魔法使い』だって言う事なんだから。今は信じられなくてもいいけど……そうね、そのうち昨日の晩の事を思い出せば嫌でも理解するんじゃない？」

まったくもつてこいつの言葉の意味が理解できないのは、俺がなんの変哲もない健全で普通なただの一般人だからで間違いないだろう。そんな与太話、誰がはいそうですかと信じるって言うんだ？余程の夢見た子供相手じゃない限りは笑いこけている所だと思う。こいつがその夢見た子供なのかどうかはおいといて。

「……ま、いいわ。別に無理に今すぐ信じて貰わなくともわたしは一向に構わないワケだし。それより『兄さん』。そろそろ朝食の時間だと思うんだけど、食べるわよね？」

朝食だつて？　まさか本当に作つてたのか。別に勝手に台所を使つてる事にいまさら意義はないが、なんだか複雑な心境だ。

「あら、食べないの？　もしかして朝食は抜く派？」

「いつも朝はぎりぎりだからな。今日だつてこんな朝早く起きた事に驚いてるくらいだし」

「駄目よ。朝食はその日の基礎になるエネルギー源なんだから、ちゃんと取らないと。そんなどと体内魔力も回復しないで、これでは貴方には関係ないか」

本当にどこの電波少女なんだと言い放つてやりたいが、本人は心底自分が魔法使いだと思つているようで、確かにそれくらいの事情が無い限り俺みたいなそこら辺にいる凡人に素性を知られたからと言つてそいつの妹になんてなるとは思わないだろうが、それでもやっぱりおかしいのはおかしいのである。

「お前に説教される事でもないだろ。俺は俺なりに生きてるんだから、見ず知らずの女に指図されるほど落ちぶれてもいい」
「む。お前つて言わないでって言つたでしょ。呼び捨てでもいいから名前で呼んでよね。わたし、お前つて呼ばれるの嫌いなの」

「知るかそんなの。

「はいはい悪かった悪かった。で、そのルナさんはこれからどうするつもりだ？」

「どうする、つて？」

「あのな……。仮に、一歩譲つてルナが魔法使いだとするぞ」俺は信じてないが、と心の中でひそかに付け加えて、「俺が知つてはいけないような秘密を知つてしまつて、俺を監視だかする為に俺の所で妹をしようとしたつてのもまあ解る。理屈は、信じる上でならな。だけど実際今の俺は妹なんていないと思つてるし、俺の周りの奴らもそうだ。そんな事知らない。一体どうやってこの状態を続けるつもりなんだよ。騙し切るのにも限界があると思うぜ」

「うーん。まだその辺までは考えてないんだけど。ま、なんとかなるんじゃない？」

「おいおい、こいつはまだここまでぶつ飛んでるんだ。さすがの俺でも頭が痛くなつてきた。

「でも」ルナは付け足すよつて、「わたし、その辺は得意な魔法使いだから。身辺の誤魔化し程度なら簡単だと思うわよ？」そうね……戸籍上、貴方にはルナつて言つ妹がいるつて情報を他人に植え付けたりするのも難しくないし」

「なんだそれ。魔法使いつてのは、杖から炎やら雷やらを出したり、傷を一瞬で癒したりする人種じゃないのか？」

少なくとも、俺が最近嵌つているゲームではそんな感じだ。そう俺が自分の思い付く限りの魔法使いのイメージを伝えてみると、それはまるで見当違いの返答だったのか、ルナは飽きたような表情でこちらを見た。いや、俺がすでにお前に飽きれていると言つのは敢えて言わぬで置くが。

「そんなイカれた偏見は止めて欲しいわね。ま、中には確かに似たような事の出来る魔法使いもいるとは思うけど。実際はもっと多種多様、一言では語りきれないようなものよ。魔法使いつてものはね」

「そんなもんですか。まったく意味が理解出来ないが、やっぱりここは黙つて聞いておいてやろう。俺じゃ何を言つても多分おかしな返事しか返つて来ないんだろうじ。

「はあ。これじゃ、無理やりにでも昨日の記憶を再生させて納得させた方が早いんじゃないかって思つくらいだわ。まるで信じてないって顔だし。仕方ないのかも知れないけど、そんな顔されるとこっちとしても自分がばか言つてるような気分になるじゃない」

「実際にわけわからん事を言つてるとしか思えないんだよ。て言つか無理やりに記憶を再生させる、ってなんだ。脳をいじくつたりでもするのか。そうだとしたら秒で遠慮させて貰うとする。とにかくこつじていても埒があかないでの、俺はベッドから重たい腰を下ろすと、そのままルナの隣を横切つてリビングへと向かう事にした。俺の部屋は一人暮らしには少しもつたいないくらいのワンルームで、リビングと部屋が別々にあり、さらに物置部屋まであるという仕様である。当然風呂とトイレも別々だ。俺も色んな理由があつてこんな無駄に広い部屋に住んでいる訳だが、今はその理由の説明は割合させて貰う。なんてつたつて話し始めるとやたら面倒な上につまらないからだ。

「で、結局朝食は食べるの、食べないの？」

後ろに付いて来るよう、義理の妹・ルナが問い合わせてきた。正直、朝飯と言わても久しぶり過ぎて実感がない。だが、腹は減っているのは間違いないわけで。

「ああ、食べるよ。せっかく作ってくれたんだろ。それじゃ食べないと勿体ない」

「へえ。案外律儀な所あるのね。感心、感心」

お前に感心されてもあんまり嬉しくないんだけどな。言われて嫌

な気分はしないが。

そんなこんなで俺はリビングに移動した。リビングにはコタツが置いてあるのだが、コタツ布団はすでに取っ払っているので、まあようするにただのテーブルである。その上にはすでに食事の準備が行われているようで、なんとも日本伝統の朝食だと言わんばかりの和食メニューである。

「和食か。つつーカルナつて外国人じゃないのか？　名前からして略称つぽいからそうだと思つたんだが」

ここで初めて俺はルナの外見に注目した。本来なら遅すぎるが、先程までわけ解らない現実に直面していたため、そこまで気が回らなかつたのだ。そこはご了承戴きたい。外見はそこまで外国人らしくはなく、外国人つぽい特徴は強いて言つならその長い金髪だろう。肌は白いし、顔付きも實に日本人つぽく見える。ハーフか？　そこまでは解らないが、とりあえず美人だとは思う。今となつては少々癪だが、第一印象では可愛い女の子だと思つた訳だし。實際外見だけで言えば可愛いのだから別に文句も何もないのだが。

「わたしの事、そんなに知りたいの？」

何とも意味深な返事をされてしまい、俺は少し動搖してしまつた。駄目だ、ペースに乗らされてはその内いつの間にか馴染んでしまう。丸め込まれては相手の思う壺だ。堪える俺。

「別に話したくないなら話さなくてもいいけど。ただちょっと気になつただけだ」

「少しばかりになるんだー。へえ、ふうん？」

俺は段々「イツの性格が解つて来た気がする。

「まあ、今はまだ話せないかな。そのうち話してあげる」

なんだ勿体付けやがつて　まあいい、少々残念だがまたの機会に取つて置くとしよう。別に今すぐ聞きたいような事でもないし。

「とりあえずその辺座つてなさいよ。すぐ用意したげるから」

それだけ言って、ルナは台所へと背中を向けて歩いて行つた。そんな彼女に俺は適当に相槌を打つてから、リビングの中心にあるコ

タツの適当な場所に座る　つておいおいちょっと待てよ俺、すっかり馴染んでしまったんだが俺はこのままでいいのだろうか。なんだか流れに流されてしまつたような気分になつてきた。大体、俺はいつの間にあの無茶苦茶少女ルナの兄になる事を承諾したんだよ。やべ、もうすでに脳内の洗脳が始まつてしまつてゐるんぢやないか。しかし別にこれと言つて嫌な気分なわけではなく、一人暮らしも寂しいと思つていた頃にこんな可愛い少女（性格云々はこの際その辺に放置して置く事にする。あくまで前向きに）が俺のモットーの一つだ）と同居出来ると言つのだからそれはそれでよいしい状況だとは思う。ああ、そこは否定しない。俺だつて一応男なんだからな。でもそれとこれとは話が別だろ？　まず俺は事態がまだ理解しきれていないのが原状であり、正直な話彼女の話をこれっぽっちも信用していない。魔法使いなんて実在するとは一ミリも思つちゃいないし、彼女がそうだともてんて思えない。さてどうしたものか。このまま流れに流されて可愛い（何度も言つが性格は別だ。あくまで外見が）女の子と同居生活に励むのか。それとも今すぐ彼女を部屋から追い出してしまうか。解らん　正直に言おう、俺はこのまま彼女と今すぐはいさよなら出来るのはこれっぽっちも思つていらない。言つて聞くような相手でも状況でも無さそuddからである。ならどうすればいい、俺にどうしろってんだ。もう何もかも解らなくなつてきた。このまま流されてしまうのが一番楽なんだろうが、それはそれで疲れる未来が魔法使いでも超能力者でもなんでもない俺にだつて見えるぞ。未来予知つてやつだ。

「何へんな顔してぼおつとしてるの？」

などと試行錯誤している間にすでに朝食の準備は終わつていたようで、目の前に座つている自称魔法使いルナが俺の顔を見つめながら怪訝そうな表情で呟いた。俺だつて別にしたくて変な顔をしてるわけじやない。それなりに悩んでるんだ。今の現状を把握するだけで精一杯だよ、俺には。

「何でもない。それじゃ、戴きますつと」

「戴きます」

「ここは行儀よく、両手を合わせてまずは朝食を戴くとしよう。これでも俺は恩義は忘れない人間だ。こうして朝食を作ってくれたのなら、何も考えずにありがたく戴くのが俺流である」箸を掴み、目の前にある焼き魚へとその矛先を向ける。つむ、いい感じに焼きあがっているじゃないか。これは上手そうだ。ぱくりと一口、俺は焼き魚をほぐして頬張った。ふむ、これはなんとも、

「う、あがア あああああおオえええええええ！」

待て待てなんだこの味は、とてもこの世のものとは思えねえ！

俺は近くにあったティッシュペーパーを即座に二、三枚取り出して、そのまま口の中の異物を吐き出した。そんな俺の行動を見て、驚いたような顔でルナが言つ。

「ちょっと何よいきなり、人がせつかく作ったものを…」

待つてくれ、まずは俺にも弁解をせろ。その前に口の中をすつきりさせるのが先だが。

「う、うう。はあ」俺はコップに注いだ水を飲み干すと、なんとかマシになつた口を開く。「あ、あのな……。お前、それ味見したのか？」

「はあ？ 毒見なんてする訳ないじゃない。自分で作つたものなんだから、安全性ばっちりに決まってるでしょ」

「いや、毒見じゃなくて味見だ味見」ああもう、それくらいはしてくれよ頼むから。「食べてみる」

俺はそれだけ言つて、俺が食べた焼き魚をルナの目の前に差し出した。彼女はキョトンとしながらそれに箸を向けて、ぱくつ、と。「どうだ？」

「う。……ごめん、ちょっと水

ほらな、言わんこっちゃない。普段から他人に作つて貰つた食事なんて吐いたりなど決してしない行儀の良さが自慢の俺が吐くくらいなんだ。その味は尋常じゃない。つーか、なんで焼き魚がこんなに酸っぱいんだ。おかしいだろう。

「はー……。ねえ、何これ？」

「俺が知るかばか」

「うーん、やっぱり隠し味のアレがまづかったのかしら?」

……、隠し味だつて？

大抵の初心者はそう言つオリジナリティを求めようとすると行為が料理を失敗に導くんだよ。つーか何を入れたんだ、聞いてみるか。

「で、何を入れた？」

「それ」

ルナが指すその場所には、レモンの香りがどうのと書いた、

「それは洗剤だばか！」

なんてベタな失敗をしてくれるんだコイツは。思わず立ち眩みが

「うー、そんなの知らないんだから仕方ないじゃない。料理だつて初めてなんだから。ばかばか言わないでよね」

「初めて？ どうして今までやつた事ないのにやつと思つたんだよ」

と、ここまで自分で言つて置いてそろそろ可哀想になつて来た

などと思うのは俺が甘いからだろうか。俺も存外お人良しである。

「いいじゃない。したくなつたんだから」

「あのな……いや、もういい。とりあえずこの魚は食べたもんじやないから、捨てるぞ」

「う、うん。……あの、『めんなさい』

俺は一人分の焼き魚を捨てに台所へ持つて行きながら溜め息をついた。にしても、素直に謝るなんてこいつも可愛い所があるじゃないか。それに免じて今回は許してやってもいいかな。次やつたら承知しないが。と、また俺は馴染んでしまつてゐるんだが、もう気にしない方がいいのだろうか。考える事すら面倒になつてしまいそうだ、このままだと。

「ねえ、兄さん」

ルナが何やら言つたそうな表情で俺を呼んだ。その兄さんつての

がどうにも慣れないんだが、俺も名前で呼んで貰うよつとした方がいいだろつか。などと考えていると、

「おかげ、セツキの焼き魚しかないんだけど。……どうする？」

「あー……。ま、となると今日は朝食抜きだな」

結局そうなるわけだ。俺はいつもの事だから別に気にはならないけど。

「むー、次は失敗しないんだから」

「次がある訳ね……」

俺は適当に受け答えしてから、そのまま食べる事のなかつた朝食を片付けるために、リビングのコタツの上に置かれた茶碗の中に盛られた白飯を釜に戻す事にした。お生憎様、ふりかけさえもこの家にはないんでね。白飯だけで食卓を飾れるとは思えないわけで。そう言つた朝を過ごしている俺は、さてこれからどうしたものかと考えていた。今日は平日、金曜日なので学校がある。ちなみに俺は高校生で只今一年。あと一年以上学校に通わなければいけないのが毎日思つがダルい訳で、今日も学校へ行くのが辛いってのは変わらないのだが、さて今日はそれとは違う悩みが俺には存在しているのは言つまでもない事だろつ。俺の妹になると宣言したこのルナという少女。見たところ年齢は俺より一つ二つ下くらいだろう。学校には行つているのだろうか。俺の学校では外国人が通つているなんて噂は聞いた事がないが。やはりここは本人に問うのが一番だろつ。白飯を釜に戻し終えると、俺は台所からリビングへ戻るなりそこに座つている少女に向けて声を掛ける。

「さて突然だがひとつ聞きたい事がある」

「はあ、何？」

「ルナつて何歳だ」

少女の沈黙の中、お互に見つめ合つた後、「わたしの事、聞きたいの？」

またそれか。まさか年齢すら秘密だなんて言つんじやないだろうな。ちなみに俺は十七歳だ。まさか俺より上つて事はないだろう。

妹だなんて言うくらいなんだからな。良くて同じ年か少し下くらいだろ。見た目からしてもだ。

「なんてね。ま、年齢くらいなら別にいいか。わたし、十四歳よ」

「はい？」

「え、だから。十四歳だつてば」

俺がそれほど信じられない顔をしているのだろうか、ルナは少し不機嫌そうに、「何よ、そんなに信じられない？」

「……いや、だつてせいぜい俺より一つ二つ下ぐらいだと思つたから。正直、驚いた」

「そうでしょうね。ま、わたしと初めて会つた人は大抵そう言つわよ。君は年齢不相応だ、つてね。でも外見で人を判断するのは良くないと思つわ」

そう言つつもりで言つた訳ではないのだが、確かに見た目は俺と同い年だと言つても全然問題のないレベルだから、俺と三つも離れているとは到底思えないのも本当であり、と言うか性格だつて年齢不相応だと思つたりするのだがそれは言わないで置こう。しかし十四歳か、だから妹と。なるほど、それなら納得出来るものがある。「何よ、今更になつて納得したような顔しないでくれる？」

「見た目で判断するのは良くないぞ。俺はそんな事考えてない」

「……むー」

「にしてもアレだな。俺と三つも離れてるのに、えらく態度がでか……つて、『冗談だよ冗談。そんなに睨むな、無駄に怖いぞ』

本人にとつては軽いコンプレックスなんだらうか。これ以上年齢に関する話題をしているとその内本当にキレられてしまいそうだ。そろそろ止めた方がいいだろう。

「ま、気にする事はないんじやないか。それくらいの年齢で丁度いいだろ。俺の妹になるつてんならな」

「ふーん。その様子だと、もうわたしが妹になつてもいいって感じね」

え。まあ、確かに言われてみればもうすっかりその気になつてしま

まっている俺がいる。

「徐々にわたしの魔法が効いてきてるのかしらねー」

「本当にそうだったり俺はお前の魔法とやらを信じてやつてもいいが、多分違うぞ」

単純な話だ。俺はこいつに何だからだと言いつつも親近感を得ているのだ。出会って間もない少女・ルナに。心の中で、こつした朝も悪くはないと思えてしまっている。たぶんそれだけ。惚れた腫れたなんて話ではなく。第一、十四の少女に欲情なんかしたらそれはちょっと危ないだろ？まあ、だからと言つて全てを信じているわけではないのだが。

「いいや、俺が思い出せば全て信じられるって言うなら、思い出すまでとりあえずここにいてもいい。そんで俺が思い出して、全部理解した上でもう一度考える、それでどうだ？」

「そうね、いいわ。わたしの提案を断るような事があつたらその時はその時で別の手段もあつた事だし。貴方がそれでいいならわたしはオッケーよ。うん、なかなか上手くやっていけそうな気がするわ」俺は不安だけど、とは言わないで置く。「それじゃ、これから宜しくね。兄さん」

「ああ。と、それから俺の事は昂でいいぞ。その呼ばれ方はさすがに慣れない」

たとえ妹と言う設定であつてもルナに兄だと呼ばれるのには抵抗があつた。その理由なんてのはすぐには浮かばないが、まあ、なんとなくこそばゆいものがあつたんだろう。口の事ながら曖昧なのは多分氣のせいさ。

「あ、そう。それじゃ改めまして」ルナは一息、俺に向かつて微笑みを見せて、「宜しくねえ、昂お兄ちゃん？」
もつと酷い呼び名になつてしまつた。

さて、そんなこんなで俺こと円城昂は厄介な自称魔法使いであると言つ少女、ルナの兄貴役を演じる事となつてしまつたわけである。一応期限付きとは言え、自分でも早計な判断だつたなとは少し反省するべきではあるものの、こうなつてしまつた以上は仕方がない。上手くやつていくのみだ。だけどな、どうせやつたつてどうしようもない事くらいはあるんぢやないか。

「わたしも行くわよ」

俺が学校の制服に着替えている途中、いきなり問答無用で俺の部屋へすこしごこ入り込んできたその少女・ルナは、何を血迷つたのかいきなりこれまた意味不明な言葉を俺に投げかけてきた。

「行くとは？」

「学校よ学校。『わたしも』って言つてるんだからそれしかないですよ」

そりや解るが。「ほう、ルナも学校に通つてゐるのか。魔法使い様でも学校なんて庶民的な所に通つもんなんだな。これまた一つ勉強になつた」

「ばか、違つわよ。わたしは庶民の学校なんて通つてないわ。でも貴方を監視しなければいけないと言つ意味では、わたしも貴方と四六時中とまでは言わないけど出来るだけ一緒にいたほうがいいですよ？」

それはそうかも知れない。でもどうやるんだ？　さつき聞いたがコイツの年齢は十四歳で、俺とは三つも離れている。行きたくても俺と同じ高校ではなく中学が関の山で、どうあがいても俺と一緒にはいられないと思うんだが、どうだろ？　俺が何を考えているのかは俺の顔を見れば解るのだろうか、目の前にやる気満々な表情で立つている暴虐無人少女ルナはこれまた自身満々な笑みを浮かべて、「無理だと思つてるでしょ。わたしが誰だか忘れたの？」

「魔法少女りりかるルナちゃん」

「へんな呼び方しないでよ……。まあ、それは置いといてわたしは魔法使いなわけ。だから別にそれくらいの事はどうとでもなるわけ。

「解るかしら？」

未だ魔法使いと言う存在を信じていない俺にとつて理屈も何も解らないのに解るかと聞かれても何も解りませんと答えるしかないわけだが、そう答えた所でこいつにとつては満足の行く答えではない事は解つているし、ここは黙つて聞いておいてやろう。

「いい？ わたしは幻覚を見せたり錯覚させたりして人や動物を操作するのが得意な魔法使いなのよ。だから、例えば学校で一番偉い人に『月城ルナと言う生徒は確かに存在している』と錯覚させて、書類もちやんと用意させればいいだけの話なわけ」

「それは気味の悪い魔法だな、おい。子供の夢を壊すような事はするなよ」

「う、うるさいわね。事実そんなんだから仕方ないでしょ」

魔法使いと言つてもなんとも現実的、と言つかファンタジー要素に欠ける魔法なんだな。もしかしてそれが普通なのか？ いや、別に魔法使いの存在を肯定するわけではないけど。ようするにルナが言いたい事はこう言う事である。まずルナは何食わぬ顔で普通に登校し、学校の一番偉い人間 まあ校長だろう にその得意の魔法とやらで洗脳を行い、自分をその学校の生徒に仕立て上げ、それからは俺と共にさも当然のように登校生活を繰り返すと言うわけかいや、待てよ。それだと色々また問題が起こるんじゃないかな？

「言いたい事は解るわ」ルナは考え込んでいた俺の顔を見ると、またもや表情で俺の考えていく事を読んだのだろう、だがそんな事は心配ないといわんばかりの顔で、「わたしは今日転入していく転入生、つて事にする。それなら問題ないでしょ。ま、事前に知らされるはずの先生達なんかは全員洗脳しちゃう事になるわけだけど」つまり、コイツは学校の教師全員まとめて洗脳しちまうって言つているわけか。俺にはそれが可能なのかどうかは解らないし、正直出来るとも思つてないのでそれはどうでもいい事ではあるのだが、それでもやはり心配にはなる。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。昴には何故か効かなかつたけど、これでも得意分野だし。失敗したのだつてもしかすると今日が初めてくらいの勢いよ？」

「違う。洗脳した人達の事だ」

「ああ、そつち？ 心配性ね。別にそれ以外に副作用なんてないわよ、普通はね。わたしは今日転入してくる予定だつたはずだ、つて意識を植え付けるだけだし」

本気で言つている、と言うのはルナの顔を見れば解る。解るんだが、やつぱり信じられないのに変わりはない。もし今日学校でコイツと出くわして、コイツが何食わぬ顔で学校生活を送つていたとしたら、信じるしかないのか。いや、それは早計すぎると言うものだが、それでも魔法なんてモノの存在の可能性を否定するのは難しくなるだろう。魔法使い そんなものが本当に存在するんだとしても、俺にはそれ以上にコイツの考へている事の方が理解出来ない。どうしてそこまで俺に執拗になる？ 秘密と言うのはルナが魔法使いだつて言う事だと聞いたが、俺がそれを知つてからと言つてやたらめつたにその力を使いまくつちまつて何の問題もないんだろうか。下手するとばれる可能性だつてあるはずだ。

「まあ、こればかりは実際にやつて見せないと意味がないわね。ほら、さつさと着替えなさいよ。わたしは私服しかないからこのまま学校に行くけど、向こうの購買がなんかで制服買って着替えるから問題ないし。時間には余裕を持つて登校するのが一番よ。ま、今回は出来るだけ人が少ない間に事を済ませたいって言うのもあるんだけど」

本人はすでにやる気魔人と化していて、どうやら俺が何を言った所で無駄なようである。仕方がない。俺はいつものように制服に袖を通す そう言えば春ももうすぐ終わりだからそろそろ夏服になるのか。まあまだ先の話だらうけどな などと考えている内に準備は完了、いざ登校である。俺は玄関まで歩いて行くと、後ろに着いて来るルナを無視して靴をせつせと履き替え、さて向こうかと扉を開いて外へと脚を踏み出そうとしたその矢先、

「さ、行くわよ」

ルナも靴を履いて後ろに着いて来ている。待てよ、まさか一緒に登校するつもりか？

「オイ、その格好で一緒だとさすがに怪しまれないか？」

「大丈夫。だつて転入生よ？ 月城昂の妹、月城ルナじゃない。誰かと会つても今日から転入してくる事になつた妹だつて説明すればいいわ」

それはまた……無茶をおつしやる。「俺がそう説明したつて、俺には元から妹なんていなかつたんだし誰も信じるわけないんじやないか？ それもまた、お得意の魔法とやらで片付けてしまう気か」

「うーん。それでもいいけど、別にそこまでやる必要はないんじやない？ 簡単な話よ。海外へ留学していたはずの妹が突然帰つてきた、これだけで大抵の人間は信じるわ」

それはそうかも知れないが、一人だけ例外がいるのである。俺に幼馴染がいる事は冒頭辺りでほのめかしていたのだが、まさしくそいつは俺の家庭の事情ならなんでも知つてるし、無論、俺に生き別れの妹なんてものがいるなんて事は知らない。まず説明したつて信じてくれないに決まつている。

「ま、それでも信じられないような人がいるんならその時はわたしが何とかするし、大丈夫。いけるわよ」

俺としてはその得体の知れない力の矛先を幼馴染に向けたくないと言うのが本音なのだが、とてもではないが普通に言い聞かせた所でこんな与太話を信じてくれるわけがない相手だと言う事は歴然なので、ここは不本意ではあるものの、その魔法とやらの力を借りるしかないようだつた。まあ上手くいかなければの話だし、何かの間違いで信じてくれるかも知れないからまずは普通に説明してみるとしよう。さて、俺の部屋はとある住宅街にあるマンションの一室である。俺はマンション内にあるエレベーターで部屋のある七階から一階まで降りると、ルナと二人でマンションのオートロックドアから外へと繰り出した。清々しい朝の空気が心地よい。どれくらいぶ

りだろう、こんな余裕を持った登校なんてものは。

「あー、気持ちいい。温度も丁度いい感じだし、やっぱ春はいいわねー」

んー、と背伸びをしながらルナがさぞかし気持ち良さそうに言った。確かにこの季節が一番好きだな。これがもう少しすると灼熱地獄に成り代わってしまうのがかなり名残惜しくなる。ちなみに一番嫌いなのは冬なのが。

「うし。んじゃ行くわよ、昴お兄ちゃん」

「……言い忘れてたけどその呼び方はやめる」

俺はまだ人気の少ないいつもの通学路に向かい、ルナと言いつつもは居ない少女を連れて学校へと脚を運ぶ事にした。

何の偶然か特に誰とも出くわす事なく校舎に入り込む事に成功した俺達は、校舎の入り口付近でそのまま別れた。俺は一人、二階にある自分の教室へと向かつ。ルナは当然のようにまずは職員室だろうか。場所は教えたものの、迷つていいかどうか少々心配でもある。ま、大丈夫だろうけどな いつものように馴染みの階段を昇つて、俺は自分の教室である一年B組と書かれた札のある扉の前に立つ。まだあまりクラスメイト達はいないようだった。それもそのはず、今日は一番乗りと言つてもいいくらい朝早い登校をしたのである。ふむ、なんとも複雑な心境だが悪くはないな。さぞかし周りの反応が楽しみだ。ガラガラと古ぼけた扉を横にスライドさせて教室内へと入つていくと、そこには一人の女子生徒がせつせと掃除をしていた。

「うーっす、沢宮さん。朝早くから」「苦労さん。いつもこんな時間からいるのか?」

「え? わ、月城くん! ビックリした。一瞬、誰だか解らなかつたよ」

彼女の名前は沢宮花凜。^{さわみやかりん}ウチのクラスの委員長であり、俺の数少ない女友達つてやつだ。かと言つて別にこれといった仲でもなく、たまに食堂でメシ食つたり勉強教え合つたり他愛もない世間話をする程度の関係である。容姿はかなり良く、正直言つて彼女を狙つている男子はクラスの大半は占めているんじゃないかと思えるくらい。その肩までかかるぐらいの茶色の髪と、少し幼さの残る清楚そうな顔付きは、見るものを魅了し つて俺は何を語つてるんだか。

「朝早いね、今田は雨でも降るのかな？」

「はは、それは困るな。今日は傘持つて来てないから」

「そこはすかさず『冗談』に『冗談』で返す俺だが、

「もし降つたら私の貸してあげるよ。あ……でも一つしかないから、その……」沢宮さんは何故だか恥ずかしそうに、「い、一緒に帰る事になっちゃうかも。それでも良かつたらいいよ…」

と、こうして本気なのか冗談なのか解らない受け答えをするので、話していくて飽きないのも彼女の良い所の一つだった。にしても女子と一緒に一つの傘で帰るつてのはさすがに周りの目線が怖いぞ。特に沢宮さんとなら尚更である。嫌つてわけではないし、できれば歓迎したいぐらいなんだけど。

「あ……あはは、『冗談』だよ。本気にしちゃった?」

「まさか。沢宮さんが俺なんかと一緒に帰るなんて言ひ出すとまでは思つてないよ」

「え? あ……そう、なんだ」すると、何故だか俯いて何やら後悔したような表情で目線を反らす沢宮さん。む、何かまずい事でも言つてしまつただろうか と、俺が怪訝そうな顔をしているのにすぐさま気が付いたのか、彼女は慌てて、「あ、なんでもないよ。そ、それより本当に今日はどうしたの? いつもなら遅刻ぎりぎりだーつ、とか言いながら教室に駆け込んでくるのに」

話題を反らされた気がするが、まあいか。彼女なりに気を使つてくれたのだろうし。さて、なんと説明したものか。たまたま偶然に朝早く目が覚めた、で通るっしゃ通るんだろうが、今のうちに仮

の妹となつたルナの事を彼女に説明しておいたほうが後々楽なんじやないかとも思えてくる。そうだな。別に減る事じゃないし、純粹な彼女なら多分信じてくれる事だろう。

俺は説明する為の言葉をいくつか思い浮かべて、「……実は昔生き別れた妹がいてさ、そいつが昨日帰ってきたんだけど、何でか同居しちまう事になつちましたんだよ。んでそいつに朝っぱらから叩き起こされたってわけ……なんだけど、どう?」

我ながら嘘を吐く罪悪心に苛まれつつも、そんな俺の話を真剣に聞いていた彼女は、

「そうだったの? 月城くんに生き別れた妹さんがいるなんて知らなかつたなあ。でも良かつたね! またその妹さんと一緒にいられるようになるつて事は良い事だと思つよつ」

「あ、ああ。うん。ありがとう」

うつむ、ここまで素直に信じてくれるとはさすがに思つていなかつた。

「ちわーっす、委員長! ……つてあれ、なんで月城がいんの?」

と、俺と沢富さんが会話している所に一人の男子生徒が扉を開けて教室へと入つてきた。そいつはさも俺がここに居る事が不思議そうな顔でこちらを見つめながら、「珍しい事もあるもんだなあ、お前が俺より早く来るなんて」

「うるせえ。俺だつてたまには早起きする事だつてあるんだよ」

コイツの名前は防人淳さきもりじゅん。沢富さんと同じく、俺の学友である。つ

ーかこいつはこんな朝早くから毎日登校してやがんのか? 初めて知つたぞ。

「おはよー、防人くん」

「おはよーさん。で、こいつどした?」

あからさまに俺の方を指差しながら、防人はまるでいてはならぬものが何故ここにいるのか教えてくれと言わんばかりの表情で沢富さんに問い合わせていた。おい防人、お前は人を指で差すなど親や先生に教わらなかつたのか。この不良生徒め。

「あ、月城くんは生き別れの妹さんと同居中なんだよ。それで今日は朝起こしてもらつたみたい」

「はあ……」いつに妹なんていいたのか？　いやいやいるわけねえよ
などうせただの妄想だろこの一次元中毒者め、やーい幼児性愛者ロココ」
こいつ、言いたい放題言いやがつて　「あのは、俺だつてつい
最近までは知らなかつたんだよ。まだ物心の付かない頃にすでに海
外へいっちまつてたらしくてさ。最近、つーか昨日になつていきな
り俺んちまで来て一緒に住まわせうだなんて言つんだから俺自身未
だに動搖してるわけだ。妄想かどうかは俺だつて自分の脳みそを詳
しく解析して現実を知りたいわけだが、少なくとも俺に妹らしき人
物がいるつーのは今現時点では事実だとしか言いようがない」

なんて俺の長つたらしい虚偽説明（脳内を詳しく調べてみたいの
は割とマジだが）をふんふんとどうでも良さそうに聞いていた防人
は、突然ニヤリと氣味の悪い笑みを浮かべると、「じゃあ丁度いい
や。今俺彼女いねえから紹介しろよお前の妹さん。お前の妹なら別
に問題ないだろ？」

「お前はいつもソッチ方面に話を持つていきやがるところが嫌い
だよ」

「あはは、冗談だつての！　でもよ、本当にお前に妹がいたならお
いしい思いしてんじやねーの。お前の話を聞く限りじゃ気持ち的に
や他人も同然だし、そんな女の子と同居だなんて羨ましいぜ」

「そうか羨ましいか、ならお前に役目を譲つてやっても良いぞ。口
いつならきつとルナと同居しても上手く……、いや、やっぱ却下。
「そんな田で見るなよ。でも羨ましいつーのはマジだぜ。あー、
俺にも彼女がいればなあ」

「あ、沢富さん。そう言えばさつきまで掃除してたけど、もういい
の？」

「おいらめえ無視かよ！」

「あ、えっと、あとちょっと掛かりそんなんだけど」

「じゃあ手伝おうか。えっと、篠もう一つあつたよな。どこにあつ

たつけ

「ほんと? ありがと月城くんっ。あ、こつちだよこつち」

部外者約一名を完全放置して、俺は沢富さんと教室の掃除にいそしむ事にした。こつちのほうが今の時間を過ぎるにはよっぽど有意義だろう。あの女好きのぐだらない話を聞いているよりかは確実に。

さて、そんなこんなでクラスメイト達も増え始め、時刻はホームルームの時間へと差し掛かっていた。いつもの如く、担任の女教師ある波上葵先生は何故か時間になるまで教室にて生徒達とのコミュニケーション活動（本人はそう言い張っているのだが、正直どうみてもサボっているようにしか見えない）にいそしんでいて、何やら転入生がどうのと言う会話が少し聞こえてきた気がする。ふむ、その調子だとルナは全教師の洗脳に成功したんだろうか。魔法なんてものを使つたかどうかはこの際どうでもいいが、なかなか手際はいいように思える。なんてつたつて、この学校の教師全員だからな。それは一筋縄ではいかないとと思う。ホームルーム五分前になると、担任の波上先生は職員室へと戻つていった。一体あの人は何をしているんだろう、本当に教師なのかと疑いたいくらいだ。他の教師達は一体どんな目で彼女の事を見ているんだか。生徒と自主的にコミュニケーションを取るのはまったく良い事だと言つてやりたいが、せめて休憩時間とか昼休み中くらいにしておかないか、と言つ突っ込みはもう今となつては誰もしない。

「はあ……」

そんな事を考えながら、俺は自分の机で頬杖をつきながらホームルームの開始を待つていた。ルナは俺の妹だつて言う設定なんだからひとつ下の一年何組かに転入するんだろうな、などとどうでも良い事を淡々と考えている内に我らが担任、波上先生が教室へとやって来た。と言うか戻ってきた。いつも通りのニッコリスマイルを浮

かべた美人教師である。前に年齢を聞いたが二十代前半だとしか聞き出せなかつたな、そう言えば。

「はーい、皆さんおはようございます」

これまたいつも通りの挨拶である。すでにさつき会つてゐるんですけどー、なんて言つ突つ込みもこれまた誰もしなくなつた。日常茶飯事の出来事には次第に誰も何の疑問も持たなくなつてくるんだろう。俺はと言うと、いつも遅刻ぎりぎりに登校している為があまり彼女とはこのホームルーム以前の時間に会う事は少ない。だから少しまだ疑問を浮かべる程度の余裕は残つてゐるわけで。

「今日は皆さんに重大なお知らせがあります！」何を改まって、と俺は頬杖をついていた右手を直して話を聞く体制に入つてみる。「今日、朝に先生とお話していた人は知つているかもしませんが、今日は転入生が一人このクラスにやつてくる事になりました！」

はあ、転入生ね。可愛い女の子がいいな。

「もうすでにその扉の向こうにきてるので呼んでみましよう。入つてください！」

静かに扉が開かれ、その向こうからは見慣れた金髪の少女がつておい、ちょっと待て サラリとした金髪を靡かせながら、ゆっくりと静かに教壇の前に立つと、どこからどう見ても俺の知つている自称魔法使いなその少女・ルナは、周りの注目を浴びながら一息ついた後、後ろにある黒板に白いチョークで名前を書き始めた。
月城瑠奈。あえて漢字なのは、そうしないと無駄に疑われる可能性があるからか？

「初めまして。この度この学園に転入する事と成りました、月城瑠奈と申します。少し複雑な事情がありまして、海外からの転入で少し戸惑う事や解らない事が多々あるとは思いますが、どうぞ仲良くして戴ければと思います」

ざわざわと教室内がどよめき出す 完璧な優等生ぶりを發揮した挨拶を終えると、金髪少女ルナは俺の方をチラッと見てムカつく微笑を一つ送つてきた。そんな馬鹿な。まさか同じクラスに転入し

てくるとまでは完全に予想外だ。しかし確かに有利得る事だと言うのにどうして気付けなかつたんだ、そもそもこの学校に通う目的は俺の監視だつただろうに。失態だ。無駄に精神的ダメージを貰つてしまつた。

「瑠奈さんは苗字を見ての通り、このクラスの月城昂くんの双子の妹さんだと言う事です。皆さん、是非手を取り合つて彼女と仲良くしてあげましょう!」

これも全部お前の予定内の事なのか、ルナ。「それじゃあ、月城くんの隣の席が空いてますね。そこでお願ひします」

「はい、解りました」

確かに隣の席は空いてるけどな。だが、これぱつかりはさすがに偶然だ。席替えをしたのも随分前の事なんだから、まさかここまで操作しているとは思えない。偶然とは恐ろしいものだと痛感する瞬間だつた。

「……上手くいったみたいね。宜しく、昂お兄ちゃん」

ルナはスタスターとこれまで優等生ばかりの優雅な歩き（こんなのが見た目だけだ。この猫被りめ）で俺の隣の席までやつてくると、小声で俺にしか聞こえない程度に呟いてきた。こいつ、やめろと言つたのに。これならまだ兄さんのほうがマシだ。この歳でしかも双子の妹（と言う設定なだけだが）にお兄ちゃんなどて校内で呼ばれてみろ。周りからどんな目で見られるか解つたもんじやない。

で、教室内はと言うとまだわめいていた。そのほとんどの視線は俺とルナへ向けられていて、何やら珍しいものを見るような目線をひしひしと感じる。「う、ここまで他人の視線が痛いと思つた事はない。

「はい、皆さん静かにしてください。それじゃあホームルームを始めますよー」

かくして、俺はルナと同じクラスになつてしまつた。とりあえず一つだけ言いたい。ルナ、初めからそのつもりだつたのなら前もつ

て俺に教えておいてくれ。あまりに唐突過ぎて寿命が縮まりそうな気分なんだよ、今。

ルナがこの学校へ転入してきたと言つ事スクープ実は、金髪で美少女で留学生だと言つ事も相まって早々に学校中の噂となつて広がる事となつてしまつた。ああ、いつも思うがこの学校はこう言つ事に関しては情報の伝達速度が半端ないな。感心してる場合ぢやないけど。その転入生が二年B組の月城昂の双子の妹である、なんて情報がとつくに出回つているのも当然なわけだ。それを聞きつけてまず疑問に思つ奴は多々いるだろうが、そんな次元ぢやない疑惑を抱く人物が実は一人だけこの校内に存在している。これで三度目だろうが、もう一度だけ言おう。俺には同じ年の幼馴染がいる。それも、俺の事なら多分何でも知つてるんぢゃないかと思えるくらいの奴が。

「こりーつ、昂！ あんた一体何をしでかしたの！」

昼休み。さてこれから購買にでも行つて飯にありつくとするかと重い腰を椅子から上げたその時だつた。教室の奥側の扉が勢い良く開けられたかと思うと、その向こうから突然別クラスの女子生徒が半ば乱入するかのように飛び入つてきたのである。それも、俺に向けて奇声を発しながら。

「昂お兄ちゃん、あれ誰？」

小声ですかさず隣の席のルナが聞いてくる。俺は適当に、「ああ、幼馴染だ。多分あいつにだけはどんな説明しても納得してくれないからその時は頼む。……あとお兄ちゃんやめろ」などと言つ返事をして、すかさず今にも暴れ出しそうな幼馴染であるそいつの所へと向かつた。

「……うるさいぞ紅憐。くれん 周りを見てみろ、じつちはついさつき授業が終わつたばかりだ。ちょっとは人の目を気にしたらどうだよ」

「うつさいわね、それよりもう言つ事よ。あんたに生き別れた妹が

いて今日転入してきた、とかさつき噂で聞いたんだけど。あたしの記憶が正しければ、あんたにそんな妹なんていなかつたはずよ。どう言つて事なの？」

「こりゃ説明するまでもなく手が付けられん。俺はちらりとルナの方へ目線を向けると、「仕方ないわね」と言つた表情でルナが近寄つてくる。

「ここにちは、わたしは月城瑠奈と言います。貴女は？」

「俺の幼馴染であるそいつは、むすつとした表情でルナを睨んだ。
朝雛紅憐！ 言つとくけどあたしがこいつに關して知らない事なんてないんだから。あなたが何者かは知らないけど、何のつもりで

昂に近付いてるわけ？」

なんとも聞き取りようによつては恥ずかしくなるような事をさらりと言つてのけてくれる幼馴染こと朝雛紅憐だが、やはりコイツに何を言つても説得しようが無い事はルナにも理解して貰えたらしい。ルナがこちらに一警をくれるのを確認して、俺は軽く頷いた。

「あら、紅憐さん……ですか？」お久しぶりです。わたしの事、覚えてますよね？」

すかさずルナは鋭い眼光を紅憐に向けると、少し強調させた言葉を紅憐に放つた。

「え？ あれ？ …… 瑠奈？」

おいおい、まさか今のが洗脳の魔法かなんかだつて言うのか。まるで催眠術じゃないか。魔法使いつて言うよりは超能力者か何かじゃないか、こいつ と、俺が色々と考えている間に紅憐はすっかり荒れた気分も晴れてしまつたようで、なんともまあこんなに上手くいっちまうとさすがに俺でも度肝を抜くといふか、少しさはルナの魔法つてやつを信じてしまつてもいいかなと思えてくる。いや、魔法じゃなくて超能力か。この際どつちでも良いけど。とにかく事実は認めなればならないだろう。先程まであれだけ騒いでいた紅憐

が、

「あ、ごめん……なんで忘れてたんだろ。うん、久しぶりだね！」

こんな具合だからだ。

「ううん、無理も無いわ。だつてすゞぐ茜の事だもの。でも良かつた、思い出して貰えて」

そんなやり取りを見つめながら、俺は口を開かないまま呆然としているしかなかった。だつてそうだろ? 田の前でこうまでされちゃ、何も言えないのは当然じやないか。

「で、どう言う仕組みだ?」

紅憐が教室から帰つて行つた後、昼食である購買のパンとジュースを戴きながら、周りの生徒たちに聞こえない程度の小声で俺はルナに向かつてそう問い合わせた。

「簡単。あの人……朝離紅憐に『昔、月城瑠奈と言つ知り合いがあった』と言つ錯覚、幻覚と言つてもいいかな、それを植え付けたのよ。目には見えない力、魔法を使ってね」

「魔法、ね……。俺にはどう見ても、良くて催眠術のようになしか見えなかつたんだがな」

そう、確かに考へても見ればあれを『魔法』だと決め付けるのはいたむか早いだろ?と思つ。あの程度なら催眠術で説明がつく。とてもではないが、魔法なんてファンタジー溢れるものだつたとは思えない。ルナの魔法がそう言つものなのだと何度も説教されてはいるものの、やはり突つ込まざるにはいられなかつた。

「ふうん。貴方は催眠術なら信じるんだ」

「ん、どう言う意味だよ」

「だつてそうじやない。催眠術って、それが一体全体どう言つ仕組みなんか貴方には解るわけ? 普通ならまず解らないでしょ? でも、世の中には催眠術なんて言葉は有り触れている。……まあ、これも一つのトリックよね。『催眠術と言つものは存在する』と思われている、周りがそうだと言つだけで存在自体を肯定する それ

は人間の心理でもあるわけだし。それに比べて『魔法』って言うのは、言葉は知られていても事実存在しているかと言わればほとんどの人がしていないと答えるわ。それはその魔法と言う言葉、存在の扱いが世間ではあくまでファンタジックなものであるからよ。

「ふむ、難しいが理解できなくはない」

ルナは話を続ける。

「わたしの使う魔法って言うのは、そう言つた世の中が勝手に定義化^{イズ}したような存在ではないの。もつと別次元、別意識の存在。わたし達のような魔法使いでしか理解できない、世間から隔離された技術とでも言うべきかしらね。実際はもつときちんとした理論があつて初めて扱われる力なのよ。さっきの催眠術じみたわたしの魔法だって、一概に仕組みだけ考えれば世の中の言う催眠術つてものと大して変わらない。でも少し違う部分がある。そこ部分があるからこそ『魔法』なの」

「その部分つてのがどう言つ仕組みなのか、つてことが俺は聞いたいんだけどな」

ルナはさらに話を続ける。

「例えば、催眠術は人間の意識を一定の場の空氣や雰囲気、心理的な言葉や問い合わせ、視覚的な動作、聴覚的な音色などで対象の精神に干渉する。眠らせたいなら単純にそういうた雰囲気を作り出し、眠くなるような言葉や目を疲れさせる振り子とか、心地のいい音やメロディを奏でたり……そういうた、誘導するためのフィールドを作成、構築する。そして初めて催眠術って言うのは完成するし、かかる。かかるない人だつているけどね。かかりやすい人つていうのは単純に感受性が良いからとかそんなものよ。ここまで解るかしら?」

「ああ」と、適当に相槌を打つてみた。

ルナはさらに言葉を続ける。

「で、わたしの場合。さつきのやり取りを見てれば解ると思うんだけど、そう言った『動作』を何一つ行っていないでしょ。ただ一言、

『お久しぶりです』と、『わたしの事を覚えてますか?』と言つた、聞いただけ。これだけなの、わたしの場合は。それだけでわたしが植え付けたいと思つた『錯覚』を彼女に与えた。わたしはこれを『言葉の魔法』^{ワードオブマジック}と呼んでいるわ。ようするに催眠術と違うのは、視覚的、客観的に見ると何の仕掛けも無い言葉だけの洗脳、つてわけ

ふむふむなるほど、ここによつやく俺が口を開く番がきたわけだ。

「ようするに超能力か」

「違うわよつ! もう、何度も言わせたら解るの?」どうやら少し怒

らせてしまつたらしい、ルナは口の先を尖らせながら、「あのね、

『言葉の魔法』^{ワードオブマジック}に魔法つて言う定義をつけるには確かに今の話じゃ無理があると思うけど、これはあくまで視覚的、客観的に見た場合の話。魔法だつて定義されるからには、きちんとした見えない部分での理由があるんだから」

「へえ、それはなんなんだ とは、俺が聞かなくとも勝手に語つてくれそうだ。

「魔法つていうのは、いろんな思想、いろんな構想、いろんな錯想があつて生まれるもの。個人によつて使う魔法つて言うのはすごく差が生まれるし、それのがぜんぜん違うタイプの魔法使いつて区別されるのが普通なの。逆に言えば同じような魔法を使う魔法使いが一人以上出でくるほうが稀つてくらい。でも、そんな魔法にもひとつだけ、本当にひとつだけ共通する点がある。それが『魔力』な

の

「魔力…… ようするにMPみたいなもんか?」

ゲーム的発想で横槍を入れてみる。が、当の語り手ルナ様は不満そうな顔だった。

「当たらずとも遠からず、ね……。魔法を使うために消費するものつて言う点ではおんなじだけど。魔力とは人間の中にある物質的ではない力の事を指しているの」ルナはそう言いながら教室の窓を左手で開いて、「これは物質的な『力』でしょ。物を動かすための力。

普段、何気なく使っている力よね……で、魔力っていうのはようするにそうではない力のこと。物質的ではなく別次元的な力、とでも言つのかしら。ようするにそういう力が作用して初めて『魔法』と認定される。魔力が使われなければそれは魔法とは呼ばないの。だから、催眠術だって魔力を使わなければそれは魔法じやないし、少しでも魔力が使われればそれは立派な魔法なわけ」

「やばい、さすがにそろそろ頭がこんがらがってきた。

「わたしの『言葉の魔法』には、わたしの言葉自体に魔力が込められている。相手がその言葉を聞いた瞬間に、それをそうと信じ、錯覚してしまう。そうさせる力が込められているの。そうね、催眠術ってさっきも言つた通りかかる人とかからない人がいて、それはその人の感受性の問題だつて話をしたけど、わたしの『言葉の魔法』の場合はそんなものを無視して強制的に幻覚を植え付ける。それが誰であろうとも関係なく。それが魔力を込めているおかげ。魔力を込めている証拠。魔力を込めている所以。だからこそ『魔法』、そしてそれを使とするわたしこそが『魔法使い』ってこと」

「……ん、でもおかしくないか。その魔力ってのを込めていれば相手がなんであれ構わず確実に錯覚させられるんなら」俺は親指を自分に向けて立てて、「俺はどうなるんだよ。俺には一切合切その魔法とやらは効いてないじゃねえか」

そう、それこそが俺の最大の疑問だった。確かに目の前でその力を使われ、それらしい説明も受けて信じてやつてもいいとまで思えるのだが、そこまでだつた。そこまでしか俺は思えない。『信じる』事ができない。未だに半信半疑でいるのだ。それはきっと、自分が掛かっていないからなのだろう。実際に自分の身で体感しない限り、人間と言う生き物は完璧に信じる事ができない。

「それが、わたしも不思議なのよね……」ルナもそこだけが理解できないと言わんばかりの表情で、「わたしが本当の妹だと錯覚させるために『言葉の魔法』を貴方に使つたつていうのに、いざ次の日になるとアレだし、昨日の事は忘れているし。今まで失敗なんてし

たことがなかつたから、正直すごく戸惑つたもの、わたし」

昨日の記憶

確かに途切れている部分があるのは自分でも解る。

昨日のうちにルナと出会つていたと言つ事実だつてそうだし、何をして何を見て何があつたのか 全て覚えていない、これだけは確実だつた。だからこそ今のこの状況がどうしようもないのだけれど。

「昨日、いつたい何があつたんだよ。思い出せば全て理解できるつてルナは言つけど、何があつたのかぐらい聞かせてくれてもいいんじゃないか？」 そうすれば、もしかすれば思い出せるかもしれないし。脳みそいじくられんのは勘弁だけさ」

「うーん。そうよね、となるわよね。まあいいんだけど。あー、

……困つたわね

「何が困るんだよ

「まあ、なんていうか。端的に言つと特に何もなかつたわよ。ただわたしが戦つてたところを見られちゃつたつてだけで」

「戦つてた？」 それつてどう言つ事だよ と、問い合わせる前にルナが語り始める。

「ようするに、別の派閥の魔法使いが襲つてきたのよね。地位獲得のためかしら、結構強くて焦つたんだけど。なんとか撤いたみたいだし多分もう大丈夫だけどね。その戦いの一部始終を貴方に見られちゃつたわけ。それだけよ」

「派閥、襲つてきた、地位獲得……つて、どう言つことだよそれ？」

「説明すると長いんだけどね。ま、簡単に説明すると魔法使いつていうのは普通、派閥つていう組織みたいなものに属してるの。その派閥だけど、いろいろあつて違う派閥同士での闘争が絶えないよね。特に扱える魔法の強力さに関して競い合つてる。確かにそうすることが目的で作られた派閥だけれど、ちょっと最近過激すぎると言つて、死傷者まで出してたりするわけ。それが、自分の魔法がそいつの魔法より優れているんだつて証明するのに一番手つ取り早い手段だから。挑まれたほうも挑まれたほうで大変よね、そういうた戦いとか強さを比べるだけのようならば魔法使い相手にするのはほ

んと疲れるし。そもそもそういうた部類が専門じゃない魔法使いだつていっぱいいるのに。今じゃ強ければ正義、勝つた者のほうが優れている、みたいなレッテルが貼られる現状なの。**魔法使い**^{イコール}**戦**う者、強さを求める者、みたいな。わたしだってそういうた魔法が使えないわけじゃないんだけど、専門分野はそっち方面じゃないから困ってるわけ

なんだか、いつのまにか凄く物騒な話になつていてる気がするんだが。戦う魔法少女・ルナは、飽きる事なく話を続ける。

「んで、まあそやつて厄介払いをしてる時に貴方と出会つたつてわけ。もちろん一部始終を見られちゃつたみたいだつたから逃げる時だつて連れて行かないわけにはいかないし、そりやもう大変だつたのよ。うまく撒いた後は貴方の対処で忙しいし もう忙しかつたからあんまり覚えてないけど、そんなこんなで結局貴方をどう対処するか考えた結果、今の結論に至るわけ。あんまり覚えてないとは言え、貴方をわたしが気にいらなかつたら最悪殺してたかもしれない。まあわたしはそういう物騒なのつて好きじゃないから、良くて派閥に送還してこっちの世界に引き入れるとか方法がないこともないけど、それもそれで他人の人生勝手にいじくりまわしてるみたいでいい気分しないし、結構悩んだのよ」

今でも十分いじくりまわされているとは思うのだが、今の話を聞いていると最悪な結果にならないだけマシだつたとも思える。もちろん、全ての話を信じるならば、だ。

「ま、大体そんな感じかしら。どう? 何か思い出せた?」

「いや残念ながらまつたく。むしろ今の話を聞いて余計に疑い深くなつたかもしぬないってぐらい」

「……そう。ま、そのうち思い出すわよ。気楽にいけばいいわ。というかわたし的にはすぐに貴方の記憶が戻っちゃうとここまでした努力が水の泡だし、それなりに現状を楽しみたいし、別に今すぐは戻らなくていいんだけど」

おい、それはさすがに俺が困る。まあこんな美少女（あくまで以

下略）が妹だつていう、御門風に言えぱおいしにシチューニー・ション
なんてそつそつ巡つてこないのだりつし、こには流れに流れられてみ
るつてのも悪くはないと思つけどや。でもだからといつて、記憶が
戻らなくていいつて事にはならな」。

「それにしても」不意にルナが口を開いた。まだ何があるのか、と
思いながら黙つてその顔を観察しながら、「……学校の購買のパン
つてこんなにも不味いものだつたのね。パサパサしてゐし具は安物
っぽいし、それにこのコーヒーだつてとてもじゃないけどコーヒー
と呼びたくはない味よね。不味すぎ」

まったくさつきまでの話とは関係のない、突拍子もなげどうでも
いい話題を振られた。

放課後。俺は部活なんてものに入つていないので、毎日のよう
帰宅部である。仲の良い友人達はほとんどが部活に入つてる現状、
いつも「ことく俺は一人寂しく下校する はずなのだが。

「帰るわよー、お・に・い・さ・ま？」

こいつがいるのを忘れていた。

「なんだそれ気持ち悪い、お兄ちゃんの次はお兄様かよ。お前、意
外とマニアックだろ」

「あ、お前つて言つた。お前禁止！」

「じゃあ俺からも言わせてもらおう、普通に呼べ」

「なによ、ちょっととからかつてみただけじゃない。つれないわねえ。
なによ、それじゃあわたしになんて呼んで欲しいわけ？」

それは何度も言つてるような気がしないでもないが、まあいい。
この際はつくりとさせてやる。

「昂だ。名前で呼べよ、呼び捨てでいいから。はつきり言つて、お

前に兄呼ばわりされるのは背筋が凍る」

「そそるの間違いじやなくて？」ルナはにやつきながら、「ま、別

に貴方の呼び方なんてどうでもいいんだけどさ、一応体裁上ではわたしの兄つてことになってるんだし、そう呼んだほうが違和感がないと思つただけよ。……ふうん、それにしても名前で呼べだなんて、貴方もしかしてわたしに気があるの？」

「な、なんでそっち方面に話が進むんだよこのマセガキ！ それに、名前で呼べって言つたのはお前もだろ！」

「あーもう、さつきからお前お前つて言わないでよね。別に名前で呼んでほしいわけじゃなくて、お前つて言われるのがほんつと嫌いなだけなんだから。別にお前つて呼ばないならなんて呼んでくれてもいいんだし」

そこまで嫌悪するのは何か事情があるのだろうかと少し思つたが、こいつの事に関して深く考へても意味がない気がした俺はすぐに思考を停止させた。俺の場合他人を呼ぶときは基本的に苗字を使うんだが、こいつは俺と同じ用城の姓を名乗つているからかそつちでは呼び辛い。ま、今まで通り名前で呼べばいいんだろうけど。

「わかったわかった、悪かったよ。俺もちゃんと呼ぶから、お前もそれなりに恥ずかしくない呼び方でよろしく

「うーん、じゃあ兄貴？」

「……似合わんからやめれ

「それじゃ兄くん」

「一部にしか解らん呼び方をするな。つーか兄呼ばわりはやめてくれないのね……」

「もちろんよ。こひいう妹キャラつてのは大事なんだから」「キャラかよ。やっぱこいつ隠れマニアとかじゃないだろうな。

「ま、初心に戻るつてことで兄さんね。名前入れてほしいなら昂兄さん。ほらほら、早く帰るわよ昂兄さん

「はいはい、解つたよ」

椅子から重い腰を上げ、机の上に横たわつて置かれている鞄を右手で取つて、俺はルナと共に教室を後にする。扉を抜けて廊下に出ると、何やら見知つた顔が立つっていた。

「あ、昴やつと出てきた！ 瑠奈も一緒に？ ちょうどよかつた、今田部活休みだから今から帰るところなんだけど、三人で一緒に帰らない？」

朝雞紅憐がそこにいた。

「お、紅憐珍しいな。つーか、もしかしてそこですか」と待つてたのか？

「へ？ ああ、うんそうだけど。あんた昼休みにあたしに言つたじゃない、ちょっと騒ぎすぎだつて。一応これでもあれから反省したんだからね。クラスの人達に迷惑がないようにつて外で待つてた」いや、別に騒がずに俺を呼べばいいだろうに。そう言つ所はなんていうか健気なやつである。

「ね、瑠奈も一緒に帰るんでしょ？ 三人で帰るよ」

「ええ、わたしは全然構わないわ。なんていつたつて久しぶりに会うんだもの、色々とお話もしたかったし」

「じゃあ決まり、ほら行くわよ昴！」

俺の意思是無視かよ。ま、別段断る理由なんてないけどさ。

帰り道、いつものように見慣れた風景を眺め歩く俺 と、イレギュラーが一名。俺はというと、先頭を賑やかに会話を弾ませながら歩く二人の少女の背中を見つめながら、いまいち会話に入り込めない異様な空気って言うか雰囲気に押されていたりする。女同士の会話ってなんか男じや入り込めない壁みたいなもの、感じないだろうか。少なくとも俺は感じる派だ。そんな中、ふと会話の内容が聞こえてくる。ルナだった。

「ねえ、紅憐は魔法使っていると思う？」

おいおい、どんな話題をしているのかと思つたらきなりネタバレか？

「ううん、どうだろ。あたしはあんまりそういう言ひのひて信じてない

かも。冷めてるつて思われちゃうかもだけど、魔法とかそういうのつてあくまで物語とか架空の存在だと思ってるからさ。ルナは信じてたりするの?」「

まあ普通はそういう反応だらうな、幼馴染が平常で良かった。

「わたしが信じてるか信じてないかは置いておいて、実際にこの世に魔法使いつて言うのがいても、それは別に不思議なことじゃないとは思えないかしら。たとえば、マジシャン手品師マジシャンって居るよね」

「うん」

「手品つて、はたから見ると凄く不可思議で、意味不明で、一体全体どうなってるのか解らないでしょ? 特に有名な手品師マジシャンとなるとなおさらね。さう言つた手品と、わたしが言つ魔法つてどこが違うんだと思う? 何も違わないように見えない?」

「つまり、瑠奈は手品が魔法だつて言いたいの?」

「うーん、それはちょっと違うかな。手品つて、見た目だけなら普通の人にはどういう仕組みなのかわかんないじゃない。むしろわかつてしまつと面白くない。だからこそその手品であつて、でもそれは目の前で現実として有り得ている。はたから観ていると不思議に思えるような、目に見えない仕掛けがあつて手品つて言つのは完成されるわけ。わたしが思うのは、魔法だつて結局同じものなんじゃないかしら、つてことなの」

自称魔法使いでありながら、魔法とは存在するのか否かだなんて話題をしてどうするつもりだらうか。いや、相手が紅憐だからこそそういう話題になつてしまつてしまつているのかも知れないが。

「なるほど。ようするに、魔法だつて手品と同じで本当は目に見えない仕掛けがあるつてこと? それはそれで、ちよつと夢が壊れちゃうよくな気もするけど」

「うん、確かにそうよね。でも、わたしはそんなんじゃないかと思ひ。ここでもう一度、さつきの問いを反復するけど 紅憐は、手品と魔法の違いは何処だと思うかしら?」

「簡単だよ」紅憐は予想を裏切るような清々しい声で、「その存在

が現実として知られているか、そうでないかじやない？ 手品つて普通にテレビとかつければやつてるけど、魔法はまったくやつてない。誰も見たことがない、だからこそ誰も信じていない。そこが手品と魔法の違うところじやないのかな？」

「御明察」ルナは少し嬉しそうに、「そう、魔法なんて存在は世の中じゃ非現実扱い。^{オカルト}実際に見た人はいないし、空想の世界の産物だという認識が一般常識。でもよく考えてみて。それなら、どうして魔法という言葉はこんなにも広まっているのかしら。現実に存在しないと思われているのにもかかわらず、魔法つて言葉や知識、存在は広く認識されている。例え非現実扱いなのだとしても、それを知らないって人のほうが珍しくらいに浸透しているわ。何故だと思う？ わたしはこう考える。『魔法使いは実在する、もしくはしていた。だからこそ魔法という言葉はこうして広まった』んだ、ってね」

「難しいね……。でも、確かに無から有は作り出されない。魔法つて言葉がここまで広がったのは、その存在が実在していたから、か。うん、良い考えだとあたしは思うよ」

なんだこれ、いつの間にか紅憐がルナの話に犯されてないか。まさか例の魔法とやらを使つてるんじゃないだろうな。そうする理由が見当たらぬから、使つてないとは思うんだが。

「うん、ここでわたしはさらに考える。それならどうして、手品のように世の中に公表されないのか。現実に存在しているのならば、何か理由があつて世間一般の目に触れられないような事情があるんじゃないか、つて」

「それは、今現在の話？ だとするとそれは微妙だよ、瑠奈。だって、魔法がもし存在していたのだとしても、今現在まだ存在しているのかは解らないじゃん。確かめようもないしね。あたしはこう考えるな。『魔法は実在していたけれど、その力があまりにも非現実的だったため誰にも認められなかつた。だから廃れた』んじやないか、つて」

あれ、紅憐ってこんなキャラだつたか？確かに成績良いのは知つてるけど。ちなみにどれくらい良いのかというと、ざつと俺の二倍は軽く取れる女だ。くそ忌々しい。

「本当にあつたのかはあたしには確かめようがないし、証明しようもないからはつきりとは言えないけどさ。きっと昔、大分昔に誰かが魔法を発明して、したのはいいけど迫害されちゃって、そのまま言葉や存在だけが非現実的なものとして伝わってしまった。結局その存在は認められずに魔法はなくなつた。ううん、今も残っているのかもしけないけれど、やっぱり誰も信じない程度のものでしかないんじゃないかな。きっと魔法は誰にも解らない、科学では説明のできないような力なんだと思う。だからこそ信用されないし、認められなかつた。人間つて、説明のつかないものは大抵信じないからね。だからきっと、実在していたとしても世間に認められないものだつていうのは変わらないと思う」

「ふうん、なるほどね。それが紅憐の考え方か。……うん、すぐ真理をついていると思う。正直少し驚いたわ。てつきり頭ごなしに馬鹿にされるんじゃないかと思つてたから。ここまで真面目な返答がくるとは思つてなかつた」

「あたし、こう見えて実は結構こういつ話つて好きだからね。普段どんな服を着るのだとか、何をして遊ぶのだとか、携帯の新機種がどうだのだとか そういう普通すぎつまらない話より百倍面白いし、話し合う価値があるしさ」

俺としては有り得ないものの話をしても意味があるように思えないのだが、そこはそれぞれの価値観といつた所だろうか。ルナは事実有り得るものなのだと確信している上であえて話しているわけだし。

「ふふふ。わたし、紅憐とはすぐ気が合いそう」

「うん、あたしもそう思つてた」

なんだかんだで、今日たつた一日で一人はそれなりに仲良くなつてしまつたようだ。例え、そのきっかけがルナの魔法によつてもた

らされた、偽りの関係だったのだとしても。

紅憐とは自宅であるマンションへ向かう途中の交差路で別れた。さらに寛中にあるコンビニエンスストアに寄った俺とルナは、今晚のおかずを買うことにした。もちろん割り勘で。ルナ曰く「妹なんだから奢ってくれてもいいじゃない」とのことだが、お生憎様、俺にそこまでの資金力はない。丁重にお断りさせて頂いた。そんなこんなで、俺とルナは自宅のマンションへと帰宅した。一階の入り口にはオートロックが掛けられている扉があり、特定のパスを入力しなければ中に入れない仕組みになっている。さらには至る所に監視カメラがあり、なんとも厳重な警備体制である。俺はロックを解除するために、パスを入力しようとして、「……あれ?」ふと、ひとつつの疑問の壁にぶちあたった。

「なあルナ、昨日って俺がルナを中心入れたのか?」

「え? 違うけど。昨日はわたしが勝手に夜中に入ったのよ。それがどうしたの?」

いやいや、どう見てもおかしい部分が目の前にあるでしょうよ、ほら。

「どうやつて中に入った? ここ扉にロックが掛けられてて、パス入力しないと中に入れない仕組みになってるんだが」

「ああ、そんなの簡単じゃない」ルナは面倒くさそうに呟いて、「このマンション周辺で入り口付近を監視しておいて、誰か住人が入り口付近に近づいたら一緒に中に入ればいいだけじゃないの。住人一人がこのマンションに住んでる住人全員を把握しているとは到底思えないし、どう考へても怪しまれたりはしないしね。それだけの事」

なるほど、聞く限り特別おかしなことはやっていないようだった。ルナのことだ、魔法やらを使って壁をすり抜けるとか、窓の近く

までジャンプするだとか、扉を壊して中に入つて修復しなおすとか、そういうふた突拍子もないことをやらかしていないかと少し心配になつてしまつた。まあよく考えればここには監視カメラもある。映像記録に残るような場所でそういうふた行為を行わないのは当たり前と言つべきだ。

「それならいいんだけどさ。……実際問題、本当にいいのかどうかはこの際おいといて」

そう咳きながら扉のロックを解除して、マンションの中へと入る。いつ見ても豪華で豪奢なマンションである。とても俺のような平凡で貧乏な高校生が一人で住めるような場所とは思えないだろう。事実、これで一度目にも関わらず辺りを見回してはもの珍しそうな様子でルナが突つ立つっていた。

「それにしても意外つていうか。貴方、よくこんなところに住んでるわよね。しかも一人暮らしなんだなんて、少し贅沢すぎやしないから。さつきのコンビニでの件を踏まえて見るとしてく不思議なんだけど。なに、お金持ちの親でもいるわけ？」

「悪かったな、ケチくさい貧乏学生で」俺は皮肉交じりに悪態をついて、「ここには元々家族で暮らしてたんだよ。確か一年と少し前かな、両親が死んでた」

「……え？」

「交通事故だった。あつきたりだろ？　あつきたりすげて笑えてくるよな。

なんつーか、まあそんな事があつて俺は天涯孤独の身、ポジティヴに言い換えれば自由気ままな一人暮らしを送ることになつたわけださ。俺の部屋は両親が買い取つたもので、それをそのまま相続したから家賃もいらねーし、毎日の食い扶持くらいは少しのバイトで稼げる。ま、だからあんまり余裕ないんだけどさ。そんな複雑そ�でそもそもない事情があるつてわけ

「…………」

何故かルナは黙り込んでいた。おいおい、まさか今の話で気に障

つたのか？ 別にルナが気にするようなことは何もない、と言つよ
り関係のない話なんだから他人事のように聞いてくれるのかと思つ
たんだが。

「なんだよ黙り込んで。なんか気に障つたか？」

沈黙の中、エレベーターが到着した。扉が開く。ルナは無言でそ
の中へと入つていった。

「お、おい。待てよ」

俺もその後を追うように、エレベーター内部へと脚を踏み入れる。
瞬間、閉まる扉。動き出す機械の箱。唸る駆動音が静寂を包み込み
ふと、ルナの口が聞く。

「……そつか、死んじやつたんだ」

顔を伏せて、ルナは呟いた。まさか、俺の両親が死んだつてこと
を気にしているのか？

「ああまあ、そうだけどさ。別にもう俺は気にして」そこまで
言いかけた時だつた。瞬間、信じられない出来事が起こつた。いや、
これは有り得ない光景だと言つてもいい。「ちょ、おいルナ
ルナが俺の胸元に顔を埋めていた。

おいおいちょっと待て、これはいくらルナでもさすがにまずいも
のが……。

「……ごめん」ふと、何かが聞こえた。ルナの声だつた。「ごめん
なさい。わたし、何も知らないで……家族ごつこだなんて、勝手に
他人の領域を踏みにじるようなこと、しちゃつた」

ルナはまるで懺悔するかのように呟いて、俺の胸元から離れなか
つた。沈黙の中、ただエレベーターの駆動音だけがしばらく続いて
いた。

あのエレベーターの一件の後、ルナの態度は一変して酷いものだ
つた。

「勘違いしないでよね、別に貴方に心を許したとかそんな意味だつたんじゃないんだから。なによあれ、背中に手なんか回さないでよね気持ち悪い。わたしにだって色々あつたっていうか、それだけなんだから。そこんとこほんと誤解しないで欲しいわね」

エレベーターから降りて、そそくさと俺の部屋へと入り込んだと思いきや第一声がそれである。天と地ほどの差とはこういうのを言うのだろうか。まあ、照れ隠しみたいで可愛いと思わなくもないんだけど。

「あー、はいはい。解った、解ったから。忘れてやるからもういいだろ?」「

「別に忘れるつて言つわけじゃないけど」ルナは少し気恥ずかしそうに、「わたしだって、一応悪いことをしたなつて思つてるのよ。それは認めるわ。事情も知らずに軽率な行動をとつてしまつたのは謝る。妹つていうのは駄目だったわね……他に何か、もつといい方法を考えないと」

何やら気にしなくていいことをルナは気にしているようで、俺としてはどうしてそこまで固執するのか解らないけれど、ルナにはルナの事情がありそうだ。無駄に余計に詮索するのは野暮つてもんだろう。その点に関してはあえて何も言わないでおくとする。

「別に。いいんじゃねえか」

だけどひとつだけ。たつたひとつ、俺は言わなければならぬ。

「……え? 何が、いいのよ」

「いいだろ、別にさ。家族じゅうこ? それがどうした、大いに歓迎だつて言つてるんだよ。この話を持ちかけてきたのはルナだけどな、それを認めたのは誰だ。俺だらうが。確かにルナの魔法とやらで俺が洗脳されちまつて、そうした上でこんなことになつているとするならそりゃルナに落ち度つてもんが生まれてくるかも知れない。でも、違うだろ。ルナの魔法は俺には効いていないんだから。その上で、効いていない上でこうなることを望んだのは誰だ? 俺だつて言つてんだよ。勝手に解釈して一人で考え込むな。俺は別にルナの

言いなりになつてゐるわけじゃない。自分の意思でこうしてゐるんだ」確かに、少しあは流れに乗つてしまつた部分もあるだろ？「ああ、それは認めてやる。だけどそれがなんだ。結局俺はルナがいるこの現実を認めた。いてもいいと思った、思つてる そう、今でもだ。それは決して変わらない。理由なんて知るもんか、そう決めたんだから男に一言はない。

「なに、それ。なんで……そんな風に言えるの」

ルナは顔を伏せ、咳いた。

「なんでもクソもあるか。それが事実で現実だつて、ただそれだけのことだろ？ 勝手に自分で思い込んでんじゃねえよ、このばか」

「ばつ……」ルナは急に顔を真つ赤にして、「ばかとは何よ、わたしはこれでも真面目に考へてゐるに！ 昨日だつて本当は嫌だつた、何の関係もない貴方をただ自分勝手な都合で巻き込んでしまつたことが！ だから悩んだ、苦惱した、苦渋した！ それで選び出した結論がこれなのよ。これしか思いつかなかつたからこうなつた、ただそれだけ！ それだけなのに……それも間違いだつた。わたしは駄目だつたのよ、間違つてたんだから。それを自分で氣付いて、後悔して……それなのに、どうして貴方はそうも簡単に、いとも容易く、あつさりばつたりと切り捨てられるの。どうして……そんな風に、してくれるの？」

しなだれるかのように、ルナは床に膝をついた。

「……ルナに何があつたのかは知らねえよ。そつちの事情は聞いたこともないから俺には何て言えばいいのか解らない。だけど、これだけは言える。ルナは何も悪くないだろ。昨日俺がその戦いとやらを見てしまつたのだつて、半分以上は俺のせいなんだから。全てが全て自分のせいだとか思うな。それにさつきも言つただろ。俺は自分で決めたんだ、ルナが妹だつてことに何の不満もねえよ。正直にぶつちやけてやれば一人寂しいところにルナみたいな可愛い妹ができて嬉しいって気持ちも多少はあるんだよ。ルナと一緒にいて、こ

うこうのも悪くねえなって思えてんだよ、悪いか？ それのどこが悪い？ 悪くねえよな。何が悪いってんだよ」

「……、ばか」ルナは両手を握り締めながら、地面に向かつて呟く。「なによ、それじゃこんなに悩んでたわたしが、本当のばかみたいじゃない」

「ああ、違いない。だからばかって言つたんだよ、ほら」

そう言つて、俺は右手を差し出した。別に何の意味もない、ただ手を貸してやろうと思つただけの行為。

「……そうね、今回はわたしの負け。敗北よ、惨敗だわ。……うん、

認めてあげる」

「なんだよらしくない。俺の妹なんだって言つならもつと氣丈でいろよ。泣いたり悲しんだり、そんなのルナにはまったく似合わない。それぐらいの覚悟、あるんだろ？」

我ながらちょっとばかりクサイ台詞かとも思つたが、それでいい。ルナは俺を見上げながら、その手で俺の右手を握つた。力を入れて、俺は彼女を引き上げるように立ち上がらせた。

「うん。……ありがと」

まだ涙が残る瞳を少し赤く腫らせながら、しかし今までに見たことのないぐらいいの笑顔でルナはそう答えた。一瞬だけ、本当に一瞬だけだけれど、俺はそんなルナの姿に見惚れていた。

「でも」ふと、ルナが何かを呟く。繋いでいた俺の手を離すと、今度は不敵な笑みを浮かべながら、彼女は宣言した。

「次は負けないわ。覚悟しなさい、今度はわたしが貴方に泣き面かかせてやるんだから」

夕食（と言つてもコンビニエンスストアで購入したおかずと白飯だけだが）を食べ終わつた俺とルナは、各自好き勝手なことをしながら時間を潰していた。風呂には俺が先に入ることになつて、その

間、ルナはどうやらニュースを見ていたようである。ニュースといえば最近物騒な話題があつたな、なんでも連續殺人だとか獵奇的だとか、そんな感じの。案の定、ルナもそんなニュースを見ていた。興味あるんだろうか。まあ、俺も割かし近所での出来事だから結構びびってた時期もあつたっけ。今ではすっかり忘却の彼方つて感じだが。さつさと犯人逮捕に至つて欲しいところだよ、まったく。俺がバスタオル一枚でリビングに出たらそこには案の定ルナがいて、そういうやこいついたつけー！ などと叫びながら慌てて着替えに戻つたりとなかなかスリーリングな夜を過ごしつつ、そろそろ就寝という時間までやってきた。はいここで問題です。若き男女一人が一つ屋根の下で寝る場合、もしそんなスペースがひとつしかなかつたらどうすればいいんだよちくしょう。

「お前、本当にそこで寝るのか？」

俺はベッドを指差しながら、すでに準備完了と言わんばかりにじろじろと寝転がっているルナに対して問う。

「うん、そうだけど。何よ、不満でもあるわけ？」

「いやだってそこ俺の寝る場所……ふがつ、ま、枕を投げるな！」

「何口答えしてるのよ、いいからわたしここで寝るんだからね。他にひぐに眠れそうな場所ないし。……なにほおつと突つ立つてるので、寝るんなら早く寝るわよ」

……、えつと。

「こんな大きいベッド使っておいて、まさか独り占めするつもりだったわけじゃないでしょうね、兄さん？」

「いやいや、そういう事ではなくてですね、姫。

「なによその不満そうな目は。疑い深そうな顔は。いいから早く電気消してくれない？」

ああもう、だからそういうじゃないんだって！

「……あのよく現状の理解ができないんですが、よつするに一緒に寝ろと言つておられるのでしょうか姫君？」

「ひめ……？ 貴方が何言つてるのかいまいちよく分からぬけど、

ようするに兄さん一人でこのベッドを使のは勿体無いからわたしも使うつて言つてるんだけど…。」

「ああそつかなるほど……つてつまつやつぱつ事じやねえかああああああああああッ！」

なんてことだ。まさかこいつも早く「お兄ちやん一緒に寝よっ」フラグが成立するとは思つてもいなかつた。……いや待て、とりあえず落ち着こいつ。むすがにそれは怖い。色々な意味で怖すぎる。俺だつて健全な一般男子、こんなベッドでこいつと一緒に寝たりなんかしたらどんな間違いが起きてしまうかわからん。つーか起きて欲しくない。後が怖いから。

「……ルナ、それ本気で言つてんの？」

「はあ？」ルナは心底不思議そうに、「別にいいでしょ、それぐらい。」これだけ大きいんだから狭いとも思わないだろうし。兄さんだけ寝させるのは癪だし、でもだからといってわたしが占領するわけにもいかないわ。じゃあ一緒に使えばいいだけじゃない、これ以上合理的な方法があるのかしら？

「むう。まあ、そういうんだが……」

「ああ、そうか」俺は今、ようやく気が付いた。ルナは俺の事を完璧に男として見ていないんだ。設定上で兄となつているからそのままのようには接するけれど、それ以上の感情を持ち合わせてない。だからこそ、こうしてベッドを一人で使うだなんてことを平然と言ってのけるわけだ。なんとかは知らないが、その事実に少し俺はいらつこいた。

「……オッケー。なら話は簡単だよな」

「はあ？ 何言つてるのよ？」

「今からお前を襲う！」

「……何、え、ちょ。ちょっと待つてそれは……！」

「がばーっ！」と、俺はルナのいるベッドの上ヘルパンダイヴ決行。ヤケクソ氣味にルナの身体田掛けて飛び掛つてやつた。

「うわ、や、やだ止めてよちよつと！ こ、こんなのナシなんだか

「ら……！」

「ふ……どうだ、これでちょっとは俺を男として意識する気になつたか、妹よ」

「はあっ！？ なるわけないでしょ、このヘンタイ！」

「どか、と思いつきり急所に蹴りを貰う。くそ、ただの冗談だつていつのに本氣で蹴りやがつた。しまいにはベッドから落とされて尻餅の一段サービスときている。

「痛つつい……、じょ、冗談だつて。あまりにルナが無防備過ぎるから」

瞬間、俺は見た ルナが泣いていた、完膚なきまでに。俺を睨みながら枕を抱きしめ、顔を真つ赤に染め上げながら黙り込んで。

「……お、おい。今のはだな、いわゆる兄妹間のスキンシップつつーか、その

「ばかっ、死んじゃえ！ ヘンタイ！」

顔面に何かが直撃。また枕を投げられた。そしてまたヘンタイ言われてしまつた。

「あ……ルナ、『ごめ

「もう寝るんだから！ 今日はこいつじゃないで！」

扉まで閉められてしまつた。これは明日の朝、土下座してでも謝るべきだろう。完全に完璧に最悪に俺のミスだつた。……でもなんだろう。さつきのルナは、どこか凄く可愛かつた。

そんなわけで、俺は一人リビングで眠ることとなつた。一応、両親が生きていた頃に使つていた部屋があるつちやあるんだが、あの部屋は使わない事にしている。両親が死んでから俺が決めたことだ。一度決めたことは簡単には曲げたくないし、一応枕はあることだし、リビングの床で寝転がりながら窓の外に見える星空を見上げるというのもまたオツなものだろう。

「ま、結局のところ俺はルナが好きなんだろうな……」何気なく呟いた言葉。だがそれは、紛れもない俺の心境を表していた。「……は。会つて一日……まあ正確に言えば二日か。それだけでいつも簡単に一人の女に惚れちまうもんなのかね、男つてのは」

だが、それが俺の気持ちに変わりはなかつた。今思えば一目惚れだつたのかも知れない。まあ今となつてはどうでもいいことではあるが、ルナにそれだけの魅力があることは確かだつた。一日こうして一緒に過ごしただけだと言うのに、俺はいつの間にこんなところまできてしまつたんだろう。……妹、か。うん、もしかすると俺はルナのことを一人の女としてではなく、ただ単純に妹として好きなのかもしない。だがそう思えば思うほど、その気持ちは偽りのように思えてくる。あの時感じたもどかしさは、そんなものでは言い表せない。ルナは確実に俺のことを男として見ていないし、きっとこの件が片付くのであれば、俺となんてはいさよなら、永遠の別れとなつてもすぐに了承するはずだ。そういう事情が事情だから仕方ないけれど、それでも やっぱり、それは何だか寂しかつた。ああ、別に一人の女として俺の傍にいなくていい。ただ今みたいな時間がずっと続いて欲しい、ただそれだけ。高望みはしない。そんな願いも、だがいつかは裏切られる。解つても、俺にはどうしようもないんだから。

「防人よすまん。お前の言つていたことは割と正解だつた」

まったく自分が情けなくなる。たつた一日二日知り合つただけの少女に、これほどの感情を抱いているなんて。

「ま、ここで自分の気持ちをはつきりさせとけば、後で後悔もしない、か」

月城昂は。自称魔法使いで、自分より三つ年下の少女で、義理の妹である月城ルナに惚れてしまつた。そう、それが全てだつた。

「オッケー、心の整理完了。……さて、そろそろ寝るか」

布団もないのに、しかたなく床に枕ひとつ置いてそこに頭を乗せる。窓の外は綺麗な星空が浮かんでいて、眺めとしては思つていた

通り悪くない。すっかり辺りには誰もいないのか、車の走る音さえ聞こえない深夜。しん、と静まつた空間で、俺が目を閉じたその時、

ちりん、と。鈴のような音がどこからともなく聞こえてきた。

なんだ今の音は。外からか？　いや、とてもそうは思えない何せここは七階である。外からそんな音が聞こえてくるとは考えられない。それに、あの音色はまるで間近で聞くかのようにはつきりとしていて、何か印象強く脳裏に響き残っている。少し不気味さを感じた俺は、そのせいか完璧に眠気が覚めてしまった。何にせよ、音の原因を調べないとこのままじゃ眠れそうにもない。窓から外を見てみる。空になにかあるってわけでもないし、ベランダに何かいわるわけでもない。猫かとも思ったが、よくよく考えればこのマンションはペット禁止なんだっけ、と思い出す。じゃあなんなんだろう。まさか下の地面から聞こえてきたってわけじゃないだろうし、と俺はベランダに出てまっすぐに下を見た。

「……、ん？」

一瞬見ただけでは何かわからなかつた。だが、そう　じつと田を凝らせば見える。人だ　人が確かにそこにいる。黒いフードのようものを被つていてあまり顔は見えないけれど、確かに見えた。まさかあの鈴の音があそこから聞こえたんだとは思いたくないが、とにかくこんな深夜に人がいるのは絶対におかしい。入り口付近で突っ立つているのにも何かわけがあるのかもしない。バスコードを忘れてしまつて中に入れないと、そうだとしたら大変だ。俺は上着であるコートだけを寝巻きの上から着て、音を立てないように静かに外へと出た。

マンションの入り口、オートロックドアの向いには、ベランダ

から見下ろした時とまったく同じ位置に黒いフードを被った人影があつた。

(なんだ、まるで俺を待っていたような……いや、考えすぎか)
とりあえず話をしてみるか。ドアが開かれ、その先までゆっくりと俺は歩いていく。

「こんな夜中に外にいちゃ風邪ひくぞ。マンションに用があるんだろ? ほら、俺が中に入れてやるから」 ふわり、とその頭を覆い被さつていた黒いフードが下ろされた。そこにいたのは、紛れもなく 見たこともない黒髪の少女だった。「女の子……? どうしてこんなところに?」

「……やつと、会えた」 少女はまるで咳くようになぼぼとした声で、「もつすぐ、記憶が戻つてしまつ。……その前に、私はあの魔法使いを倒さなければならない」

「な、なんだつて……? 魔法使いつて、まさかルナのことか? 倒す、と言う事はまさか この少女がルナの言つていた『敵』だと言うのか。黒いフードの少女は、俺の問いを無視するかのよつに咳く。

「貴方も時間の問題。今の時間はもうすぐ終わつてしまつ。だから。早く貴方も」

「誰?」

ふと背後から声がする。聞き慣れた声 ルナだった。

「貴女、まさか……」 ルナは何かに気付いたかのように、「その人から離れなさい! 少しでも触れたら、容赦しないわよ!」

「ルナ、こいつは……」

「ええ、話してた『敵』よ。まつたく、まさか向こうからやつてくれるなんて……!」

やはりそつだつたのか。くそ、我ながらさすがに無警戒過ぎた。
少し考えれば、そういうた危険性も十二分に考慮できたはずだと言うのに。

「……現状は把握した」 黒の少女は言つ。「魔法使い、ルナミス!」

サンクトリア。明日の夜、午前零時に西条公園にて待つ。そこで、
しかるべき決闘と決着を

「あつ、待ちなさい！」

気付けば、黒の少女は瞬きと共にその場からいなくなっていた。
まさか魔法を使ったのか。何にせよ、今この時の危機は回避できた
ようだ。無事に越したことはない。

「……、くそつ」「ルナはらしくもないよつて吐いて、「一体全体何
を考えているのよ、あの魔法使いは……！」

ルナミス＝サンクトリア、と言ったか。おそらくそれがルナの本
名だらう。やっぱりどこかの外国の生まれだつたか。ふむ、俺の予
想は見事的中つてわけだ。このシリアスな場面でそんな事を考えら
れるのは、やはり嵐が過ぎ去つたからだらうけど、それにしてもさ
すがにここまでくると俺も魔法使いつてもんの存在を認めなければ
ならないよつた。

「……ルナ」俺はここしかないと思い立つて、「その、寝る前はご
めん。あれはやり過ぎた。反省してる。だからその……許してくれ
ないか？」

ぽかん、と。何故かルナは俺の顔を見てそんな擬音が相応しい表
情をしていた。

「もういいわよ、忘れたから」今度は何か嬉しそうな顔で、「それ
よりほんといきなりね、びっくりしたわ。さつきまで敵の魔法使い
がすぐ目の前にいて、宣戦布告までされたつていうのに……何でそ
う氣楽なのかしら、兄さんは」

まあ、確かにそう言われればそうなんだけど。俺にとつては、そ
れよりもきっと優先順位が高かつたつてだけの話だらう。

「ごめん」

「何謝つてるの？ なんだからしくもなく下手だけど、もう気にし
なくていいって言つてるんだから兄さんも忘れてよね。もお、ま
たく。ふふ」

なんだろう、妙に気持ち悪いくらいルナの機嫌がいい気がするん

だが俺の気のせいだろうか いや、気のせいではないと思つ。だが何故そんな上機嫌なのがわからぬ。すると、ルナはマンションの中へと戻るよう一人歩き始める。

「それにしてあれよな。兄さんってへんな人だとは思つてたけどやつぱりへんよね、うん。ああ、そうそう ひとつだけ指摘しておくけど」ルナは本当に可愛らしく微笑んで、「独り言はあんまりよろしくないわよ? 特にああいう独り言は、ね」

ルナはそう言い残して、一人我先にとマンションの中へと戻つていった。

……、独り言?

「え、おい。……まさか ちょ、ちょっと待つてくれルナ。もしかしてお前、聞いてたのか!?」俺の声は届かず、ルナはいつの間にか視界から消えていた。「おいおい冗談だろ、あんな独り言を聞かれてたなんて、それじゃあ……」

俺はルナを追うようにしてマンションへと入つていく。エレベーターは七階に止まっていたので、ルナはエレベーターを使って上がつたのだろう。ボタンを押す。エレベーターはそのまま一つずつ降りてやつてくる。

独り言。俺が独り言をしていたとするなら、間違いなくさつき そう、一人で独白していたあの時の事だ に違いない。まさかルナのやつ起きていたのか。だとするならさつきあの魔法使いと対峙していたときに突然やつてきた事にもつじつまが合つ。たぶん俺が出ていったから気になつたんだろう。だけど、それはあんまりじやないだろうか。よりもよつて、あんな独白の内容を聞かれてしまつていたとなると それじゃあ、告白したのと何ら変わりない。やつてしまつた、と思う。ルナは間違いなく軽蔑されるだけだろう。ヘンタイどころの話ではない。冗談で抱きつくとか、そういう次元の話じやないのだから。

エレベーターが、止まる。

「絶対嫌われたんだろうな、俺。ま、そうだよな……義理とは言え、妹を好きになるやつがどこの国にいるってんだよ」
ふと、気付く。落ち込んでうつ伏せていた顔を見上げてみると、そこには。

「……え」

エレベーターのドアが開いた、その先に。

そこには紛れもなく、ルナがいた。

「なんで、まだ。乗つて、るんだよ」
うまく言葉が出せなかつた。ただ田の前の光景に、そして一度田の失態に動搖して。聞かれた、確實に。なんてこつた、さつき指摘されたばっかだつて言うのに。

「驚かそうと思つただけなんだけビ……うん、兄さんはちょっと勘違いしてゐみたいね」

ルナが近付いてくる。何故だかわからないけれど、今の俺はどうしようもなく無力で、

「あの、ね」俺の顔を見上げながら、その金髪の少女は歌うようにな言つ。「好きつて言われて、その人のことを嫌いになる人なんて、多分いらないんじやない……？」

「え、ルナ……？」

解らない。ルナが何を考えているのか解らない。何を言つているのか、何をしているのかが俺には理解できなくて。
「だからね。……わたしは、貴方のこと嫌いじやないよ」

結局、俺はルナと同じベッドで眠ることになつた。別に深い意味はない。ただ単に、リビングじゃ寒いだろうと言うルナの配慮があつただけだし、お互に頭を逆に向けて寝れば問題ないだろうと言

う提案もあつたからだ。それなりにでかいベッドなのは事実だから、スペースに困ることはないだろう。二人程度なら十二分に眠れるぐらいの広さはある。

「なあ、ルナ」「俺は天井を見上げながら、「……嫌いじゃ ないっていうのは、好きってことになるのか？」

「なるわけないでしょ、ばか」ルナは即答した。「勘違いしないでよね、わたしは別に嫌いじゃないってだけで好きだとは一言も言ってないんだから。言つておくけど、もし次に何かへんなことしたら今度こそ嫌いになるわよ」

「……だらうな。はは、悪い悪い。へんな事聞いちまつて、悪かつたよ」

しばしの沈黙。明かりも消えているし、このまま眠つてしまつたもよかつたけれど。何故だか、今の俺はそんな気分になれなかつた。少しして、俺が口を開く。

「そういうや、受けるのか。あの魔法使いが言つてた……決闘つてのには

「受けれるわ。うん、受けないといけない。早く終わらせたいって気持ちもあるし、今日みたいにまたこっちにやつてこないとも限らないしね。それにしても迂闊すぎよ兄さんは。もしあっちが見境のない魔法使いだつたら殺されてたかもしれないのに」

耳が痛いが、それは確かに本当のことだつた。正直に言つて、あの瞬間まで俺は魔法使いという存在を信じ切つていなかつた。だからこそ、ああして警戒もせずほいほいと外へ出て行つてしまつた。迂闊、確かにその通り。何の言い訳も弁解もできない。

「まあでも、あの魔法使いさえなんとかすればわたしはこっちにいる理由もなくなるからね。……もしかしたら、それでお別れかも」「な、なんだよそれ？　ここにいる理由つてのは、俺を監視するためじやないのかよ？」

「そうね、そうだけど」ルナは少し寂しげに、「あの魔法使いを倒したら、わたしは一度本国に帰るつもり」

そんな それはいくらなんでもあんまりだ。せっかくこいつして出合つて、好きになつて。その次の日にはまもつお別れだつて、そんのはあんまりにあんまり過ぎるだらう。

「どうしても……帰るのか?」「

「うん、『ごめんね。……ほんとなら、もう少しいるつもりだつたんだけど。予想より遙かに敵の動きが速かつた。正直、ここまで積極的な相手だとは思つてなかつたもの。』このままもう会つこともないかもつて思つてたぐらい。でも、まあ。向こうから出てきたのなら、しつかり相手はしなくちゃいけないし」

俺は何も言えない。

「そうだ、この際だから話しておこうかな。あのね、『魔法使いはその正体を知られてはならない』ってのね、嘘なの」「はあ? 何言つてるんだよ、意味がわからないうぞ」

「うん。白状しちゃうとね。最初からわたしは貴方の妹になるつもりだつた。一時的にね。わかる? わたし、貴方を『利用』しようとしたんだよ」

おいおい、ちょっと待て。何だ。ルナは何を言つてる?

「たまたまそこにいたのが貴方だつた。本当はしたくなかったけれど、するしかなかつた。……わたし、あの魔法使いに負けそ娘娘たの」

「なんだつて……?」

「だから、逃げる必要があつた。なんとしても、ここで負けるわけにはいかなかつたから。そのために、ただ単にそこへいた貴方を利用しただけにすぎない」

限界だつた。俺は布団を跳ね飛ばすと、身体を起こしてルナの腕を引っ張つた。

「ちよ、ちよつと! 何するのよ、痛いってば!」

「どうこうことだよ、ちゃんと全部話せ」

「うん。わかつたから、話すから。手、離してよ。痛い」

「あ……、悪い」

「……あの魔法使いと戦つてたつてことは、わかるわよね？　その結果、わたしは負けそうになつた。相手の力量を測り間違えたのか、想像より遙かに相手の実力が高かつたのよ。だからとにかく逃げたわ。なんとかして負けないように。逃げるつて手段は負けと認められないからね。そして、わたしは貴方をそのときに巻き込んだ」

巻き込んだ。それは、確かにルナが言つていた言葉。「貴方がわたし達の戦いを見ていたつていうのは本当。その場にいた貴方をわたくしが巻き込んだのも本当。だから別に嘘はついてないの、その点に関して言えばね。相手からしてみれば、わたしが連れて逃げたのは一般人。無為に危害を加えることをためらつたのね。それ以上追跡はしてこなかつた。本当なら貴方の役割はそこまで、それで終わるはずだつたんだけど、ふと考えたの。このままわたしの『言葉の魔法』^{マジック}を使って、貴方にわたしが前からいる家族だと認識させることができるば、うまくすれば隠れ蓑を作れる、つてね。よくあるパターンよ。一般人を洗脳してその家庭にイレギュラーとして短期間の間あくまで自然に割り込む。そうすることで宿や隠れ場所を確保する。……それだけのためだつた。貴方の妹になるなんて理由は、本当にそれだけだつた」

「じゃあ、何だよ」俺は少しづつきらばうな口調で、「俺を巻き込んで後悔してるつて、悩んで苦悩して選んだんだつて、仕方がなかつたんだつていうあの言葉は全部嘘だつたつていうのかよ？」

学校から帰宅してきたあの時、確かにルナはそう言つていた。あれは全部嘘だつたつて、そう言つのか。

「……信じてもらえないかもしけないけど、あれは全部本当。わたしは後悔したわ。こうして貴方を巻き込んでしまつたことを。ただここを隠れ場所にするためだけに、貴方の事情も知らずに勝手に家族ごっこをした。ほんと、自分でも情けないし馬鹿げたことをしたつて反省してる。それは嘘偽りなく真実。信じてくれないと、思ふけど」

「そうか。だからあの時、ルナは異様に反応していたのだろう。自

分の目的のためだけに俺を利用した、そのことに関してずっと罪の意識を背負つてきながら、あの話を聞いてきっとそれが背負いきれなくなつた。

「……信じるよ。俺は、信じる」

「俺はルナを信じたい。」こうして話してくれているのだから、それにはきっと偽りはないと思うから。

「うん、ありがと。……最初はね、本当に利用するつもりだけだった。でも『言葉の魔法』^{ワードオブマジック}が効いていないって解った瞬間、戸惑いもしたけど、同時に安堵もしたの。これならきっとやり直せる、って。だから本当はその場で全て打ち明けるつもりだった。……でも誤算が起きた。貴方が昨日のことを何一つ覚えていなかつたのよ。それを知つて、わたしはまだいけると思つてしまつた。なんとか少しだけでもここにいようと思つてしまつた。だから、あまり昨日のことについて触れたりはしなかつた。そして同時に、昨日のことを思い出せば、この関係はすぐに壊れる。そう、それを解つていたからこそ、わたしはそうすることに決めたの」

なんらかのショックで一時的に消えてしまつた俺の昨日の記憶。それが戻れば、確かに俺は理解できる。ルナが何者で、俺がどういふた扱いをされているのか。そうだ。もし俺がそれをその場で思ひ出していれば、確実にルナを放り出していただろう。ルナとここまで接しあうこととはなかつた。失われた記憶が作り出した、なんとも矛盾な関係。それが、俺とルナの関係だつたつて言うのか。

「確かに、俺の記憶がそのときについたなら今と違う未来になつたかも知れない。でも今は違うだろ。俺はこうしてルナと共にいる。妹だつてことを認めている。一緒にいたいと今でも思つてる。こうやって眞実を知つた上でも俺の気持ちに変わりはないんだよ」「でも」ルナはそんな俺の言葉を遮るように、「わたしのやつたことは結局おんなじなのよ。貴方を利用して、貴方を騙して。そんなやつと、これ以上一緒になんていられる?」

「こられるだろ」即答してやつた。「だつて、俺はルナの事が好き

なんだから

少しの間。ルナは俺の顔を見つめると、目を丸くして頬を赤く染めていた。ここしかないと、俺は言葉を続ける。

「ルナの事情はわかった。確かにルナのやつたことは少し間違っていたのかもしれない。でも仕方ないだろ。誰だつて生きたい、逃げ延びたいと思うのは普通のことだ。俺だつてそうするさ、たぶん間違いなくな。だから別に気にすることはないんだよ。襲われて戦つて、それで逃げるために、ルナが助かるために俺が役に立つたって言つんなら、今の俺にとってそれは本望だ」

「……本当に、どうして貴方はそんなことを平然と言えるのよ。おかしいわよ、そんなの。自分が利用されたって、嘘つかれて騙されていたって知つて、それでもわたしといふことを選ぶなんて、普通じゃないわ。ばかよ、大ばかじゃないの」

「そうだな。ばかだ、俺は大ばかだろうよ。でも、ルナだつてばかだ」

そう言つて、俺はルナの手を握つた。何気なく、さり気なく。ただ、そうすること自然だというよ。ルナは特に何かいうわけでもなく、その手を握り返していく。

「……そうね。そういえばわたし達、一人揃つてばかなんだつた」

そう言つて微笑み、ルナはそのまま身体を預けてきた。

「つちよ、ルナ……？」

「もう寝る……話したら一気に力が抜けちゃつた……おやすみ……」

とか言いながら、数秒で眠りの世界へと突入してしまわれた。なんつースピードだ。もしかして今まで相当眠いのを我慢していたんだろうか。

「……ああ、おやすみ。ルナ」

そつとルナの髪を撫でる。そうしているうちに、いつの間にか襲い掛かってきた睡魔に負け、俺もルナと共に眠りの淵へと落ちていくのだった。

第一章／月下の魔法使い 下

平日の最後である金曜日。いつもなら一番だらけている曜日だと云ひのに、やはりといふか俺は早起きすることになる。「ひむ、二日連續はさすがに新記録だ。快挙である。一日でも早起きする事さえ有り得ないつていふのに、だ。

「起きなさいよ、ほり。朝食できてるわよ！」

それもこの少女、ルナのおかげであるわけだけれど。本名をルナミス＝サンクトリア（だつけ？）と言ひ、外国人で魔法使いで俺より三つ年下で、現在は月城ルナと名乗る俺の義理の妹。そしてなにより、俺が何の間違いか惚れてしまつた少女。早朝だと言ひのに乱れすらないその長い金髪を靡かせながら、ルナはおたまを握つて部屋の扉の前に立つていた。

……、おたま？

「お、おこまさか……ッ！」がばつ、と眠氣を覚ました俺はベッドから飛び上がり、「ルナ、お前まさか料理を」「

「だから。もうできるつて言つてるんだけど？」

なんてこつた。まさかとは思つが、ルナが自ら料理を作つてしまつたと言ひのだろうか。俺は絶望を浮かべたような表情を作りつつ、リビングに目を向けた。

「……あのね、もしかして昨日のことを思い出してるんじゃないかとは思うけど」ルナは少し呆れたように、「わたしが同じ失敗を一度も繰り返すと思つてゐる？ ちゃんと味見もしたし、今日は特別難しい料理でもなし、完璧なんだから」「む、そうか……安心した

ふむ、次は失敗しない」とは言つてはいたが、やはりそこはプログラの高そうなルナのことだ、同じ失敗は繰り返さない主義らしかつた。いやはや、実にいい傾向だとは思つ。「で、メニューは？

「カレーよ。比較的簡単だつて聞いたから。ほら、すぐおいしそうじゃない」

「……、朝っぱらからカレーなんて、作り置きでもしない限り有り得ないなんてのは、まあ解らないんだろうな」

「はあ、そうなの？ まあいいじゃない。なによ、不満もあるわけ？」

いや、ルナが作ってくれた料理を無碍にするわけにもいくまい。
というかメニューはともかくその行為はとても嬉しいってことに変わりはないわけだし。日本男子たるもの、好きな女の子が作ってくれた料理が嬉しくないわけないだろ、うん。そんなわけで、俺の今日の朝食 ついか多分晩飯もカレーと言つ事になりましたとさ。

いつものように登校し、教室へと参上。やはりというかなんといふか、周りの目はおかしなものを見るような、未確認飛行物体から突如現れたエイリアンでも見るかのような、そんな視線を浴びる。うむ、悪くない悪くない。こうやつて他人の度肝を抜いてやるつつ一のはわりと楽しい気分になれるからな。だがしかし、そんな視線は俺が早く来たことによるものではなかつた。いや、少しはそれも含まれていたのだろうけれど、俺の隣にいる少女に皆は現実を疑うような眼差しを向けていた。ああそうかそういうことね。

「……月城」寄ってきたのは防人だった。「率直に言おう。羨ましが過ぎる、代われ

「つるさい黙れ却下」

「ちくしょお！ なんでお前はそんなおいしい役回りにいるんだよ。少しでいいから俺にも分けてくれえ！」

毎度のことながら、コイツの戯言には付き合つてられん。俺は適当に無視して、ルナと共に自分の席へと向かつていった。俺が通るたび、つーかルナが通るたびに男子生徒の視線が気持ち悪いぐらい

に突き刺さる。ああもう、なんだよお前ら。そんなに女に飢えてやがるのかよ。

「ふふ、わたしつてばモテモテよねー」

突然、ルナがそう小声で俺に呴いて来た。おい聞いたかクラスの男子生徒諸君、こいつはこんなことを言つてるぞ。いつも見ているこいつの姿は九割がた猫を被つているんだ。騙されるな、眞実をその目に焼き付ける。

「月城くん、おはよう」ふと声が聞こえた　沢宮さんである。「二人とも仲がいいんだね、羨ましいな。瑠奈さんのおかげで月城くんはこれから遅刻もしなくなるし、良い事だよね」

「おはよ、沢宮さん。まあこいつのおかげで朝は苦労しなさそうだけどさ、聞いてくれよ。今日の朝食、なんだつたと思つ?」

「へつ、朝食? なになに?」

「うん。それがさ、カレーだつたんだよ。カレーだぜ? しかも昨日の晩の作り置きとかじやなくて、朝食がだ。どうだ笑えるだろ?」「む」その言葉に反応したのはルナだった。「そんなの知らなかつたんだからしようがないじゃな」「こ、こほん。わ、わたくしはついこの間まで海外で暮らしていたのです、そのようなことは知らなかつたのですわ。だと言つのに、せっかく一生懸命愛を込めて作つたと言うのに、お兄様ひどい……(ニヤリ)」

ざわ! と、ルナのその発言に教室内が一気にざわめいた。おいおい待てよ気付けよお前ら、今のはどうみてもおかしいだろ、口調とかその辺が。つーかニヤリってなんだよ。影で笑うなこの確信犯だよちくしょ!。

「つ、月城くん。それはちょっとひどいよ……」

沢宮さんまで俺に不審の目を向け出した。ああくそ、ちょっとルナをからかうつもりでやつただけの事でビーフしてこいつなつちまつんだよちくしょ!。

「月城、お前ちょっと放課後裏庭な」とは、クラスの男子生徒全員からのお達しだった。ちらりと隣の席に座っているルナを見てみる

と、必死に笑いをこらえていた。くわ、負けた。今回は少し、いや完璧に分が悪かった。ああ、認める。認めてやるから、とつあえず助けてくれ。

時間つてのは早く過ぎると感じるときもあれば、遅く過ぎると感じるこもあり、それはその人の気の持ちようで変化する。そういう経験、ないだろうか。例えば、学校でどうでもいい授業を受けているとき。つまらない暇の続くバイトをしていろとき。そういう時、時間つてのはものすごく遅く感じてしまう。五分がすこく長く感じる。逆に、朝起きるときあと五分、とか言つけれど。その五分はかなり短く感じないだろつか。その他でもそうだ。例えばゲームをしているとき。漫画や小説を読んでいたとき。時間つてのは、いつの間にか過ぎ去ってしまっている。早く過ぎていく。そう感じてしまわないだろつか。俺は思ひ。よつするに嫌いなことをしているとき、時間つてのは遅く感じる。逆に好きなことをしているときは時間が早く感じてしまうものだと。それが何故なのか、俺は考える。それは多分、そのことに対する集中力のレベルなんだと思ひ。嫌いなことだとどうしても集中できないし、好きなことならどれだけでも集中できる。人間はなにかに集中しているとき、時間さえも無視してその物事に熱中できる存在なのではないか、とこゝお話をだ。

「……うむ、我ながら暇潰しとはいわけが解らん」

よつするに、つまるところ俺は今暇なのである。どうでもいい授業を受けていて、果てしなく時間を持て余していろ。何かに熱中して時間を潰したいところだつたのだが、慣れないことはするもんじやない。ま、この授業さえ終われば次は放課後。よつやく一日の授業時間が終了、開放されるつてわけだ。明日と明後日は休みだし。ふと隣のルナを見る。はたから見れば真面目そうに授業を受けてい

るよつに見えるが、実際はどうなのかわからん。正直こいつは俺より三つも下なんだし、授業内容が理解できているのかも怪しい。いやまあ、魔法使い様ともなれば、普通の一般人とは比べ物にならないくらい頭が良くていらっしゃるのかもしれないが。

「……ま、どうでもいいか

小声で独り呟く。

「何？なんか言つた？」

聞こえていたのか、隣のルナが聞いてきた。こいつ耳いいよな。そういうやあのときの俺の独白だってよく聞こえたもんだ。俺は「別になんでもねえよ」とだけ言って、残りの数十分、暇を潰すために何をしようかと考えるのであった。

本当に突然で、唐突で、いきなりだった。放課後、帰宅準備をしていた途中、それは起こった。ちりん、と言う鈴の音色がどこからともなく聞こえてきたのである。……あいつだ、間違いない。俺は直感で判断する。昨日の夜中に聴いたあの音色。その後現れたあの黒フードの魔法使い、ルナの『敵』である少女。

「ルナ、今なんか聞こえなかつたか？」

「はあ？別に、何も聞こえなかつたけど。誰かが呼んだとか？」

ルナには聞こえていない、ということはこれは俺にしか聞こえない音なのだろう。どういうことだ。まさか、昨日の夜のように俺を呼んでいると言うのか。だが、何故ルナではなく俺を呼ぶ必要がある？昨日も何か言いかけていた。俺に何かあるってのか。解らない解らないが、だからこそ確かめなければ。

「悪い、ルナ。ちょっとトイレ行ってくる。腹の調子悪くてさ。すぐ戻るから、お前はここで待つてくれよ。遅かったら先に帰つてくれてもいいし」

「え？ ちょっと、待

「

それだけ言い残して、俺は教室から駆け出した。どこにいるかなんて解るものか。ただ勘を頼りに探し回るしかない。どこだ、どこなら一番都合が良い？

「……あ。裏庭」

そうだ。この学校の裏庭はとてもではないがあまり人が寄り付かない。たまに隠れて遊んだり喧嘩したりで使うことはあっても、基本的にそこには誰もいない。そこなら誰にも見つかることなく話せる。完全にただの直感だった。だが、そんな予想による不安なんて消し飛ぶくらい、何故か確信のようなものもある。それが何故だかはわからないが、俺は、そこに行くべきな気がして。裏庭はそう遠くない。階段を駆け下りて、一気に目的地を目指す。

走る。
駆ける。

そして、そこには見間違うこともない、あの少女が立っていた。

「は……は。見つけた、ぞ」

「この程度で息切れするなんて、少し運動不足なのだろうか。はあはあと息を切らせながら、俺は目の前に立つ黒髪の少女に向かって、言つ。

「一体何の用だ。俺だけに聴こえるあの鈴の音は何なんだよ？ 俺に話しがあるんじゃないのか、おい」

「……少女は少し悲しそうな顔をして、「お願い、あの人から早く離れて」

意味が解らなかつた。あの人、つてのはつまりルナの事か？

「何でだよ。お前の目的は何なんだ？ ルナを倒して、魔法使いとしての地位だのなんだのを上げたいってんじゃねえのかよ」

「そうじゃない……ただ私は貴方の身を案じて言つている。貴方は、早くあの人から離れるべき。今は、理解できないかも知れないけれど。記憶のない、貴方には」

記憶　まさか、俺の記憶は。

「……お前、まさか俺の記憶を消したのはお前なのか？」

「じくり、と無言で頷く黒の少女。

「本当は、このまま無関係でいて貰いたかった。そのまま眠って記憶を無くして、それで終わって貰うはずだった。でも、それは叶わなかつた。あの人人が、貴方に目をつけてしまつたから」

「ルナが俺をどういう風にしたのかは知つてゐる。本人から聞いたからな。だけど今、俺は俺の意思でこうしてゐる。ルナの魔法にだつて掛かつてない、これは自分の意思なんだよ！」

「……そうかもしれない。でも、だからこそ。だからこそ私は、貴方にあの人とこれ以上関わりあつて欲しくない。そうすることが、きっと一番の道だと思うから」

「何言つてるんだよ。わけわからねえ。そんな事言られて、俺がはいそつですかつて頷くわけないだろ！」

俺がそう言つと、何故かその黒き少女はびくんと身体を震わせた。

「……私は、貴方のそんなところが好きだつた。でも、もう手遅れだと言つうのなら。私はせめて、あの人を倒して貴方を救う。だから……お願ひ」 その少女は、本当に意味の解らない事を呟いて。背中を向けて、ここから去るようだ。最後の言葉を、告げる。「全てを思い出しても、これ以上私達に関わらないで。お願ひ、昂

いなくなつた 本当に、一瞬に。まるで本当は初めからそこになんていなかつたかのように、黒の少女は俺の目の前から姿を消してしまつた。

「……なんで、俺の名前。知つてるんだよ

理解できない焦燥感に苛まれながら、俺はしばらくそこを動く事ができなかつた。あの黒フードの少女が言つていた言葉が、何故かまだ胸に突き刺さるように残つてゐる。俺の失われた記憶。それを思い出せば、この不安感も全て解消することができるのだろうか。

「……あ、まずい」

そこで俺はようやく思い出した。教室に残したルナのことを。これからもう大分経つてゐる。待たせてしまつてるのは悪い、早く

戻らなければ。

そうして、教室には誰もいなかつた。

「あれ、ルナのやつ先に帰つちまつたのか。むつ、結構冷たいところあるんだなあ」

独りごちながら、誰もいなくなつたクラスの教室を歩いて、自分の机の上においてある鞄を手に取つた。

「……ま、一人で帰るのなんていつものことだし。何寂しがつてんだよ、俺は」

我ながら少し女々しいな、と感じつつ、俺は鞄片手に教室を出ようとして、

「あれつ、月城くん？」

沢富花凜と鉢合させた。

その手には鞄が握られていて、ビリヤリ彼女も今から帰宅つてとひらりしこ。

「うつす。沢富さん遅いね、委員会の帰り？」

「うん、まあそんなところ」沢富さんは辺りを気にしながら、「それより月城くんこそどうしたの？ こんな遅くに。瑠奈さん、先に帰つちゃつたみたいだけど」

さすがに敵の魔法使いとお話してましたーっ！ なんてぶつちやけるわけにもいくまい。つーか沢富さんの場合疑うどころか全力で信じられそうで逆にまずい。俺は適当に言い訳を考えながら、

「ああ、裏庭でさ。クラスの男子どもに今朝の呼び出しでそりやもうボコボコにされた」

「うふふ。もう、冗談ばっかり。あ、でもそつか。じゃあやつぱり裏庭にいたのつて、月城くんだったんだね」

……え？

「なんだか一人でぼーっと立つてたから、何してるのかなーと思つ

て。でも後姿だつたし、誰だかよくわからなかつたから声掛けられなかつたんだよ」危ない危ない、どうやらあの少女と会つていたところは見られてな 「でも、なんだか一人で喋つててつくり誰かこると思つたんだけ。あれなに？ お芝居の稽古でもしてたの？」

「……え？ なあ沢富さん、それいつから見てたんだ？」

「えつ。あ、うーん。裏庭に走つていいくところからだから、多分最初のほうはまだなんじだと思つ。あ、ごめん、見られたくなかった……？」

おーおー、どうしたことだ。あの場には確かにあいつがいた。それが、沢富さんには見えてなかつたつて言うのか。……いや、待てるよ。あの少女が魔法使いなら、あの鈴の音色が俺にしか聞こえなかつたのだとするなら、その姿を見えなくする事ぐらいできるんじやないだろ？ そう、もしかするとそれがあの少女の『魔法』なのかもしれない。ならば、それはそれで好都合だ。沢富さんに見られていないのであれば、それは良かつたんだから。

「どうしたの、月城くん。もしかして、怒っちゃつた……？」

「あ、いや違う違う。うん、ちょっと独り言の練習してたんだよ。あまりに思いつきな行動だつたから見られてたつて思うと恥ずかしくてさ。それだけだよ」

俺がそういうと、沢富さんは心底安堵したかのように胸の上を手でさすつた。

「よかつたあ、これからは気をつけるね。……あ、そうだ。ちょっと聞きたかったことがあるんだけど、聞いてもいいかな？」

「ん？ 何？」

「あのね、月城くんつて朝離さんのこと、好きなのがなあつて」「……、あのや。どうして紅憐の名前が出てくるわけ？」

「えつ、あ、だつて。その……いつも、仲良さそうだし。違うクラスによくお話してたりするから。だからどうしてかなつて」「ああ、そういうことか。そういうえば、俺と紅憐がどういった関係

なのが沢富さんは知らない。誤解するのも無理はないか。しかし、今更あいつと俺がそういう風に見られてるつてのは、誤解であれちよつときついものがあるけど。

「違うよ、あいつはただの幼馴染。言つてなかつたけどさ、小学校からの腐れ縁なんだよ」

「え？ そうだったの？ てつきり……なんだ、そつか……。じゃあ、瑠奈さんと同じようなものだよね？」

「え、あ

ルナと同じような関係、か。確かに設定上はそうかもしねない。生き別れ再会した妹、昔ながらの幼馴染。どちらも言つてしまえば好きになるとかそういう恋愛対象には不向きだとは思つ。だけど、沢富さんは知らない。俺とルナの本当の関係を。一言では言い表せない、複雑な事情が織り交ざつた俺達のことを。

「あの……ね」突然、沢富さんが俯きながら呟き始めた。「私その、実は……あの。月城くんの、ことが」

「え……、沢富さん？」

「私、ずっと前から……月城くんのことが好きです」

突然に唐突に突如に突如にいきなりだしぬけな、愛の告白だつた。沢富さんはあの後、俺の言葉を待たずとしてその場から逃げ去るようになくなってしまった。後を追つてみるも姿は見えず、結局何も言う事が出来なかつた。仕方がない。次に会うときまでに返事を考えておつか。本当、まさかあの沢富さんが俺を好きだつたなんて予想外にもほどがある。なんでもつと早く言つてくれなかつたんだろう。少しばかりか、かなり感動してしまつた。

「今まで誰かに好きだなんて言われた事なかつたからなあ、俺」
独り呟きながら、俺はとぼとぼと学校の校舎から外へと出る。そして、ふと思い出す。

『……私は。私は、貴方のそんなところが好きだった』

そうだ、そういうやあの黒フードの魔法使いもそんなことを言つていたような気がする。だが好かれるようなことを何かした覚えはないし、ただの聞き間違いかも知れないが

「覚えてない、ね……」

今の俺は一部の記憶を失っている。覚えているのは、一昨日。こんな風に一人学校の校舎から外へと出て、いつも通りに帰路に着いて。そこまでだ。ああ、その先が何も思い出せない。きっと、そこから俺は何か記憶を消されなければならないような事態に遭遇したんだろう。それがなんだったのか。思い出そうとするけれど、やはり無理だった。

「くそっ。情けないな俺も……ただ思い出せばいいだけだってのに。思い出せば全部理解できるって夜鈴が言つてたんだ、何で……」

「……、なんだって？」

「……夜鈴、そうだ。あの黒フードの名前。守崎夜鈴……！」

そう、確かにそんな名前だったはず。おかしい、どうして俺は知っている。いつ知った。あの黒フードの少女の名前を。いつ、どこで？

ちりん。

また、あの音が聞こえた。

「……、おいおい」俺は右手で顔を覆つよつ、「やうか、そう言う事かよ。……くつそ、あいつ。やつてくれたもんだぜ、まったくわ……！」

そう、これが合図。黒フードの魔法使い、黒髪の少女、守崎夜鈴。彼女が仕掛けた鈴の音。その『最後』の鈴の音を、俺は今聴いた。そして、

「……思い出したよ、ちくしょう。全て、何もかも……綺麗さっぱり」

俺はいつも通りの帰り道を、いつも通り一人で帰っていた。昨日のように誰かと一緒に帰るなんて事は無い。紅憐は校庭で部活動に勤しんでいたし、最近出来た妹は今日は先に帰宅してしまっている。寂しさは無い。別にいつも一人で歩いていた道だ。慣れている。慣れているのに、何かが物足りない気がしてくるのは俺の心が病んでしまったのか、それとも。とぼとぼと歩きながら、ふと左のほうへと視線を向けた。そこには一つの公園がある。西条公園と言う名前で、実はあまり行った事がない。つい最近、とある事情で立ち寄ることがあつたぐらいで。目線を前に戻し、俺はそのまま遠くに見える自宅のマンションを目指す。だけど、そこに彼女がいる。それで俺は何故か気兼ねしてしまう。何故か、なんて言づのはおかしな表現かもしれないけれど。だって、俺はもうその理由を理解できているのだから。歩いている途中で、ふと人影が見えたことに気が付く。そこには、いないはずの人間がいた。

「……紅憐？」

確か彼女は校庭で部活をしていたと思うんだが。陸上部のエースでもある朝離紅憐は、何故かそこに立ち尽くしていた。まるで、この俺を待っていたかのようだ。

(……考えすぎだらうけど。何してるんだよ、あいつ)

俺の姿に気がついたのか、紅憐はとたとてこちらへ向かって歩いていや、段々とスピードを上げて、次第に走り出した。なんだ、やはり俺を待っていたのだろうか。

「おっす、紅憐。何してんだこんなところで。お前、部活は？」

そんなことはどうでもいいと言わんばかりの顔で、紅憐は息を切れさせながら、

「……昴、アンタ思い出した？」

なんだって？ 思い出した、とはどう言つことだろ？ 俺が今まで記憶を失っていたことを、まさかこいつは知っていたのだろうか。

……いや、それは有り得ない。一度だつてそんなことを話したことはないし、ルナと俺はいつも一緒にだつたから、ルナがこいつに話したという線も薄い。さらばに言ひと、あの守崎夜鈴が紅憐とコンタクトを取つたとも思えない。つまり俺が記憶を失っていたことは紅憐は知らない。そう、知らないはずだ。

「どう言ひとどだよ？ 俺が何を思い出すつて？」

「瑠奈のこと。今までひつかかってたんだけど、みづやく想に出しだわ」

ルナ　まさか、あいつの魔法が解けたのか。本当はそんな奴はいなかつた、と言つ事を思い出したとでも言つのだろうか。有り得る話ではある。だが、紅憐は俺のそんな予想を裏切るかのように、「あの子、昔一緒に遊んでたあの女の子よね？ 確か守崎つて子。あんたによくお兄ちゃんお兄ちゃんとか言つて懐いてた」

「……は？ お前、何の話をしてるんだよ？」

「だから。昔……つん、ちょうど八年前だよ。あたし達が一緒によく遊んでたのが瑠奈でしょ？」

おいおい、まさか実は魔法が解けたのではなく『効き過ぎていた』つてオチなのだろうか。だが、守崎　俺の知つている、思い出した記憶の中にあるあの少女も、苗字を守崎と言つはずだつた。

「おい。本当にその子は瑠奈つて名前だつたのか？」

「はあ？ いや……だつて、そんなの覚えてないわよさすがに。守崎つて苗字だけは覚えてるんだけど。でも、さすがにアンタに妹がいたなんて考えられないし、それこそ記憶にならないから。だからそつなんじやないのかつて、アンタに確認したかったのよ

　おいおい、それじゃあまさか。

「……紅憐。悪い、その答えはまた今度だ」

「へ？ あ、ちょっと鼎！ 何処に行くのよー」

俺はその場から紅憐を置いて駆け出した。

一昨日前のことになる。俺こと月城昂は、学業を終えて帰宅途中の真つ最中だった。いつものごとく帰りにコンビニでも寄って雑誌の新刊立ち読みして、適当に食うもん買って家でくつろぐか、なんて他愛のない事を考えながら。そんなとき、彼女と出会った。

「……なんだ、あの子。今にも倒れそうに って、おいおい！」

目の前を一人の黒髪の少女がふらふらとした足つきで歩いていた。よく見れば、大分顔色が悪い。そのまま壁に手をつけて、もう限界だと言わんばかりの表情でその少女は今まさに倒れようとしていたのである。俺は咄嗟に駆け出して、その少女を抱きとめた。危ない、あのまま倒れていたらどこかを打つてしまつていただろう。打ち所が悪ければ人間簡単に死んじまつらしいし、何にせよ無事でよかつた……なんて安堵していると、

「……貴方、誰？」

俺の腕の中で倒れている少女が、最後の力を振り絞つたのではないかと思えるぐらいの小さな擦れ声でそう言った。

「ただの通りすがりだよ、それよりお前どうしたんだ。こんなところで、今にも死にそうな顔して。家はどこだよ？　いや、この際病院だな。連れて行つてやるから。心配すんな、安心しろ」

「駄目。いいから、ほうつておいて。貴方を巻き込むわけにはいかない」

「そんな事言つてもな、今にも倒れそうな女の子をここにで見捨てるような真似できるわけないだろ？　いいから俺に任せろよ。巻き込むだとか、そんな無駄なこと考えてんじゃねーって」

俺は半ば無理やりに、その少女を背負うよつにして抱え上げた。

少し悪いことをしているような気もするが、そんなことはないのだから多分問題はないだろ？　はたから見ればどう取られてしまつてもおかしくないけれど。

「……病院は」少女が呟いた。「病院は、駄目。長時間の滞在は周囲の人を巻き込んでしまう。どこか、あまり人目につかないところ

でいい。少しだけ休めば、回復するから……」

何を気にしているのかは解らないが、そう言つのであれば俺は無理に強制するわけにもいかない。どこか近くの公園で休ませてやろう。確かに近くに西条公園つてのがあったはずだ そこに行くとしよう。

俺は自宅のマンションへと帰宅していた。置いてきた紅憐には今度会ったときに謝つておこう。後が怖いが仕方がない。今はそれどころではないからだ。一刻も早く、ルナに会つて話を聞かないといけない。エレベーターは十一階に止まっていた。さすがに待つている時間が惜しい。俺は舌打ちをしてから階段を駆け上ることにした。一階、二階 と、俺はスピードを落とす事無く階段を昇つていいく。そうして自分の部屋の扉の前まで辿りつくと、そのまま力、ギギを使って中へと入つた。ルナがいることもあり、出かけるときは力ギを閉めないで出ていた。そのことから、中に彼女がいることは明白で。そこには笑顔で俺を迎える、ルナの姿があった。

「おかえり兄さん、遅かったわね。先に帰つて悪いと思つたから夕飯作つておいたわよ、今回のは自信作なんだからー！」

先に帰つた本当の理由はそれか……と思いつつ、俺は玄関で靴を脱いでリビングへと向かつ。

「なあ、ルナ」

「何よ。大丈夫、さすがにもう失敗はしないわよ？」

「違うつて。あのさ」

俺は、少しためらつ。このまま言つてしまつていいのだろうか。そうすることで、俺達はどうなつてしまつのだろうか。本当に、これでいいのだろうか、と。だが、そうしなければ先に進むことはできない。だからこそ、俺は口を開く決意をする。

「俺、思い出したんだよ。何もかも。だから」

俺が言つた瞬間、ルナは呆然と俺の顔を見つめていた。当たり前、

か。確かにこうなつてしまつたら、ルナはもう……。

「……そ。思い出したのね。あーあ、これでもう終わりかあ」ルナは先程までとは一変した態度でそう咳いて、「じゃあ、わたしと貴方の関係はこれまでね。……さようなら、短い間だけの兄さん」

だつ、と駆け出すようにルナは部屋から出て行つてしまつた。俺はただ立ち尽くし、何もいえないままそこで目を伏せていた。聞きたいことも、何も聞けなかつた。聞けるわけがなかつた。彼女について、俺は記憶が戻つた瞬間からただの他人なのだから。

でも。

最後に一瞬だけ見たルナの顔が凄く悲しそうだと思つたのは、俺の見間違ひだったのだろうか。

西条公園のベンチで、道端で助けた少女をしばらく休ませていた。俺も俺でこのままはいさよくならなんて言うわけにもいかないし、とりあえず隣で一緒に座つて他愛もない話でもしよう。なんて思つていたのだが、

(ぬあー、こいつなんも喋らねえ……)

約三十分程度だろうか、こうして沈黙を続けながらこうして座り呆けている俺と隣の少女。一応、名前だけは聞き出すことに成功した。守崎 そう、守崎夜鈴と言つたか。俺も名乗り返さないわけにはいかないので適当に自分の名前を告げたのだが、それ以降ずっと会話がない。休んでいるところにどうでもいいような話をするのも悪いと思つて何も言えないでいるのだが、これはさすがに気まずいというか、なんというか。

(さすがにこれ以上はきつい、きついぞ俺。何か話題を振らねば) 気になる事 は、ない事もない。と言うかぶっちゃけるとありまくるのだが、聞いていいものかどうか解らない。例えば、どうし

てあんなところで倒れかけていたのか。どうして病院は駄目なのか。

どうして、そんな絵本に出てくる魔法使いみたいな格好をしているのか、とか。

「あのせ……お前、どうしてあんなところで倒れかけてたんだよ？」

今更な疑問。だが、これだけは聞いておかなくてはならなかつた。

しばらくの沈黙の後、少女は静かに口を開く。

「……これ」と。

一言呟いて、俺に鈴を手渡してきた。

「へ？ 何これ、鈴……？」

「貴方は本来私と関わるべきではなかつたから。私と出会つた時から明日までの間のことを、何もかも忘れて欲しい」

「忘れ……って、誰にも話すなつてことか？ どうして」

「違う。そのままの意味で。忘れる」

意味がわからなかつた。忘れるって、記憶喪失にでもなるんだろうか。それとこの鈴にどんな関係があるのか解らん。

「なんだかよく解らないけど……、俺の問い合わせに答えてくれよ。どうしてあそこで倒れそうになつてたんだ」

「……敵と、戦つていた」 敵？ その格好と何か関係があるのだろうか などと俺が考えていると、「なんとか退けたけれど。不意打ち気味だったから、手傷を負わされた」

「傷つて、おい……どこか怪我してるのか？」

「大丈夫。まだ浅いから。もう大分良くなつてきた」

「良くないだろ、傷があるならちゃんと診て

「私は、魔法使いだから、大丈夫」

なんだつて？

「……おいおい、冗談はやめろよ。そんな演劇の格好みたいのしてるからつて

「……」

そこで黙るなよ。

「まあ、なんだ」 こじは話を合わせてやるついで踏んで、「その魔法

使いさんは敵と闘つてなんとか勝つたけど負傷しちまつて、それであんな場所フラフラと今にも倒れそうになつてたつてわけか？」

「……」ぐり、と少女は頷く。

「おーおい、マジかよ。もしかすると、俺は扱いに困つちまつみがな電波妄想少女とお関わりになつてしまつたのでしょうか。」

「昴」「ふと、守崎夜鈴が俺の名を呼んだ。「貴方は、どうして私を助けたの？」

「どうして、つて……。んなもん、目の前で今にも倒れそにしてる女の子がいたら、助けないほうがおかしいだろ?」

「……それは。女の子だったから、助けたつて意味?」

意味深な質問だった。俺は想像してみる。例えば

「 そうだな。目の前でイカつい兄ちゃんが倒れそつたとしたら、助けねえかも」

それぐらいのヤツなら俺が助けなくてもなんとかするだろ、自分で適当にな。

「……」「くす、と。

何だこいつ、今笑わなかつたか? ……なるほど、まったくの無表情キヤラつてわけでもないらしい。

「なあ、守崎……だつけ? お前」

「夜鈴でいい」少女は淡々とした口調で、「……そのほうが、嬉しい」

今度は顔を俯けながら、まるで照れ隠しのよつこやつ言つた。やっぱり、今不覚にもちよつと可愛いと思つてしまつた。別にそんなつもりで助けたわけじやねえつてのに。

「じゃあ、夜鈴。仮にお前が魔法使いだったとしよう。正直に言えば、俺はただのそこら辺にいる高校生風情なわけで、そんな唐突に突然いきなりそんな大胆な素性の告白をされても理解し難いわけだからまあ、一步譲つて魔法使いなんだと言つことにしておくとして。……その『敵』つづーのも、魔法使いなのか?」

「……」こくり、夜鈴は無言で頷いた。

「じゃあ次な。魔法使いつてのは、俺でも知ってるような絵本とか小説の物語に出てくるような、あの魔法使いそのまんまつて見識でオッケー？」

「……それは、ちょっと違う」「う

「違う？　じゃあ、具体的に夜鈴の言つ『魔法使い』ってのはなんだよ」

「魔法使いにも様々な種類が存在する。そう、昂が思い描いているような魔法使いももちろんこの世のどこかに存在していると思う。けれど、少なくとも私はそういう魔法使いとはまた別の種類に位置する存在。例えるなら、『動物』というくくりの中には犬とか猫とか色んな種類がいるけれど。あれと同じ。つまり『動物』というくくりが『魔法使い』というくくりで、そのくくりの中には様々な種類の存在がいるっていうこと。昂の知ってる魔法使いが犬なんだつたとしたら、私は猫」

なんだかすごく飛躍した例えだが、言いたいことは大体理解できた。だが　それでも、やっぱり俺は簡単にそれを信じることは出来ない。

「大体解つたけどさ。魔法使い同士で戦うつてのは、それなりに危険なんじやねえのか。傷だつて負つたんだろ。そんな危ないことして、もし万が一のことが起きたら　」

「万が一　それは、どちらかが死ぬ、ってこと？」

「……ああ

「そう。それが、多分。……敵の魔法使いの目的なんだと思う」「どう言う事だ。まさか、本当にこの少女とその敵の魔法使いつてのは『殺し合い』をしてやがるつてのか。おかしいだろ、まさかこんなまだ俺と同い年くらいの少女がそんなことをしているなんて信じられるわけがない。

「敵の魔法使いは恐らく私という魔法使いの存在の抹消を望んでいる。そうでなければいきなり襲つてくるわけがない。それに、そうする為の理由だって私には理解できるから」

「理由、だつて？」俺はもう我慢できないと言わんばかりに、「人を殺すのに理由があれば、それは認められるってのか？　んなわけねえだろ、たとえどんな事情があつたとしたって人を殺すなんてのは最低のすることだ。」冗談でも、言つて悪い事がある

「……冗談じやない」夜鈴は今までにないくらい真剣な眼差しだつた。「言つても信じてもらえないかもしれないけれど。魔法使いは実在する。そして、私と敵は間違なく戦つている。……きっと、どちらかが倒れるまで終わらない」

ルナが去つてから少しの間、俺は玄関でただ呆然としているだけだつた。しばらくしてようやく気分も元に戻り、重い足を動かしてリビングへと歩く。できれば、その光景をこの目に焼き付けたくはなかつた。

「は、は……最低だよ。最低の最低、ドでもクソでも何でもかんでも付きまぐるくらいいの最低ヤローだよ俺は……」

そこには、今日の夕飯が並べられていた。朝食のカレーはもちらんのこと、それとはまた別に作られたサラダやスープがそこにあつた。間違いなく、ルナが用意してくれていたものだつた。彼女は一体どんな気持ちでこの料理を作つてくれていたのだろうか。どんな気分で、俺の帰りを待つついてくれたのだろうか。そう思えば思うほど、胸が苦しくなる。だが、それ以上に吐き気がする　他の誰でもない、この自分自身に！　俺は馬鹿だつた。思い出した、ああそうさ何もかも思い出した。守崎との出会いも、本当はルナが守崎を襲つたのだという事実も。その後も何もかも、俺は全て思い出したさ。

だから、何だつていうんだ。ルナは何もかも知つている

自分の事も、俺の事も、守崎の事も。この状況がどういうもので、どうしてこうなつたのか、何もかもだ。知つた上で　俺と一緒にいたんじゃないのか。俺が記憶を取り戻したせいで、ルナは俺

の元から去つていった。でも、記憶を取り戻した今でも俺の気持ちに変わりはない。それを、俺は一番に彼女に伝えたかったのに言えなかつた、言う事が出来なかつた！ 俺は今、正直に言えば迷つてゐるんだろう。ルナを好きだと言うこの気持ちに変わりがないとしても、そんな彼女のこと信じて良いのか、未だ解らないでいる何とも滑稽だ、反吐が出る。目の前のテーブルに載せられ並べられた料理を眺めながら、俺は自然と拳を握っていた。どうしてあの時、あの瞬間に俺は口を開く事ができなかつた？ 追いかけることすら出来なかつた。どうして、何故？ 理由は、明白だつた。

「……結局、俺はルナを信じられなかつたつてことじゃねーか」
たつた一日間、一緒にいただけで 人間なんて、そう簡単に信頼し合えるものじやない。…… そうさ。記憶を失つていたからこそ生まれた、ただのその場限りの醜い感情に振り回されただけの男 それが俺なんだろ。

ゴガン！ と、俺は壁を左手で殴りつけた。拳が痛むのを無視して、思いつきりに。

「それこそ、馬鹿らしいだろうが……」

記憶を失つていた だから何だ。俺はただ、一日の半分程度の記憶しか失つてない。それに比べて、俺はルナと一緒に一日も共にした。単純計算でいえばルナと共にいた時間のほうが、遙かに失つていた時間より多いじやないか。

いや、理屈はもうどうでもいい。この光景が、今まで過ごしてきた時間が、彼女の言葉が、あの去り際の表情が 何もかもが、全てを物語つている。気付けよ月城昂 いくら鈍感だからつて、今ここで気付けなければ全てが手遅れになる。 そうなる前にやるべき事があるんじやないのか。だからこそ、俺は今ここでもう一度はつきりさせなければならぬ。

「そうだよ。何を迷う必要があるってんだ」

月城昂は、あの少女の事が、好きだ。

「見つけたわ」

不意に、どこからともなく声が聞こえてきた。瞬間、ベンチに座つて休んでいたはずの夜鈴が立ち上がる。

「どこまで逃げたのかと思つたら、こんなところにいたのね『幻想遣い』。いくら公園といつても、この辺じや人目が付かないわよ？」

まあ、それを考慮してこの場所を選んだかも知れないけれど

突如現れた声の主は、少女だった。長い金色の髪を靡かせながら、じわりじわりとこちらへ歩み寄つてくる。こいつが、敵の魔法使い……なのか？

「夜中まで逃げられなかつたのは残念ね、『幻想遣い』？ こうも明るいと、貴女の魔法も機能しにくいでしょ？ どうして解るのが、なんて聞かないでよ。わたしだつてそれなりの魔法使いだもの。一戦交えただけでそれなりに相手の能力は把握できるわ」

「……」夜鈴は無言で答える。

「ふうん、あくまでだんまりつてわけ？ それはそれで面倒がなくてとても結構なのだけれど ひとつ、聞いてもいいかしら？」ふと、金髪の少女の目線がこちらへと向けられる。まるで異物でも見るかのような、鋭い視線。「そこにいるのは誰？ 見たところただの一般人のようだけど……手駒にでもしたわけ？」

じり、と夜鈴が俺の前に立つ。

「この人は関係ない。偶然、倒れ掛かっていた私を助けてくれただけの、一般人」

ちくり、と何かが胸に突き刺さるような気分を覚えた。関係ない

確かにその通り。ただの通りすがりの俺はどこまでたつても今までのままでは無関係の一般人に過ぎない。だけど、その言葉が俺は少し気にいらなかつた。信じたわけではないが、この一人の空気は明らかに異常だつた。魔法使いではなくても、今にも殺し合いを始め

てしまいそうな そんな不安感が俺の脳裏に押し寄せる。

「へえ。ま、わたしあれどもいいけれど。なら関係ない人にはさつさとこの場からいなくなつて貰うとして。……早急に事を終わらせましょう」

「待て、ちょっと待てよお前」俺は思わず口を開いた。「何で夜鈴を襲おうとする？ 彼女が何をやつたって言つんだ？」

俺の言葉に、だが少女は眉一つ動かさなかつた。ただ、平然と。それが当たり前のだと言うように、呟く。

「貴方には関係ないわ」

瞬間、金髪の少女が動いた。だが、それにあわせるかのように一秒としなかつただろう、田の前の夜鈴が姿を消していった。

「な、転移？ そんなことが……」

斬りかかった金髪の少女は、そう言いながら周囲を見回す。何が起きたのか俺にはさっぱり解らない。解るのは田の前に今『敵』の少女がいること。そして、いつの間にかその手には剣のようなものが握られていることだけ。剣のようなもの、とは言つても、実際に剣の形をしているわけではない。まるで光が形を持ったかのように彼女の手に握られ、それが剣のように見えたのである。これが『魔法』だと言うのか。一つ解るのは、この金髪の少女は俺に危害を加えるつもりはないようだつた。真っ先に夜鈴を狙う辺り、ターゲットのみに重点を置いて攻撃を加えるつもりらしい。

「うあつ！」

どや、と突然金髪の少女が前のめりに倒れた。手に握られていたはずの剣のようなものはなくなつていて、その向こう側には、守崎夜鈴が立つていた。後ろから攻撃したのだろうか。金髪の少女は不意打ちでも食らつたかのような姿勢で倒れている。

「……確かに、昼間では私の魔法もあまり使えない。けれど」夜鈴は無表情で、目の前の少女を見下ろしながら、「脅威を退くことぐらいは、出来る」

今度は、金髪の少女の姿が消えた

同時に金属音。

「……くつ」夜鈴は苦そうに顔をゆがめる。

「判断力はいいみたいね、『幻想遣い』。それにその手に握られているのは　さしづめ日本刀ってところかしら。魔法使いには似合わない武器よね。……銃刀法って、ご存知？」

「普段は隠しているから。それに……これは、普通の人間には見えない」

「ふふ、対話するレベルの余裕は、あるみたい……ね！」

ガキン！　と音がして、二人は飛び退いた。互いに距離をとり、じりじりと間合いを詰めていく。気が付けば、夜鈴は魔法使いの装束よろしく黒フードを脱いでいた。いつ脱いだのだろう、まったく解らない。黒フードの下は制服だった。だが、ウチの学校のものではない。ふと、夜鈴と目線が合つ。逃げる、とても言いたいのだろうか。確かにこの状況、疑いを持つていては馬鹿馬鹿しい。魔法使いかどうかはともかく、この一人は明らかに常軌を逸していた。そんな場所にこれ以上いられるわけがない。俺のような一般人が、だ。……自然と、唇が引きつっていた。笑っている。俺は、こんな状況になつて　何故だか解らないが、笑っていた。

「上等だ……」俺は誰にともなく呟いて、「魔法使いだかなんだか知らないけどな。一度関わった以上、俺には見捨てる事なんてできねえんだよ……！」

俺は並べられている料理にラップをかけ、そのまま部屋を後にした。この街は広い。むしろ、もうこの街にはいないかも知れない。だが、それでも探さなければ気がすまない。探して、見つけ出して。たつたひとつずつ言葉を伝えなければ気がすまない。まだそれほど時間が経つていても。ここからそれほど遠くまではいけないはずだ。それに、今日は夜鈴との決闘もある。この街からいなくなることはあまり無いと考えてい。

「……まさか」

俺はひとつこの場所を思い浮かべて、その場所へ向けて走り出す。もし俺の勘が外れていなければ、ルナはきっとそこに居る。

「やめろッ！」

俺は一人の対峙する場所へと駆け出した。どうなるか、なんて知つたことじやない。今は、あの一人をなんとしてでも止めないと。

「昂、避けて……！」 夜鈴が叫ぶ。

瞬間、俺はいつの間にか公園の端にある草むらに倒れていた。身体が痛い。何が起つたのか理解できない。あまりに一瞬の出来事だつた。恐らく、あの金髪の魔法使いが俺に攻撃を加えたのだろう。「くっそ……、手も足もでなつてのはいつ言つ事かよ、ちくしょう」

幸い というよりも、わざと急所を外しているという感じが否めないが 致命傷も負わず、身体だつて動かそうと思えば動かせる。だが、さすがにこれではただの足手まといにしかならないだろう。二人を止める術なんてものは、俺には皆無だった。

「それでも、やるしかねえだろうが」

ぐつ、と力を入れて立ち上がる。夜鈴と金髪の少女は、以前戦いを続けていた。人目がつかない場所とは言え、さすがにこの光景は凄絶だ。誰かに見られればたまたものではないだろう。光の剣（とりあえず正体不明なのでこう呼ぶ事にする）と日本刀の、剣戟の応酬。とてもではないが一般人の動きとは思えない一人の動作に、俺は一瞬現実を疑いたくなつた。普段は隠しているらしい夜鈴の日本刀も、今では俺にも見える。どこに隠していたのだらう。あの黒コートの中だらうか。

「力で敵わないなら、言葉でなんとかしてやるぞ」

実際問題、俺にはそれしかなかつた。言葉で理解するような相手

ではない氣もするが、それしか方法はない。立ち上がり、歩き出す。
そこで対峙している一人の少女を止める為に。

「一人とも、もつやめろつてしまんだよ！ どんな理由があるのか
知らないけどな、どんな理由があつても人を殺していいことにはな
らねえだろ！」

叫ぶ。完膚無きまでに。身体中に痛みが走るが、そんなものは関
係ない。俺の声に気付いたのか、金髪の少女が動きを止めた。それ
と同時に、こちらへと向かってくる。

近付いて

「……、がはッ」

蹴りを腹部に入れられた。

「何それ、正義の味方でも氣取つてゐつもり？」金髪の少女は嘲る
ように言つ。「笑わせないでよ、そう言つのつて凄く虫唾が走るわ
」それだけ言つて、金髪の少女はその場から飛び退いた。入れ違い
になつてやつてくる夜鈴。その表情には困惑とも悲愴とも取れるも
のがある。

「……どうして」夜鈴は心底解らないと言つた風に、「どうして着
いて来るの？」

「俺はもう無関係じゃないからな」

「どうして逃げ出さないの？」

「言つただろ。俺は危ない女の子を見ると見捨てられないんだよ
」俺は蹴られた腹部を抑えながら、言つ。まだだ。まだ立ち上がり
る。こんなところで諦めてたまるか。無関係だなんて、言わせるも
のか。そんな俺を見てか、夜鈴は不安そうな表情を隠せずに、呟く。
「どうして、貴方は立つていられるの？」

「やるべき事があるからだろ」俺はさも当たり前のよう、そう言
い放つた。「俺のこと、信じられないか？」夜鈴

夜鈴は、何も言わなかつた。そりやそうだ、さつき始めて会つた
ばかりの男を信じろなんてほうがおかしい。おかしいに決まつて
だけど。

「俺が守つてやる、お前を襲おうとするやつから。だから、信じてくれ」

夕焼けが綺麗な黄金色に輝く、夕暮れの西条公園 少女・ルナはそこにいた。公園のベンチ 一昨日、俺と夜鈴が座っていたその場所に、ただ一人佇んでいる。

「やつぱここか

俺はそれだけ呟いて、ルナの元へと歩いて行く。ルナは特に返事もせず、こちらに振り向きもしなかった。ただ黙ってそこにいる。まるで薄幸の少女を描いたような光景に、俺は少し罪悪感を覚えた。どうやら、と少し乱暴気味にルナの隣に座り込むと、俺は空を眺めながら「ふう」と溜め息を一つ吐いた。

「……覚えてる?」唐突にルナが口を開いた。「こりで、わたしとあの魔法使いが戦つて。止めに入ってきた貴方に一度も攻撃したのよ、わたし。手加減はしたつもりだけど、痛かったんじゃない……?」

やつぱり、手加減されていたのか。それにしても思い出すたびに痛みが蘇るようで、あまり思い出したくはないが そう、今思えばあの時がはじめてルナとともに顔を合わせた時だった。

「そうだな、ちょっと痛かった」

ちょっと、なんてのは強がりだつた。間違いない、あの時は立つのが限界ぐらいの痛みはあったのだから。それでも、俺はそれを口にすることはない。

「……そう。そして、その後 わたしはあの魔法使いに負けそうになつた。戦いを止めさせようとしたのが、そこに飛び込んできた貴方を盾に、わたしはこの場から逃げ去つたわ。正直、あの時は本当にマズかった。油断していたと言うのもあるけれど……それ以上に、あの魔法使いにとって貴方の存在が重要だつたみたいね」

「夜鈴にとつて、俺が？　まさか。俺はただの通りすがりの男だつただけだよ」

「でも、それならどうして貴方はああまでしてあの子を助けようとしたの？」

それは　きっと、見捨てるのが気まずかつたから。そこで逃げ出したら、俺はきっと後悔すると思つたから。

「……まあ、でも。そこが貴方らしいって言えば貴方らしいんだけどね」

「ルナ、お前……」

「全部思い出したんじょ？　なら大体解つてると思うけど、この騒動の原因はこのわたしよ。わたしが彼女を殺す為にこの街へやつてきた。ううん、正確には『とある事件』を片付けるためにね。その首謀者としてあの子　守崎夜鈴が候補に挙がつた。実際、魔法使いなんてものは稀少よ。そして今回の事件は魔法使いにしか有利得ない。だからこそ、あの子を疑つた。そして証拠も見つけた。目撃情報があつたのよ」

事件　さしづめ、ルナは外国からその事件を解決するためにやつてきた魔法使い、つて所なのだろう。そして、その事件の犯人が守崎夜鈴つてわけか。なるほど、あの時部屋で見ていたニュースはそれか。

「俺には、夜鈴がそんなことをするような奴には見えないけどな」「それでも有り得ないのよ。こんな極東の島国の、それもちっぽけな街程度に魔法使いがいるつてこと自体異端なのに、それが二人以上いるなんて有り得ないもの。彼女が犯人よ」

「…………俺は何も言えなかつた。それを否定する材料は、俺ではない。」

「まあ、これでわたしの事情は話したわよ。どう、これで気分はすつきりしたかしら。ここまで追いかけてきたのだつて、どうせわたしの動機が気になつた……とかでしょ？」

「気にならなかつた、つて言えば嘘になる」俺は一息置いて、「だ

けどな、俺がここまでルナを探してきたのはそんなちっぽけな理由じゃない」

「……で、初めてルナは俺へと田線を移した。何も変わらない、ルナの顔。そうだ、ルナは何ひとつ変わっていない。変わったのは俺だけで。変えるか変えないのかを選ぶのも俺なんだから。

「俺が記憶を取り戻したからって、何が変わるっていうんだよ？」

「……どう言つ、意味？」

「ルナは全部知つたろ？　俺みたいに記憶を失つていたわけじゃない。今までのルナは全部偽りだつたのか？　そうじゃないだろ。確かに俺に嘘をついていたかもしない。まあ、正直ほとんど嘘だつたんだろうな。言葉の上では。でも、違うだろ。ルナは俺と一緒にてくれた。俺のことを嫌いじゃないつて言つてくれた。後悔してるつて言つただろ。全部嘘なのか？　……嘘じやないよな」「どうして解るの？　全部嘘かもしれないじやない。わたしはただの嘘吐きなんだから」

「……じゃあ、どうしてルナは泣いてるんだよ？」

「それだけだつた。俺がそれだけ言つと、ルナはわけが解らないと言つた風に、

「泣いてる？　わたしが……？　なんで、どうしてよ。わたしは魔法使い、ルナミス＝サンクトリアよ？　そのわたしが、どうして泣かなくちゃいけないの。ねえ、どうして」

ぱろぱろ、と。ルナの瞳から、小さな涙の粒が浮かんでは流れていった。

「……俺、昨日も言つたけど。もう一度、言わなきゃいけないことがある」

「やめてよ。もう、何も……言わないでよ……」

ルナの瞳を見つめる。涙は止まらず流れ、目は少しだが充血していた。頬は赤く紅潮し、歳相応の子供のように彼女は泣いていた。

「記憶が戻ったから何だって言うんだよ？ 何も関係ないだろ。俺とルナが築き上げた一日間の思い出には何の支障もない。俺が抱いたこの気持ちにだつて何の変化もなかつたんだよ。迷つたことは認める。一瞬だけ、どうしたらいいか解らなかつたのも認めるさ。でもな、結局何も変わりはしなかつた。俺は、俺の気持ちは……何も変わりやしなかつたんだから」

ルナは何も言わぬ。何も言わず、俺をただ見上げていた。隣に座つているルナを、俺は無理矢理抱き寄せる。抵抗はない。いや、抵抗されたつて今回ばかりは容赦しないけど。

「だから、俺はさ」手でルナの涙を取つて、そのまま頬に触れる。ルナの頬は熱くて、そして柔らかかつた。「ルナの事が、好きだ」

もう、これ以上の言葉は必要ない。言いたいことは、全て言い尽くしたのだから。

「……ばか」

それだけ呟いて、ルナは今度こそ本当に心底泣き崩れた。

「で、結局どうするつもりなんだ？」

俺はルナを半強制的に自宅へと連れ戻し、リビングで食事を開始した。最初は戸惑っていたルナだったが、やはり一緒に食事を取ることに不満はなく、むしろ望んでいたのだろう。それほど苦もなく食事を行うことができた。俺は、これから行動を考え、ルナにどう動くかを問うた。

「……魔法使いとしてわたしにもそれなりのプライドがあるんだけど。まあ、今回は貴方に免じて一步譲るわ。そうね。仮に守崎夜鈴が今回の事件の犯人ではないとするなら、犯人は別に居ることになる。それも、確實に魔法使いよ。でも、それを確かめる方法は存在しない。向こうからノコノコと出てきてくれるはずがないし、あの

守崎夜鈴以外にそんな存在が居るって言う情報もまったく無い。いわば手がかりがないのだから、こうなれば守崎夜鈴を疑うのは当然の行為よ。そこは解つて貰えるかしら

「解るさ、解るけど……俺はやっぱり、夜鈴がそんな事をする子だとは思えない。第一さ、事件つて連續殺人事件なんだろ？ それも、獵奇的な。そんな暴力的な行動を、あの子がすると思うか？」

「感情論ね」ルナは厳しい声で言つた。「貴方のそれはただの憶測に過ぎない。守崎夜鈴という少女の表面に惑わされているだけかも知れないわ」

確かに、それはそうだ。俺が夜鈴と出会い、会話したのは本当に「ごくわずかの間だった。それだけで、その人間の全てを理解したような態度取るのは傲慢だと言える。そう、そんな事は百も承知。理解出来ていてる上で、俺は言つ。守崎夜鈴を犯人と決め付けるのはまだ早い、と。

「そうだな。それは正しいよルナ。だからこそ俺は言つてるんだ。確定ではないのなら、真実を確かめようつて」

「どうやって？ それを、どうやって確かめるのかをわたしは聞いているのよ。だって、さつきも言つたとおり他に魔法使いが存在するなんてデータは無いし、わたしがこの街で感じ取つた魔法使いの存在はあの守崎夜鈴だけなんだから。もし他に犯人がいるのだとしても、確かめる術がないじゃない」

「簡単さ」俺は得意げに、「夜鈴に協力して貰つ」

「な……、何を言つてるの？ ばかだとは思つてたけどこれほどばかだとは思つてなかつたわ。貴方、その守崎夜鈴と、わたしは今日決闘するのよ？ 申し出はすでに受けた。これは正式なものよ。魔法使い同士の正式な決闘。派閥は関わつていないとはいえ、これは魔法使い自身のプライドの問題だわ。わたしだつて、今更引き下がるつもりもないもの」

決闘。夜鈴が何を目的にそんな事を申し出たのかは解らないが、それを一度受けてしまつた以上、ルナと夜鈴はもう一度対峙する運

命にあるつてことか。

「だけど、今はもうルナにとつて夜鈴は殺す対象ではないだろ？」

「少なくとも、本当の犯人かを確かめるまでは」

「そうだけど……、それも貴方の言葉を尊重しての行為よ。本来なら、ここで決着をつけるつもりだつたんだから」

「決着、ね……。じゃあ、こう考えるんだ。ルナが夜鈴に勝つ。勝った場合の条件はこうだ。『この街で起きている事件の真相を突き止める為に、守崎夜鈴はルナミス＝サンクトリアに惜しみない協力をを行う』ってな」

「……なるほど。それなら守崎夜鈴を監視下に置きつつ、事件の真相を調べる事が出来る。もし守崎夜鈴が犯人なのだとしても、それが明かされたときは速やかに対処を行える　ふうん、ばか兄にしてはなかなか面白いじゃない」

いつの間にかばか兄呼ばわりされてるのだが。

「でも、それじゃあ負けた時の条件は？」ルナは少し苦い表情で、「わたしが勝つた場合の条件を提示するのなら、負けた場合の条件も提示するべきよ。それはもちろん、向こうに決めてもらうのが一番だろうけど……万が一のことも考えて、こちらが用意して置くことに越したことはないわ」

「そうだな……」

ルナが負けたとき、か。そういうえば、ルナは今まで一回、夜鈴と対峙して二回とも退けられている。夜鈴が強力な魔法使いだと言う事は明らかだった。

「それに」ルナは難しそうな口調で、「決闘の場は夜、深夜よ。彼女が戦うに絶好のフィールドを用意された。それが本来フェアなのだろうけれど、そうでない時でも十分な強さの持ち主だったわ。悔しいけれど、彼女の本気にはわたしだって負けてしまうかもしれないのよ」

「夜……？　どうして夜が絶好なんだ？」

「これは事前に得た情報だけれど……、彼女はわたしと正反対の性

質を持つた魔力の持ち主なのよ。つまりわたしが『光』なのに対し
て、彼女は『闇』なわけ

光と闇 まるで彼女達そのものを現した構図だった。

光 つまりは白ガルナ。

闇 つまりは黒ガ夜鈴。

なるほど確かにイメージには当て嵌まる。魔力というのは、彼女達のイメージから生まれるものなのだろうか、と、ルナを眺めながら思う。

「何よ、じろじろ見て」

「いや……魔力ってのが良くわからないから少し考えてた」

「解らないなら聞きなさいよね」ルナは呆れたように、「魔力にも種類があるってこと。それによって扱える魔法のタイプが変化するわ。魔法使いにも種類があつてね、それは大体魔力とか、学んだ環境によつて変わつてくる。わたしの場合は魔力が光に向いていて、学んだものが精神学だつたつてだけの話。『言葉の魔法』は魔力によつて決まつた魔法ではなくて、わたしが学んで生み出した魔法つてわけ」

そうなると、あの時戦つていた時に手に握られていた光の剣は、ルナの魔力によつて決められた魔法、つてことになるんだろう。ようするにゲームとかでよくある属性みたいなものか、と適当に考える。

「話を戻すわよ。つまり夜つて言つのは闇が多く集つ時間帯なの。だからこそその守崎夜鈴。『幻想遣い』のフィールド、つてわけね」

「その、『幻想遣い』つてのはなんだ？ ルナの『言葉の魔法』みたいなものなか」

「それは魔法使いの呼び名のようなものね。一つ名 と言えば解り易いかしら。わたしの場合は『月光の聖女』なんだけど」ルナは少し恥ずかしそうに、「まあ、ようするにその魔法使いを一言で表す名前みたいな感じね。だから、実際にはわたしも見たことないけれど、守崎夜鈴はその名の通り『幻想』を『遣う』魔法使いの可能

性が大きい」

幻想を遣う よく意味がわからなかつたが、ルナもあまり解つてゐるようではなかつた。本当にただ名前をそのままの意味で捉えただけなのだろう。大体何だよ幻想つて。

「とにかく、まずは夜鈴に勝たないといけないってわけか……。俺としては、もう一人には争つて欲しくないんだけどな。でも、それは二人のプライドが許さないんだろ?」

「ええ」ルナは一言で返事をする。

「なら、仕方ない。俺は手も足も出さないよ。だけど、これだけは約束してくれ。何があつても、夜鈴を殺すようなことはしない、つて」

俺は真剣な顔付きでルナに言い寄つた。だが、俺のそんな言葉はまるで予想通りだつたとでも言わんばかりの表情で、ルナは言葉を返す。

「解つてるわよ、それくらい。わたしだつてむやみやたらに人を殺したいなんて思つてないんだから。それこそ今回の事件の犯人よ。任せておきなさい、わたしは必ず勝つ。勝つて、この事件をさっさと終わらせてやるんだから」

ルナは何の迷いもなくそう言ひきつた。ああ、これは嘘じやない。ルナは本当にそう思つて言つてゐる。短い付き合いではあるが、俺にだつてそれくらい解る。

「問題は、夜鈴だよな……。まさか、あいつはルナを殺そつとはしないだろうけど」

「何よ、まさかわたしが負けるかもとか言つてたのは誰だよ?」「いやいや、さつき自分で負けるかもとか言つてたのは誰だよ?」「もしもの話よ。ふん、わたしが本氣を出したらあんな魔法使い、すぐにでもひれ伏してやれるんだから」

俺としては複雑な心境なのだが、ここは事を上手く運ぶためにルナに頑張つて貰うしかない。何の為に守崎がこんな決闘を申し出した

のか。その理由は解らないが、どの道今の俺には口を挟む余地なんてどこにもなかつた。

かくして決闘の時間がやつてきた。午前零時まであと三分とない。俺とルナは、西条公園の噴水前にて夜鈴の到来を待つていた。はじめ、俺はルナに来るなと言われたのだが、さすがに、ここまで関わつてしまつては俺も最後まで見届けなければ気がすまない。この決闘に意味があるのかどうかは俺には解らない。決めるのは彼女達だ。そして、その先に続く未来という名の道を決めるのも。まるで選択権のない傍観者を気取るしかないので俺は、公園の噴水から遠くに位置するベンチを観客席にすることにした。どうも緊張感が無いが、仕方が無いだろう。俺は心の奥では心底安心しているのだから。これ以上、二人が無駄に傷つけあうことはない。殺し合つではなく、ただ互いのプライドを守るために戦う。それは、さながら格闘技の大会の決勝戦のような気分ではないだろうか。故に安心できる。ただの観客として振舞える。これがきっと、最良の結果だと信じて。

しばらくして、時計の針が午前零時をぴったりと差した頃

「来たわね」

噴水の反対側、公園の逆の入り口から守崎夜鈴が姿を現した。あの黒装束を身に纏い、無表情のまま、ルナの元へと歩み寄つてくる。

「…………」

ふと、夜鈴と目が合つた。結局俺はルナの元から離れなかつた、その事実に落胆しているのだろうか。記憶を取り戻してもルナ側にいる俺を、彼女はどんな気持ちで見ているのだろう。だが、そんな杞憂はすぐにきっと解消されるはずだ。

「魔法使い、『幻想遣い』の守崎夜鈴。貴女の決闘を受けにきたわ。

ふふ、今回は手加減なしでいくわよ。深夜のフィールドは貴女

にも絶好の場のはずだし、わたしも容赦しないんだから

ルナが大胆不敵に言い放つ。だが、夜鈴はそんな事は構わないと

言つた様子で、

「……始めに言つておくけれど。私は負けない、負けられない。昂を、貴女の手から救うために」

俺を救う　まさか夜鈴は、たつたそれだけの理由で決闘を申し出たつていうのか。

「ふうん」ルナは少し引きつった表情で、「どうしてあのばかに固執するのかは解らないけれど……残念ね、あれはもうわたしのなんだから」

「は……はあつ？　ルナ、お前いきなり何を……！」

「うるさいわね、黙つてなさいよ部外者！」ルナは何故だか知らないが怒りだした。「いい？　守崎夜鈴。わたしの目的は貴女の抹消のはずだつたんだけれど、そこのばかのおかげで気が変わったのよ。こちらがもし勝つた場合、貴女にはとある事件の捜査に協力して貰うことになるわ。これは、そこの　月城昂が決めたことよ」

「……？」わずかながら、夜鈴の表情に疑問が浮かんだ。「どう言うこと？　ルナミス＝サンクトリア……貴女の目的は、私を倒すことによる魔法使いとしての地位の昇格、のはず」

「ああ、それはただの勘違いってやつよ。……わたしの目的はね、この街で起きているとある事件の犯人を抹消することよ。ぶっちゃけると、地位の昇格とかそんなのどうでもいいわ。っていうか、その為に他の魔法使いを襲うなんて馬鹿げてるとも思つてるし」

ぽかん、と。あの無表情が特徴な夜鈴でさえ、その言葉には呆気を取られていた。そう　守崎夜鈴は誤解をしていた。いきなり魔法使いが同族に襲われる理由なんて、実際それぐらいしか思い浮かばないのでどう。仕方が無いとはいえ、それは本当に衝撃的な事実のようだった。

「それなら、何故……昂に近付いた？」夜鈴は、さらに疑問をぶつける。「貴女の行動には不可思議な部分が多くさる。どうして無為

に虚偽行為を行つてまで昴に近付いたの？」

「う、と。今度はルナがたじろいだ。決闘はどうしたのだろう、さつきからまるで戦いが始まるような気配が感じられない。これではただの口論だつた。

「そ、それは……貴女に負けそうになつたから、隠れ蓑が必要で

」
「嘘」「ルナの言葉をさえぎるよつに、夜鈴が言つた。「確かに、一時的に一晩くらいの宿を確保するためならば理解できる。でも、それは違う。貴女は現に、一日間も滞在し、尚且つ昴の記憶が蘇つても居座つてゐる。その理由は、何?」

「夜鈴、それは

ルナが俺の所にいるのは俺のせいでもある。俺が望んだからだ。それ以外に理由なんて、

「そう、そうね。あはは、おかしいわよね！ 確かに滑稽だわ！」

その時。唐突に、ルナが笑い出した。まるで追い詰められたよう、投げやりに、「そう、最初はそれだけのつもりだったわよ。一日もすればいなくなつてやろうと思つてた。学校へ行つたのだってただ的好奇心だし、特に意味はなかつた。でもその日の夜……わたしはいつの間にか『いつまでここにいられるのか』を考えてた！ ばかみたいよね。わたしみたいな魔法使いなんて異端な存在が、普通の暮らしを続けられるだなんて事、あるわけないのに。だつて言つのに、いつまで偽りの兄に甘え続けて今の暮らしを続けられるのか、それだけを考えて夜も眠れなかつたのよ。……うふふ、本当に。ただのばかよね

」
「……」夜鈴は無言で返す。

「そう、結局のところわたしは『普通』に憧れていた。今回の事件を終わらせて、本国に帰るという選択肢を常に持ちながら、その反対側で、ここに残つて暮らし続けたいといつ、自分自身の本音があつた。どうしてそんな気持ちを抱くよつになつたのか、その時は理解できなかつた。だから、わたしは今日、貴女を倒して、さつ

さと事件を片付けて。本国に無理矢理にでも自分を連れ帰つて、夢から覚めようと思つてた」

静かだつた　ただ公園の中心で、一人の少女の独白が続く。

「でも　それももう終わり。我慢するのって良くないわね。つくづく実感したわ。だからわたしは決めたのよ。これからは、自分の好きなように生きる、つてね」

「……それと。昴と一緒にいる事にどんな関係があるの？」

「解らないの、ここまで言えば解ると思つたんだけどな。……笑

いたいなら笑いなさいよ、守崎夜鈴。そう　このわたし、魔法使ムンライトプリンセスい『月光の聖女』ルナミス＝サンクトリアは、そこにいるばか兄、月城昴を何の間違いか好きになっちゃったのよ！」

俺の心に衝撃が走る。まさかこんなタイミングでそんな言葉を聞かされるハメになるとは思つていなかつただけに、俺は何と言つて良いのか解らずただ啞然としていた。

「自分でも自身の精神を疑うけど。この気持ちを一言で言い表せて言つなら、つまりは『そう言つ』ことなのよ。不本意ながらね」

「……そう。そう言つことなら、私にも理解できる」夜鈴は微かに笑うように、「なら、貴女は昴に危害を加えるつもりはなく……そして、私と決闘することで得るものはない事件に私が協力するという事項　と言つ事？」

「そうよ。本当はその事件の犯人は貴女だと言つ事になつてているのだけれど、ね。ばか兄が否定するもんだから、真相を確かめる為にもよ。文句があるなら言つなさいよね」

そこで、初めて夜鈴は明らかに解る笑みをこぼした。

「なら。この決闘で、私が勝つた場合の条件を提示する権利はこち
らにある?..」

「ええ、まあ……ない事はないわよ。一応こちらでも用意はしてあ
るけれど、そつちが何か要望があるならね。何よ、言つてみなさい」

そして、夜鈴は俺に一瞥をくれてから　ただ静かに、宣言し

た。

「私が勝つた時は、私はその事件の容疑を晴らす為に貴女達に協力する」「え?」俺とルナは、声を合わせてそう返す。

「ちょ、ちょっと待つて。それじゃ、わたしが勝つても負けても同じ」

だが、夜鈴の言葉はそれで終わりではなかった。ルナが口を挟もうとして、だがそれを遮るように、夜鈴は言つ。

「ただし。私が勝つた場合のみの条件として。私が勝つた場合、昂を私の好きにさせて貰う」

……、なんだって?

「ああ、そう。なるほどね。そう言つ事」ルナは何かを悟ったかのよつこ、「いいわ、乗るわよその勝負!」

「……」くす、と笑う夜鈴。

「行くわよ、『幻想遣い』……守崎夜鈴!」

ダツ、とルナが駆け出した。それを合図に、夜鈴は着ていた黒コートを脱ぎ捨て。そこから一本の日本刀を取り出す。一昨日に一度だけ見た事がある。その時とまったく同じ刀だった。まるでコートの中から出てきたかのようにスラリと刀が抜け出され、夜鈴はそれを両手で構える。

瞬間、ルナが飛んだ。基本的に公園に明かりはない。あるとしても、周辺の暗い道に数少ない電灯がちらちらと見えるだけだ。ルナが言つていた通りならば、地の利は夜鈴にあると言つて良いだろう。暗闇が夜鈴の魔法の発動に関わるのだとすれば、光の少ないこの場所はルナにとつて不利な場所なのではないか。だが、そんな事は杞憂に過ぎなかつた。ルナは右手を空にかざしていた。その先にあるのは 月。 そう。ルナは月の光を利用し、魔法を発動させるつもりなんだろう。『月光』とはよく言つたものである。今のルナの姿は、まさしくその二つ名に当て嵌まつていた。

「はあああああつ!」

瞬きと共に、ルナの右手にはあの光の剣が握られていた。それを夜鈴目掛け、飛び掛るよつにして振り下ろすルナ。それを両手で持

つ刀で防御する夜鈴。容赦がない。もしガードしていなければ夜鈴がどうなったのかなんて、想像もしたくない。……もちろんガードするに決まっているのだが、ルナは本当に約束を解っているのだろうかと不安になる。がきん、と鋭い金属音がした。夜鈴の持つ日本刀は長い。少なくとも彼女の背丈ぐらいはあるだろう、それほど長い。だと言うのにそんな得物を夜鈴は何でもないかのように振り回す。さながら扱い慣れているとでも言わんばかりに。回数にして二撃 ルナによる攻撃が終えると、それはただの挨拶代わりだと言うように、ルナは一度距離を取つた。

「……お得意の魔法はまだご披露されないのかしら？」

余裕綽々と言わんばかりの声色で、挑発するようすにルナは言つ。今夜鈴は確かに前回となんら変わりない武装で、日本刀を一本握つているだけ。何かおかしな現象が起こつていてもしないし、魔法を使つていてるようには思えない。だが、そんな俺とルナの予想を裏切るように、夜鈴が刀先をルナに向け、

「大丈夫。もう始まつていい」

魔法使い、ルナミス＝サンクトリアは自らの目を疑つた。先程まで確かに自分は公園の噴水近くにいたはず だと言うのに、ふと気が付けばそこはまったく違う場所になつていて。暗く、地面さえ見えない闇の世界。本当に自分がそこに立つてているのかさえ疑問に思えてくる、そんな空間。後ろを振り返つてみると、昂の姿はない。

「何これ、どう言つ事……？」

声が響く。まるで地下空洞のような場所にいるみたいだった。

「ここは、私が作り出した空間。貴女はここにいる限り、この私に勝つことは出来ない」

真後ろから聞き覚えのある声 守崎夜鈴！ ぱつ、と後ろを振り返る。しまつた、いつの間に背後を取られていたのか。

「……え？」

だが、そこに守崎夜鈴の姿はなかつた。おかしい。確かに後ろから聞こえたと思つたのに。

（落ち着きなさいルナ。考えるのよ……）には、守崎夜鈴が作り出した『空間』。どういう仕組みかは知らないけれど、あの公園とはまったく別のところに来ちゃつたみたいね。姿が見えないのは、守崎夜鈴の魔法だから？ 彼女はいくらでも姿を隠してしまえるつてわけ……？）

思考するけれど、やはり理解には至れない。現状、自分がまんまと守崎夜鈴の魔法に掛かつてしまつたのは見ての通り。だが、その魔法がいつたいどんな仕組みなのかが解らない。この空間もまたくもつて意味不明だ。魔法使い同士の戦いは、互いにどれだけ相手の魔法を熟知しているかで勝負が決まると言つても良い。単なる力比べで勝てるならば、そもそも魔法なんて使わなくても勝てる。相手の魔法使いに勝つ、と言う意味は、すなわち相手の魔法を看破し、理解し、把握した上でそれを完膚なきまでに叩き潰す。そうすることで、魔法使いは初めて勝利に至れるのだ。つまり、今 相手の魔法使い、守崎夜鈴は少なくとも自分 ルナミス＝サンクトリアの魔法を理解している。まだ見せていないものも多数あるけれど、戦闘で主に使うのは光を凝縮させ、圧縮して物理的な干渉能力を持つ剣を作り出す『光の剣』^{コードオブライド}ぐらいのものだった。ルナはどちらかと言えば文武両道、戦闘に関する魔法とそれ以外の魔法どちらも隔てなく使いこなす魔法使いであり、それは同時にどちらにも特化していないと言える。こうしていざ実戦となるのは初めてではないが、こうも容易く自らの魔法の性質を理解され、対策を取られるとは思つてもいなかつた。

（円の光さえあればどうとでもなる……なんてのは迂闊だつたから。こうも光がないんじゃ、さすがのわたしでも『光の剣』^{コードオブライド}は作り出せない。考えたわね守崎夜鈴……！）

警戒心をより一層強め、ルナは周囲を見回す。だが、それが果た

して本当に『周囲を見回している』のがどうかすら解らない。辺りはどれもこれも同じで、かるうじで自分の姿だけが見えるのはどこかにかすかな光でもあるのか、それともこの空間の性質なのか。（光があるなら、まだ勝機はあるんだけれど）

しかし、今は考へても何も解らない。迫り来る敵の気配を逃がさないよう、ルナは全身に神経を辿らせる。

（おかしい。守崎夜鈴……どうして一向に姿を現さないの？ もつきは確かに声が聞こえたのに、それからまったく動きが見えない。まさか、ここにずっと閉じ込めておくつもりじゃないでしょうね）

それは勘弁だ、とルナは思う。それでは、自分が根を上げるまでの根競べと言う事になる。それも、圧倒的不利な状況で、だ。何も出来ない、何も解らない、何も見えない。この空間にいるプレッシャーは相当のものだつた。そのうちストレスでどうにかなつてしまふのではないか と言つ不安ばかりが押し寄せ、余計に気分を悪くする。このままでは悪循環だ。そのうち耐え切れなくなつて自滅するのがオチだらう。何とか自力でここを脱出できないものか。（どんな魔法なのかさえ理解できればね……。あー、もう。もうちよつと事前に調べておくんだつたかなあ。守崎夜鈴の扱う魔法についてとか）

そこまで考へて、ルナは「あ」と氣の抜けた声を出した。そう。守崎夜鈴について、ルナは何も調べていなかつたわけではない。軽くではあるものの、事前に知り得ていた情報があつた。それは、（守崎夜鈴は『幻想遣い』……！）

もしこの考へに間違ひがないのだとすれば。ルナは、遠田からは見えない程度の微笑を口元で歪ませて、
「……ふふふ、なるほど。そう言う事ね」

月城昴は、目の前で繰り広げられているおかしな状況をただ黙つて

見つめていた。

「……ふふふ、なるほど。そつ言つ事ね」

ふと、唐突にルナが何かを呟く。遠くから見ているからか、何と言つたのかは解らない。だが、先程までまるで目が見えていないかのように拳動不審な動きをしていたルナが、ようやく何かを悟つたかのような表情を浮かべたのである。恐らく（素人目ではあるが）夜鈴の魔法にルナは掛かったのだろう。それ以降、ルナはまるで視覚を奪われたかのように立ち回っていた。それをただ黙つて見つめている夜鈴の行動にもいささか疑問が浮かびつつ、そんな、はたから見ればおかしそうな光景を目の当たりにしていたのだが　ようやく、ルナが動いた。

「うん、やっぱりね。……一度理解してしまえば、あとは気の持ちよつでどうにかなるものね、貴女の魔法も」

「……どうして解つた？」

夜鈴が義務的な口調で問う。

「魔法名が仇になつたつてだけのお話よ。わたしの魔法名は『月光イットブリンクセス』の聖女』であり、貴女は『幻想遣い』だつた。うん、最初は意味が解らなかつたけれどね。幻想を遣う、なんてのがどう言つ意味を持つのか。でも、実際に体験してみれば話は別よね。ようするにさつきの空間　　いいえ、空間のよう『見えていた』だけで、実際はただの幻覚。わたしはまんまと貴女の魔法に掛かり、幻覚を見せられていただけつてことでしょう？」

なるほど、つまりルナは夜鈴の魔法　　『幻覚を見せ付ける』らしきものによつて、さつきまで幻覚を見ていたわけか。だからあんな拳動不審な行動をしていたのだろう。ようやく合点がついた。それにしても、ルナの『言葉の魔法』といい、魔法つてのは俺の想像しているものとは全然違うものなんだろうか。うつむ、ここつらが特殊なだけなのだと信じたい。

「それにしても……少し不思議に思つたんだけど、どうして幻覚を見せてる間にわたしに攻撃しなかつたの？　それぐらいの猶予は

十分にあつたはずよ。それとも、わたしが貴女の魔法を見破らないとでも踏んでいたのかしら。それなら『ご期待に添えられなくて残念だけど、わたしも甘く見られたものよね』

「……今のはただの余興に過ぎない。貴女に私の魔法を『知つて貰う為』の。それに……言つたはず。わたしは負けないと」

「知つて貰う為？ 待ちなさいよ。魔法使い同士の戦いで、自分の手の内をバラすのはただの自殺行為よ。そんな事に何の意味があるっていうの？ 馬鹿馬鹿しいにもほどがあるわ」

以前、強気なままの夜鈴にルナは苛立ちを感じてきたのだろう。だが、そんなルナの言葉なんて意味がないと言つたように、夜鈴は平然とした顔付きで、

「なら。貴女は完全に私の魔法を防ぎきる事が出来る？」

がくん、とルナが膝を付く。恐らくまた夜鈴の魔法に掛かつたのだろう。だが、すぐに正氣を取り戻したのか、顔を見上げてルナは夜鈴を睨み付けた。

「……舐められたものね」ルナはまるで殺意でも抱いているかのように目つきで、「言つたはずよ。もう貴女の魔法はわたしには通用しない」

じきり。今度は身体が倒れこんだ。また魔法を受けたのか？

「つ、ふざけないで！」ルナは腕に力を入れて四つん這いになりながら、「こんなの、もう数秒とかからずには解けるわ！ 何度もやつて無駄よ。一体何がしたいって言つの！」

「……」夜鈴は答えない。

ルナではないが、これには俺もさすがに疑問を覚える。何度もやってもすぐに解けるのなら、最早その魔法に何の意味があるというんだ。夜鈴の言いたい事が解らない。それは、ルナも同じのようだった。

「もう油断しなければ倒れたりだつてしないわよ。慣れてしまえば

一秒もかからず解いてみせるんだから。それに貴女、魔法の行使時は動けないんじゃないの？ さつきからそこを動いていないのが何よりの証拠だわ。さあ、もうそろそろ遊びは終わりよ！」

ルナは頭上の月に目掛けて右手を伸ばした。あの光の剣を出すのだろう。夜鈴の魔法の対策も理解出来たのだ、これならもうルナだって遅れを取ることはないはずである。だが、

「……まさか」ルナは何かに気付いたように、「まさか、これが狙いだつて言うの？」

ルナの手に、あの光の剣は現れなかつた。

「そう。だから言つたはず。もう私は負けない、と」

どう言う意味だ？ ルナは理解したようだつたが、ただの一般人の俺にしてみれば何の事か解らない。ルナの光の剣が出なかつたことに、何かつながりがあるのだろうか。そんな俺の心境を読んでかそうでないのか、夜鈴は説明口調で語り始める。

「貴女の魔法の発動に必要な条件は三つ。一つ目は周囲に光が存在し、その光に向けて手をかざす必要があること。二つ目は光を認知できる状態であること。三つ目は発動に三秒と少し時間を要する」と

「……」ルナは何も言わない。

「そして、私の魔法の発動に必要な条件は三つ。一つ目は光よりも闇が密集している場所にいること。二つ目は対象である人間が目の前に存在すること。三つ目は 発動にちょうど一秒、時間を要すること」まるで、それが決定的な差であると言つようにも、夜鈴は告げた。「私は貴女に、一時的には言え幻覚を見せ付けることができる。それがたとえ一瞬であつたとしても……それを貴女の魔法発動中に遣えれば、貴女の魔法は完成しない。私の見せる幻覚は『闇』であり、そこに光は存在し得ない。だからこそ、貴女の魔法の発動に必要な『光』を一瞬でも遮断する事で、貴女は光を認知できず魔法を完成させる事が出来ない」

つまり、ルナは夜鈴相手にあの光の剣を出す事が出来ない と

言う事。それは確かに決定的な差だった。得物があるのとないのとでは、確實にある方が有利に決まっている。夜鈴の手には以前としてあの長い日本刀が握られていて、それは憎くも魔法の類とは関係のないただの武器。ルナの光の剣のように使えなくなるなんて事はない。

「もう一度言う。貴女は……ルナミス＝サンクトリアは私には勝てない」

す、と両手で日本刀を構えた夜鈴が勝利宣言をする。確かにこのままではルナに勝ち目はない。素手で日本刀を持った相手と対峙するなんてのは無謀すぎる。リーチの差しかり、まず踏み込むことすら出来ないだろう。だが、そこまで言われて尚 ルナは決して諦めたような素振りを見せるることはなかつた。

「そう、なるほど。なるほどね。そこまで把握されてたなんてこれはわたしが迂闊過ぎたわ。素直に認めてあげる、凄いわよ貴女。完全に貴女の魔法をシャットダウンする方法なんてないし、どうあがいても一時的には幻覚を見せ付けられてしまうみたいだし。でもね、迂闊なのはそっちもよ守崎夜鈴。まさか、このわたしがそう言ったものの対策を用意していないとでも思つて？」ルナは不敵に微笑んで、「光が常に無いといけないのなら わたしが光になればいいだけの事よ！」

ぶわっ、とルナの髪が靡く。その瞬間、ルナの全身を光が覆うかのように包み込んでいた。

「……！」夜鈴が滅多に変化させない表情を、変えた。

「驚かなくてもいいじゃない。だって、わたしの魔法名は『月光のプリンセス聖女』よ？ わたしがどうしてそう呼ばれるようになったのか、解る？」ルナは光り輝く身体でゆっくりと歩きながら、「確かにわたしの魔法の属性は光。だからこそ、わたしを倒そうとする人はまず真っ先にこう考えるわけよ。『光さえ遮つてしまえば魔法を使えないだろう』ってね。確かにその通り。遮る方法なんていくらでもあるわけだし、最初はわたしも苦難したわ。でも、ある日この魔法に

思い至つたわたしは、月の照らす夜とある事件をこの姿で解決したことで『月光の聖女^{ムーンライトプリンセス}』と呼ばれるようになった。それがきっかけ。そう、わたしは少しでも光があればこの身に纏わせることで常に光を得る術『光の衣^{ドレスオブライト}』を会得した。それに、いくら貴女の幻覚でもわたしの姿をえることはできないっていうのは、すでに一回目の幻覚を見せ付けられた時に理解していたし、わたしが光にさえなれば、たとえ幻覚を見せ付けられようとも関係ない。わたしはいつも、どんな状況だつて光の魔法を使してみせるわ」

それは神々しくも綺麗に輝いて、まるで天使のような光景だった。魔法使いは月に照らされて、静かに一人の少女の目の前へと歩み寄る。

「さて。それじゃあほんとに最後の最後。……決着を付けるわよ、守崎夜鈴」

しばしの沈黙。互いに睨み合い、見詰め合う二人の魔法使い。そうして、どちらからともなく脚を踏み出した。ルナは自らの手を胸元に当てて、そこから光の剣を現出させる。夜鈴もそれに応えるように両手で握る刀を構え、

「……やっぱり、貴女は侮れない……敵、だった」

「それはこっちの台詞、よ！」

二人の魔法使いは、最後の剣戟を開始した。

結果だけ言つてしまおう、勝負は引き分けだつた。互いに目の前すれすれに刃を向け合い、そうして、同時に二人はその手を下ろした。満足がいったのか、ルナは以前の剣幕など忘れたように微笑んでいた。

「なかなかやるじゃない、守崎夜鈴。このわたしと相打ちまで持つていったのは貴女が初めてよ」

「……まさかここまでとは思っていなかつた。油断していたのは、

私のほう

二人して互いを尊重しあうその姿はもはや到底敵同士には見えなかつた。これで一件落着、もうこの一人が殺し合うなんて事はないだろう。なんて楽観視さえしてしまつ。だが、ここで一つ問題が生まれる事を忘れてはならない。

「なあ、一人とも」俺は少し言い出し難い雰囲気の中、噴水の前で立ち竦む一人の魔法使いの下へ歩み寄つて、「この勝負、引き分けになるんだろうけど……勝つた時と負けた時の条件は互いに提示してたが、引き分けた場合どうするかつてのは決めてないよな」

「…………」一人が黙してこちらを見つめた。

「夜鈴は勝つても負けても協力してくれるんだろ？　じゃあそれだけで良くなきか。なんだか夜鈴が変な条件提示してたけどさ、引き分けたんだし別に」

「それはつまらないわね」言い出したのはルナだつた。「わたしとしては夜鈴が何をどうしたかったのか気になるところだし……うん、今回はじやあわたしの負けつてことで」

「はあ！？」

「まあ、正直に言つちゃうとあの魔法のせいで大分魔力なくなつたのよね。さつき、あと数分でも持ち越されてたら魔力切れでわたし負けてたし」

「いやいや、だからつてそんな

プライドを賭けた勝負なんとかどうとか言つてなかつたつけ、こいつ。だが、今となつてはそんなことはもはやどうでもいいようで、ルナはすっかりその気になつていた。

「ほら、言つてみなさいよ守崎夜鈴。貴女が勝つた場合の条件……このばか兄を好きにするつて言つてたわよね？　わたしが許すから何でもしちゃつていいわよ？」

「おい、俺はいつからお前の……」

「あーもう、うるさいわねえ。賞品は賞品らしく、大人しく振舞つてなさい！」

「つて俺モノ扱い！？」

ふと夜鈴を見ると、何故か目を伏せていた。まるでこれから何かやり難いことでもするかのような表情。まさか、とは思つが。俺を好きにするつて、じつ言つ事ですか夜鈴さん。

「……なら、お言葉に甘えて」

夜鈴はつづ伏せていた顔を上げて、そつと俺の頬に両手で触れながら、

「さようなら」

何か、柔らかい感触が唇の辺りに触れた気がした。

「起きてよ、ねえ。ねえってば」

うつすらと意識が覚醒する。誰かが俺を呼ぶ声が聞こえて、俺はベッドの上にぐるぐると寝転がっている自分の身体をだるいながらも無理矢理起こした。はて、今思えば俺を朝っぱらから起こせるような人間がウチに存在していただろうか。俺は現在独り身であり、両親は交通事故で今はあの世。こうして残つた唯一の財産とも言えるマンションの一室を使って独り暮らしなんかをしている俺にとって、朝から誰かに起こして貰うなんてシチュエーションは期待値すら存在していないレベルのお話なのが。

「やつと起きた！ もう、寝起きが悪いのは相変わらずじゃない」

なんて事を考えながら、俺は目をこすつて目の前の現実を直視する。

「おいおこどりしてお前が俺の部屋にいるんだ？」

そこには、朝靄紅憐が突つ立つっていた。

「理由なんて後でいいでしょ。それより、瑠奈はどうして言ったの？」

「……るな？ お前、何いつてんの？」

「はあ？ もしかしてまだ寝惚けてるわけ？ 瑠奈つて言つたら瑠奈でしょ？ あなたの妹の」

何を言つてるんだこいつ 僕に妹だつて？ そんなのいるわけないだろ。それにんな……つて、どうやって書くんだ。漢字は？そもそも本名か、それ。

「まあ落ち着けよ紅憐。俺はそんなやつ知らないぞ。寝惚けてるのはお前なんじやねえのか」

「…………あんたまで？」紅憐はわけが解らないと言つた風に、「どうしてなのよ。どうしてみんな瑠奈のこと覚えてないわけ？ あたしが夢を見ていたなんてことは絶対ないし、確かに昨日までいたはずなのに。ねえ、昂。あんた本当はふざけてるんでしょ？ ほら、早く瑠奈がどこにいるのか教えなさこよ」

意味が解らん。つつ一かまづどうしてここにいるのかを説明しろ

と言いたい。ドアでも蹴破つたか？ こいつならやりかねないが。

「なあ、紅憐。とりあえず頭を冷やせよ。俺はふざけてなんかないし、寝惚けてもいない。何度も言つけどそんなやつ俺は知らないんだよ。それに、みんな知らないって言つてんだろ？ それならやりぱお前が間違つて」

「…………ああそう、ならもう良いわよ。どうしてだかは知らないけど、みんなが覚えてないって言つなら覚えてるあたしが見つけ出してあんたの前に突き出してやるわ。そしたら嫌でも思い出すでしょ。うん、そうよ。そうじゃないと……」

ぶつぶつ言いながら、紅憐は俺にそれ以上何も言わず部屋から出て行つた。何だつたんだ一体、ていうか結局どうやって中に入つたのか聞けず仕舞いじゃないか。時計を見る。時刻は朝の六時過ぎとかなり早かった。これならあと一時間程度一度寝しても問題なく登校できそうだ と、そう思つた瞬間、壁にかけてあるカレンダーに目がいった。

「土曜日……つて、今日休みじゃねえか」

くそ、まさか休みの日にこんな朝っぱらから起しちゃれるとは予想

外にもほどがある。紅懲め、今度会つたらそれなりの代償を支払つて貰うぞちくしょう。しかし、今日が休みだとは何故だか頭の中で思つていなかつた。むう、最近平日でも夜更かしが過ぎるからか、感覚が狂つているんだろうか。

……、ん？ 夜更かし？

「そういうや、昨日は俺何してたんだっけ……」

昨日の俺 と言えば、まずは当たり前のように学校に行つた。む、登校中の記憶が無い……まあ寝惚けていたのだろうけど。で、授業はと云つといつも通り暇過ぎた。そして放課後

「……あ。そうだ。思い出した」

そう、放課後と言えば。沢宮花凜。彼女に何の間違いか突然告白されたんだっけ。あの時は相当びっくりした。すぐいなくなつてしまつたから何も言えずに終わつてしまつたんだっただか。うむ、とりあえず返事は考えておかなくてはなるまい。いやまあ、格別断る理由なんて見当たらぬけどさ。願つたり叶つたりである。彼女可愛いし、性格いいし……ちょっと天然だけど。なんだか思い出したら胸が熱くなつてきた。俺も捨てたもんじゃないな。

「沢宮さんが帰る時間つて、いつもめちゃくちゃ遅かつたよな。そういえば、それまで何かしてたような気がするけど……あれ？ 俺、何してたんだっけ」

なんだろう、この違和感は。何ががすっぽり抜けてしまつたような感覚。まるでジグソーパズルのピースが何個か足りてないような、そんな気分になる。……おかしいな、俺つてここまで記憶力薄かつたつけ。とりあえずその先を回想してみよう。そのまま沢宮さんを見つけられなかつた俺は、いつものように一人とぼとぼと帰宅しながら、

「ああ、そういえば道ばたで紅懲と会つたっけ……。最近、遭遇率高いよなあいつも」

向こうから何かを話し掛けってきたんだっただか。俺を待つていたみたいにそこにはいつけはいた。そして何かを話したんだ。

『……昴、アンタ思い出した?』

紅憐にいきなりそう言われて、

『どう言つことだよ? 僕が何を思い出すつて?』

俺が答えて、

『瑠奈のこと。今までひつかかつてたんだナビ、よつやく思ひ出しじ出でたわ』

また『るな』だ。そう、この時もあいつまじの名前を呼んでいた。
『あの子、昔一緒に遊んだたあの女の子よね? 確か守崎つて子。あんたによくお兄ちゃんお兄ちゃんとか言つて懷いてた』

もりやか それが『るな』の正体か。

『……は? お前、何の話をしてるんだよ?』

そう、俺は昔の事はあんまり覚えてなくて、そう言い返したんだ。
だが 見えてきた。つまり『るな』ってのは、

『だから昔……うん、ちよつて八年前だよ。あたし達が一緒によう遊んでたのが瑠奈でしょ?』

そう言つことか。俺が覚えていないのも無理はない。八年前に出会った少女の事なんて、ずっと近くにいなければそのうち忘れてしまうだろ? ……そつか、紅憐はこの子の事を言つていたのか。理の妹だと何とか、まだ意味の解らない部分は色々あるけど。それに、今更俺にその子がどこにいるのかなんて聞かれても解るわけがないのに、あいついきなりどうしたつて言つんだ?

「まあ、どうでもいいか……」

まだ目蓋が重い。一度寝するには丁度良い時間もあるし、このままもう一度、夢の世界に旅立つてみるのも一興だな なんて考えながら、俺はベッドに再度寝転がる。ああ、やつぱつこのが一番だ。自分のベッドで寝転がっているときが一番落ち着く。

「……さて、寝よ寝よ。変な邪魔が入つたけど、正直まだまだ寝たりないんだよな、休日にしちゃあ、さ」

独り冗談を呴きながら、目蓋を閉じる。心のどこかで何かが引っ掛かる気持ちを抑えながら、俺はまた眠りについた。

第一章／失うモノ、取り戻すモノ 上

宵闇に紛れるかのように、一つの路地裏にそれはあった。見るからにもう生きてはいまい、死体だった。それも、見るも無惨に身体をバラバラにされている。

「う……、なにこれ。なんでこんなところに……？」

それを一人の少女が目撃した 少女の名前は朝離紅憐^{あさひなくれん}。紅色に染まつたショートカット。色白ではないが、その少し焼けた肌が彼女の活発さをイメージさせる。服装は私服 白いミニスカートに、肘より上まで伸びたオーバーニーソックス。上着もTシャツ一枚だけで、いかにも動きやすそうな格好だった。

時刻はまだ深夜にも至らない、夜の十時半過ぎ。近くのコンビニ付近にある路地裏に、女性の死体が散らばっていた。恐らくの第一発見者である紅憐は、そんな光景に嘔吐^{おと}しきけ、だがなんとか堪える これは、なんだと言うのだろう。紅憐は後ずさりしながらも、この現場から立ち去ることができなかつた。怖いのは当たり前だ。彼女は基本的に気の強いほうではあるものの、こういった事態に遭遇することなんて初めてだ。足がすくんで動かない。ガクガクと震える自分の身体を両手で抱えて、悲鳴をあげないようにするのに精一杯だつた。そんな中、本意ではないが 紅憐はもう一度だけ死体を見る。その死体は、よく観れば見たことのある姿形をしていた。女性だとわかつたのはその身体つきからだが、それがもとはどんな格好をしていたのか解らない。……解らないけれど、想像は付く。

その顔 今はあまりにも酷くて直視すらできないが、外見的に自分とほど歳は変わらないと思つ。これぐらいなら、もしかすると自分と同じ学校に通つている子かも そこまで考えて、ようやく紅憐は理解した。首だけ転がっているその頭部を、勇氣を振り絞つて見る。髪型は恐らく茶髪のショート いや、自分よりは少し長いめくらいだらうか。そして、何よりそこに落ちているものに紅憐

は注目した 携帯電話である。

「これ、壊れて……ない？」

携帯を拾い上げると、紅憐は血塗れていながらもまだ機能している携帯の画面を見る。携帯に登録されているアドレス帳を確認すれば、これが誰なのか推測できるはずだ。ボタンを押して、紅憐は画面を覗き込む。

「…………う、そ。これって、昂の？」

そこには、紅憐の幼馴染である一人の少年、月城昂 つきしろすばる 彼のアドレスが載っていた。だが、何故だろうとは思わない。これでようやく確信できたからだ。

「それじゃあ、やつぱり……これって……」

もう一度、最後にと死体に視線を向ける 茶色の髪、同じ年くらいの少女、携帯には月城昂のアドレス ここまで揃っていてまだ理解できないのなら、それはただの馬鹿だとしか言いようがない

紅憐は、今度こそ動かなかつた足を引きずつて、その場所から逃げ出すように踵を返した。

日曜日になつた。俺こと月城昂は、今日も今日とて平凡な日常を怠慢に過ごすつもりだつた。昨日である土曜でさえこれといつて何もせずに自宅でぐーたらとのんびり過ごしていたが、今日もなんだかあまり動きたいと思えない。そこまで引きこもり体质じゃないんだけどなあ、と思いながらも、やはり面倒臭いので家にいることにした。昨日は朝っぱらから幼馴染である紅憐がやってきたりと一応他人と触れ合つことはあつたものの、今日こそは誰とも関わらずに一人静かに暮らしてやるぞ、となんだか無駄に意氣込みながら、俺はリビングにある「タツ（布団を抜いて今はただのテーブルと化しているが）に身体を預けながらテレビのリモコンを持つてチャンネルを変えていた。特に面白い番組やってねーなー、と一人愚痴りな

がら、俺は時計を見る。もうすぐ昼だった。そろそろ腹^{はら}がしらえが必要かも知れない。

「よく考えたら、誰とも接しないでどうやってメシ食うんだか」

俺は基本的にコンビニを愛用している。少々高くついてしまうのはもはや気のことなくなつた。コンビニのあの色々揃う充実感がたまらないのだ。いつも弁当を買いにいくついでにジュースやらお菓子を買つてしまつのは、無駄だとは思いつつもやめられない。俺の一種の娯楽に近かつた。

「よし、趣向变更。とりあえずコンビニには行く」

そう呟いて自分に納得させながら、俺は立ち上がる。服装は特に気にしないが、さすがに寝巻きのまま外に出るわけにもいかないので、適当にその辺に散らばつていい服を着ることにした。なんといふか、この辺も随分雑である。鼻歌交じりに玄関から外へ出ると、空は快晴でなかなかに気持ちのいい昼間だった。七階から外を見下ろすのも、高すぎず低すぎずな感じで丁度いい。

「ふはは、見ろよ。まるで人がゴリのようだ」

冗談を独り言で呟いてみるが、もちろん突っ込んでくれるような相手に期待するわけではない。というか独り言は一種の癖でもある。「……なに昼間っからばか言つてんの、あんた」

「つおわつ！ なんだお前、いたのか」

唐突に隣から突つ込みが入つたので、まさかの事態に昂はびくりして飛び退いた。我ながらリアクション酷いな。案の定、呆れたような表情でこちらを睨む少女は、無言だった。というか、

「なんでお前がここにいるんだよ、紅憐」

何故だか解らないが、幼馴染の朝雞紅憐がそこにいた。

「いてもいいでしょ、別に。……それよりあんた、ちょっと大事な話があるんだけど。今、ヒマ？」

「大事な話……？ 俺、紅憐フラグを立てた覚えはねーんだけど」

「もちろんあたしも立てられた覚えはないけど。ていうか、ちょっと真面目な話だから。冗談とかはノーサンキューで宜しく

真面目な話　だつて？　昨日の続きをなら遠慮したいものだが。
覚えてないものは覚えてないんだからな。しかし、ここまで真剣な
顔で言わると断るに断れない。仕方ない、コンビニ行きは後回し
にして、先にコイツの話を聞いてやるとして。

「解ったよ、とりあえず中入れ」

「うん。悪いね」

「いいよ、別に。俺とお前の仲だら。つーか、どうせ俺が入れなく
ても勝手に入つてくんだろ。昨日みたいに」

「あは、ばれてた？」

「そりゃな。俺を甘く見るな」

そんなやり取りをしながら、俺は紅憐をリビングに迎え入れた。
茶でも出してやろうと思ったが、気が付けば冷蔵庫の中身が空っぽ
だというのを忘れていた。最近買い溜めしてなかつたつけ。

「……、それで？」俺は早くコンビ二に行きたい精神で、急かすよ
うに、「大事な話つてのはなんだ。出来るだけ簡潔に解りやすく話
してくれ」

「うん。……あのせ、昨日なんだけど。あたし、夜中に散歩がてら
外出歩いてたんだよね」

「まあ、それぐらいなら俺でもやるけど。なんだ、誰かに襲われた
りでもしたのか？」

「違うつて。あたしじゃなくて、その」紅憐は何か言い難そうに、スカートのポケットから一つの携帯電話らしきものを取り出した。

「これ。見覚え、ない？」

「……ん？　ああ、これウチのクラスの知り合いが使つてるやつと
一緒だな。それがどうした？」

「これがさ、落ちてたんだよね。……その、路地裏に」

「路地裏あ？　なんでそんなところに　つて、おい。待てよ、そ
れ……血まみれじゃねえか！」

そこで、俺は初めて事の重大さに気が付いた。知り合いが使つて
いたのと同じ携帯が、血まみれになつてている。紅憐はそれを路地裏

で拾つた。どうして路地裏なんかに？　いつの間にか、紅憐の手が震えていた。

「それで、さ……見ちゃったんだよね。あたし、その……そこ」

「何を、見たってんだよ……？」

嫌な予感がある。これ以上聞きたくない　そんな悪寒さえしてくる。

「歩いてる途中で、悲鳴みたいのが聞こえたんだよ。女の子の悲鳴だった。だから何だろうと思って、気になつたからその声がした場所まで走つてみたんだけど……」

「そこが、その携帯を拾つた路地裏だったわけか」

「そ……でさ。落ちてたのは携帯だけじゃなかつた。そこにね」

紅憐は歯をくいしめるようにして、俯きながら、

「さわみやかりん沢富花凜の死体があつた」

ただ、そう口にした。

「……な、なんだよ。それ。まさか、あの沢富さんが？　証拠は……」

「もう解つてるでしょ、昂。それが証拠だよ。沢富さんが持つていだ携帯。中、見たんだよあたし。ちゃんとあなたのアドレスが入つてた。他也確認して、沢富さんのだつてことはもう解つてる」

「嘘……だろ？　沢富さんが、死んだつてのか。なんで」

「解らない……！」紅憐はもはや泣きかけていた。「解らないけど、でもこれは事実なんだよ。死体はあたしと同い年くらいの女の子だつたし、髪だつて茶色だつた。長さだつて沢富さんと多分おんなじ。全部が全部、その死体が沢富さん本人だつてことを物語つてたんだよー！」

なんてことだ。よりもよつて、身近な人が　沢富さんが、殺されるだなんて。

「それ、どんな死に方だつたんだ。まさか、例の……」

「うん。間違いない……あれば最近よく噂されてる連續殺人事件の

死体の特徴だつた

「……警察は？ もちろん、警察はもう動いてるよな。それならもしかすると沢富さんじやないって結果が出ているかも知れない」

「うん、そうだね。そう思つて、あたしも今朝もう一度見に行つたんだよ。見に行つたんだけど」紅憐は心底悔しそうに、「そこには何もなかつた。昨日見たもの全部が全部消えてたんだよ。場所は確かだし、何よりそこで拾つたこの携帯が、事件があつたことが本当だつて証明してる。目撃者は誰一人としていない。……あたし以外は」

「おいおい、じゃあ……死体がどこへいったのかは置いといて、確かめる以前に『なかつた事』にされてるってことか？」

「解らないよ。誰がどう言う意図で死体を消したのかはわからない。でも少なくとも警察は何も知らないはずだよ。事件として何も騒ぎになつてないし……。だとするなら、やっぱり犯人なんじやないかとあたしは思う」

「そうだとしても……色々とおかしくないか。今まででは死体を全部放置していたのに、今回に限つて死体を消すだなんて。しかも、お前が見たつていうんなら少なくとも犯人は一回その場からいなくなつてる。一度離れてまた戻つてくるなんて、効率が悪い。消したのは犯人じやないかも知れない」

大体、どうして消したのかは解らないが そんな事をする理由が思いつかない。

「……てことは、だ。もし犯人が死体を消したんだとするなら、犯人はこの犯行を知られたくないかつたつてことになるよな。そして、偶然にも目撃したのは紅憐一人だけ……つて、おい待てよ。それじゃあ……！」

「そうだよ」紅憐は震える声で呟く。「沢富さんの次に狙われるのは、この携帯を持つてゐるあたししかいない」

平穏に過ぎずはずだつた休日最終日、なんとも厄介なことになってしまった。幼馴染の命が危ないかも知れない。それは、さすがに見過すわけにはいかない。俺だって紅憐は大事だ。てなわけで、紅憐をどうしたものかと考えていたのだが、

「一通り落ち着くまで、あたしここに置いて貰つから」

「……はい？ なんだつて？」

「だ・か・ら！ さすがにあたし一人じゃ心細いってんの。一いつ言うときに頼りにならなくてどうするわけ、昂」

「あ、いや、もちろん俺にできることなら何でもしてやるが。それにしても、まさかお前……ここに泊まるとか言い出すんじや」

「そうだけど？」

「ぬああ！ と思わず身体を反らせて頭を搔きむしる。なんだそれ、まさか女の子を連れ込んで泊まらせるだなんてこと、人生で初めてかもしないのに。その相手が幼馴染で腐れ縁な紅憐だなんて……俺の初体験……」

「……あんた、なに考えてんのか知らないけど。別にそう言つんじやないんだから、解つてるよね？ ただ、あたしだつてあんたと同じで一人暮らしだし、命の危険があるかもしれないってこの状況、誰かと一緒にいないと心細いの。一応あたしだつて女なわけだし」

「一応つて自分で言うなよ。まあ、確かに一応だけど。一応」

「連呼すんな」

そう 紅憐も俺と同じで一人暮らしなのだった。若い女の子が一人暮らしもどうかと思うが、紅憐の両親は仕事で忙しく、ほとんど海外で暮らしているような状態らしい まあ金には困らないようなので、そこは俺と違う部分なんだが。

「でもさあ。お前、学校はどうすんだよ。明日からはまた平日だし、さすがに行かないわけにもいかないだろ」

「それはそうだね。じゃあ、あんたちょっと一緒にあたしの家まできてよ」

「……へ？」

「一応、用心としてあたしの家よりはあなたの家にいたほうが安全だとは思うから、今からあたしの家まで色々取りに行くって言ってる。学校だつてさすがに行かないわけにはいかないし」

「……なあ、紅憐」

「あによ」

「お前、もしかして……怖いのか？」

「……」紅憐は、無言で俺の顔を睨みつける。頬が少し紅潮しているようだった。「あのさあ。あんたがあたしをどう言う風に見えてるのか知らないけど、さすがに怖くないってほうが神経じりにかなつてんじやないかって疑うよ」

「いや、紅憐ってなんか怖いもの知らずみたいなイメージがあつたからな。なんかちょっと意外つつーか。可愛いとこあるじゃん」「なつ……いきなりなに言い出してんの！」

「ん。いや、幼馴染の意外な一面に驚いてんだよ」

「……普段そんな風に見られてたなんて、あたしちょっとショックだよ」

「なんでショックなんだ？ 別に、見たままだろ」

「今までショック倍増」

「意味わからん」

なんてやり取りを繰り返していくと、紅憐が不意に立ち上がる。

「もういいや。とりあえず行こうよ。行くなら早めのほうがいいし」

「ああ、そうだな。そうだ、仲良くおでて繋いでやろうつか？」

「それ本気？」

「いや、冗談だ」

「……昴、きらい」

「知ってる」

「……。ほら、行くよつー」

怒ったのだろうか、紅憐が踵を返して一人先に玄関まで歩いて行く。おいおい、一人で行くのが怖いから俺と一緒にくんじゃなか

つたのか。……やれやれ。しばらく忙しくなりそうだ。

そんなこんなで間を飛ばして紅憐邸。俺のマンションとは違い、紅憐の家はなんと一軒家です。これを一人で使わてるなんて、なんと贅沢なんでしょうこの女。まあでも、こんな広い家に一人で暮らすのは結構寂しそうではあるけど。本人いわく、もう慣れたらしいが。俺は玄関の前で待機。紅憐はそそくさと家中へ入つていつて、自分の荷物をまとめている最中である。うーん、ヒマだ。そんな感じで呆けていると、ふとどこからか視線を感じた。辺りを見回してみる　が、どこにもそんな人影は見えない。

「……氣のせい、か？」

「氣のせいじゃないわ、後ろよ後ろ」

うわあ！　と俺は本日一回目のびっくりリアクションを取る。なんだ、今日はこうして誰かに驚かされる日なのだろうか。言われるがままに後ろを振り返つてみると、そこには金髪の少女が突っ立っていた。……誰だ？「イツ。

「何よその化け物でも見るかのような反応と表情は。失礼ね」

「いや……てか、あの。お前、誰？」

「む、お前って呼ばな　あ、いやそつか。そういうえばそうね」少女は一人で納得したように、「まあ、いいわ。とりあえず今日は忠告にきたのよ『お兄さん』？」例の連續殺人事件の犯人は貴方の身近にいるわ。多分へらへらして貴方と会うでしょう。いいえ、もうすでに会つてるかもね。でも、気を許してはだめ。いい？　今回、もしかすると一番危ないのは貴方かも知れないんだから

何を言つてるんだ？「イツは、連續殺人事件　つて、まさか紅憐が巻き込まれてしまつた事件のことか？」

「どう言つ意味だよ、それ。なんで……お前がそんな事を？」

「まあ、ただの気まぐれよ気まぐれ。守崎さんにはもう関わるなつ

て言われてるけど、さすがに見捨てられなかつただけよ。ま、何も覚えてない貴方には言つても無駄だうけど、ね

意味わからん　いや、それより気になる事がある。

「お前いま守崎つて言つたか？　そいつのこと何か知つてるのか」「え？　貴方、守崎さんのことは覚えて　　るわけはないか。うん、まあ今は知る必要のないことよ」

「おー、ちょっと待てよ！　俺の知り合いがそいつの事を探してる。『るな』ってやつなんだ。俺も知つてるらしきけど思い出せないから、もしお前が知つてるんなら何か　　」

俺がそこまで言つと、少女は少し寂しそうな顔をした。それがそう言つ風に見えたのは、ただの偶然かも知れないけど。

「……も、ひ、会つことはないでしようね。貴方と『るな』も、『守崎』も。貴方はこれ以上、こちら側に踏み込んでくるべきじゃないのよ。大人しく、いつも通りの生活をしていればそれでいいわ。危ない目に遭いたくなれば　　ね」

それだけ言って、金髪の少女は去つていった。どうしてかは解らないが、俺はその後を追う気になれず、ただ呆然と立つていてしか出来なかつた。

「お待たせー、昴。ん、あれ？　どうしたの？」

時間差で、紅憐が自宅から荷物を引っさげて戻ってきた。さつきの少女は、いつの間にかもう視界には存在していなかつた。まるで、魔法でも使つたかのようにいなくなつてしまつた。

「……いや、何でもねえよ。それより帰りコンビニ寄つていいか？　俺、そういうやコンビニいくつもりだったのすっかり忘れてた」

「へ？　別にいいけど。……んん？」

紅憐がおかしいと言わんばかりの表情で俺の顔を覗き込んでくるが、構わず俺は近くにあるコンビニ田指して歩き出す。

「あ、ちょっと待つてよ…」

さつきの金髪の少女　　あいつが言つていた言葉が何故だか胸の底に引っ掛かっていた。普段なら意味わかんねえ、で済むところな

のだろうけど　今の俺には、何故だか彼女との邂逅が何かの兆しのように思えて仕方がなかつた。

俺と紅憐はコンビニで適当に買い物を済ませると、そのまま俺の自宅であるマンションまで足を運んだ。とある高級マンションの七階、そこに俺の血毛となる部屋がある。エレベーターで七階まで上がり、部屋に帰ってきた俺は、とりあえず紅憐に部屋を明け渡すことにした。そこは、以前まで両親が使っていた部屋。両親が交通事故で死んで以来、ずっと空き部屋として残しておいた部屋だ。何か使つ気になれなくて、ずっとそのまま放置していた。このままずつと使わずにいられればそれで良かつたが、今は事が事だけに仕方がない。一度決めたことはあまり変えたくはないけれど、今回ばかりは折れるしかないだろう。だが、そんな俺の事情を紅憐は知つていたのか、

「あたし、そこ使わないか?」

ただそれだけ言って、俺の部屋に居座りだしたのである。

「ちょ、ちょっと待て。空き部屋があるんだから、お前はそつち使えばいいだろ? なんでいちいち俺の部屋なんか」

「一応、あたしも命狙われてんだよ? そりや本当に狙われてるかはわかんないけどさ。できるだけ、ほら、一緒にいたほうが安全じやん。それに、朝はいつも寝ぼすけなあんたが最近ようやく瑠奈のおかげで早起きして学校に来るようになつたのに、また明日から自力で起きないといけないんだから。それなら……あたしが一緒にいればすぐに起きれるでしょ?」

何故か照れるように言つ紅憐。まあ、さすがに幼馴染と言えど男と女が同じ部屋で過ごすのは紅憐でも気負いするのだろう。うーん、そう言つところは女の子っぽいんだな、こいつ。

「んじゃ、しゃーないから俺は隣のリビングでいい。お前はこの部

屋使えよ。さすがに一緒に部屋はダメだろ」

「……」紅憐が驚いたような顔でこちらを見る。

「な、なんだよ。何か俺がヘンなこと言つたか？」

「昂があたしにこんなに優くするなんて、意外だなと思つて」

「俺はいつだつて優しいんだよ。お前は特別なだけで」

「……ふうん。それじゃ、あたしと比べてあんた沢富さんにはどうひつだつたの？」

沢富さん。そうだ、俺は彼女に告白されていた。金曜日の放課後突然に。だと言つのに、返事も出来ずに死んでしまつたなんて。くわ、まだ本当の事かは解らないとは言え、胸が苦しくなる。

「あ……、『ごめん』さすがに今のは……失言だつた」

「別にいいさ。それにまだ死んだつて決まつたわけじやないんだ。悲しむのは早い」

紅憐ではなく、自分自身に言い聞かせるように俺はそう言つた。

「……そうだね。まだ早いよね。あたしが狙われるかもしれないって言つのも……なんか、『ごめん』」

「何がだよ。今度は何の『ごめん』だ？」

「あたしがこいつやってあんたに頼つてること。今思つと早計過ぎたかなつてちょっと反省してる。まだ自分が狙われるかなんて、考えすぎだつたのかも知れないし……」

ベッドの上に腰掛けながら、紅憐は俯いて呟いた。なんだ、こいつまだそんなこと気にしてたのか。

「お~お~い、今更何言つてるんだよ……。あのなあ。お前、何で俺がこいつやって助けてやつたのかわかつてんのか？」

「……え？」

「お前が怖いつて言つから助けてんだよ。狙われてるかどうかなんてのは些細な問題だろ。お前がそうかも知れないと思つて、恐怖して、俺を頼つてきたなら、俺は、お前を助けてやる。それが普通だろ。言つなら、俺とお前の仲だしさ」

俺がそれだけ言つと、紅憐は今度は呆然と俺を見詰めていた。何

が、今日の紅憐は表情の入れ替わりが激しい気がする。

「やつか。……うん、あたしが心配性過ぎたね。確かに、鼎はやつ
言ひやつなんだった」

「やつ言ひやつってなんだよ。解つたんならもう飯にする
な。お前も俺も独り暮らしだし、別にすべ出で行けなんていわねー
から」

「うん、ありがと」

「おつ。…………いつもやつて素直に礼が言えるようになれば、ち
ょつとは可愛くなると想つんだけどなあ」

「コン、と右ストレーダが飛んできた。

「一言多いんだよ、鼎は」

……、俺にかまはずこいつが言ひたつけ？

時刻は昼を過ぎ、現在三時を越えていた。いわゆるおやつタイム
と言ひやつで、紅憐はなんか知らんがコンビニで買つたらしき菓子
をどばどばとテーブルの上に広げ出した。つておこりゅつと待て、
いくらなんでもこの数は異常だろ。

「やつ」「一千は越えていると見た」

もちろん金額が、だが そんな俺の咳きこ、紅憐は顔を尖らせ
ながら、

「そんな高くないよ、失礼だね。十五百円ぐらうだもん」

「……それでも買ひすぎなのは変わらんや」

「あたしはいっつもこれぐらい買つんだけど。なに、鼎つてお菓子
嫌いじゃないでしょ？」

「いや、好きな部類に入るが。……俺が言ひたいのはだな、ここま
で買つてどうするんだと言つことだ」

「食べるに決まつてんじやん。当たり前だよ」

「こや……」

もう何も言つまい。ようするに、この幼馴染の少女はお菓子が大好物であらせられるのだった。ポテトチップスの袋を拡げて、テーブルの真ん中に置く。次にクッキーの箱を開けて並べ、一緒に買つていたミルクティーのパックをあけてコップに注ぐ。二人分。

「ほら、あんたも食べていいよ」

「ぬ、気前がいいな。それじゃ遠慮なく」

バリバリボリボリと菓子をむさぼる一人の男女。ううん、こんなのは幼少時代だけだと思っていたけど、こうして久しぶりに紅憐とこんな時間を過ごすのも悪くはないかもしれん。

「あ、それはだめだからね。あたしの取つておきなんだから」「

ふとショートケーキに目がいったのだが、瞬時に紅憐はそれを自分のもとに引き寄せた。そんな守るよつにしなくても取らないって。「それにしても、紅憐つていつもこんな買い物してるのか？　俺も『コンビニ』は好きだけど、ここまでいかないぞ。さすがに」「うーん、時によりけりかな。たまにこうしてお菓子食べたくなるときがあるんだよ。一種の衝動つてやつ。あんたもない？」

「いやまあ、解らなくはないんだけどな……」

かく言つ俺も、『コンビニ』で無駄食いするのは大好きだった。だから何というか、こついう異常な光景を目にしても　突っ込みたくても突つ込めない微妙な立場なわけで。しかし、さつきまでの危惧はどこへやら、紅憐はすっかりいつも調子に戻つていた。まあ、それでこそその朝雛紅憐ではあるんだけどさ。

「そういや、お前の家の前で待つてるときに女の子に会つたんだが」「ふと、俺は思い出したように呟く。

「は？　女の子？　……誰よ」

「ああ、長い金髪のやつでさ。そいつ、『守崎』って名前を知つてみたいたった」

「……あんた。それ、眞面目に言つてるわけ？」

「ああ、そりやな。嘘ついてどうする」

沈黙。紅憐が、まるで呆れたかのような表情で俺を見る。

「その下、たぶん、瑠奈だよ」

「え……？ どういうことだよ？」

「金髪のロングだったんでしょ？ それなら瑠奈だよ。あんたは覚えてないんだろうけど、あたしは覚えてるから間違いない。でも、まさか本人を田にしてあんたが思い出さないなんて……どうしたのよ、昴。頭でも打った？」

いや、別にそんな記憶はないが しかし、まさかあれが『るな』だつたなんて。もう少し引き止めておけば紅憐と会わせてやれたのか。ちょっと後悔する。

「でもわ、なんで紅憐はある下、『るな』に会いたかったんだ？」「なんでつて……。一昨日も、急に瑠奈がたしに会いにきてこう言ったんだよ。『もう一度と会うことはないわ。貴女も全部忘れるところになる』って。それだけ言つていなくなつたんだよね」

なんだか意味が解らないな。全部忘れる事になる、とか言つて、紅憐はこうして覚えているじゃないか。

「それで、気になつて探してたんだよ。瑠奈のことしつてる知り合いとか、あんたのクラスメイトに話も聞いたんだけど おかしいのはここから。皆、ほとんどが彼女のことを覚えてなかつた」

「俺も含めて、か」

「うん。あたしだけしか覚えてないなんておかしいでしょ。だからもうと氣になつて、あんたの家までもおしかけたけど あんたも覚えてなくて、もう行き詰まり。それからもちょっとは探してみたけど

」

そして今日 その『るな』が俺の前に現れた、か。どうして俺なのか。紅憐だけが覚えているなり、それこそ紅憐の前に現れるべきではなかつたのか？

「でも、まさかあんたに会いにきてたなんてね……。もうちょっと早く荷物用意してれば、あたしも会えたかもしれないって思つと、ちょっと残念だな」

「『るな』ねえ……。でもわ、そいつの話がつからずるむ、『るな』

と『守崎』は別人っぽかったんだが。そいつは守崎の「ひとさん付けで呼んでたし、他人じゃねえのか?」

「つまりあんたと会ったのは瑠奈じゃないってこと? それはないよ昂。だって金髪のロングだなんて瑠奈ぐらいしかこの辺にはいないでしょ」

「まあ、確かに……あんな格好したやつは見た事もないからなあ」「とにかく、まだ瑠奈がいるって事が解っただけでもいいか。いなくなっちゃたのかと思つてたけど、まだどこかにいるなら、きっといつかまた会えると思うし」

「そうだな。この町、案外狭いし」

そんな会話をしているうちに、気が付けば田の前の菓子が全滅していた。おいおい、俺全然食つてないんだけど。紅憐食つうの早すぎだろ。

「さて、それじゃあたしは最後のメインディッシュを戴くとするかな」

とか言いながらすでにショートケーキも開封しだす。

「……なにじるじる見て。食べたいわけ?」

「いや、別に」

「あげないよ?」

「だから別にいらぬよ」

「なに、強がつちゃつて。そんなに欲しいんだ」

「いらぬーって言つてるだろ……」

「しようがないなあ。一口だけだよ」

とか言いながら、フォークで適当に取つたケーキの一部を俺に差し出してきた。

「ほり口開けなさい」

「……なあ、紅憐。俺とお前はいつから恋人同士なシチュエーションを行えるようになつたんだ?」

「あーん、つて言ってみ。ほらほら」

完全無視だった。

「……お前、もしかしてからかってる?」

「せひ、あーんって言つたら食べさせたげる」

「こつ、絶対にからかってやがる。今そう確信した。

「……あーん」

「うわ! ほんとに言つた! 鼎おもじりつー..」

「あの、殺してイイデスカ?」

「まあ、ちゃんと言えたから食べさせてあげよ! せひ
ぱく、とフォークを口に突つ込まれた。……む、美味しい。コンビ
ニのケーキとはいえ、侮れん。

「おいしいでしょ? これ好きなんだよね。いつなくなっちゃうの
か心配だわあ」

そう言いながら、紅憐は残りのケーキをそのままフォークで食べ
始めた。おい、それ一応俺が使つたんだけど。俺の口の中に突つ込
まれたんですけど。あの、紅憐さん?

「うーん、おいしいっ」

お構いなしだった。なんか無駄に意識してる俺がばかみたいに思
えてきた。つまり、ここにつにとつてやつぱり俺はただの幼馴
染だつてわけか。ふうん、やつぱなんだか面白くない。

「なあ、紅憐」俺はなんとなく、からかい返すつもりで、「お前つ
てさあ、好きなやつとかいるの?」

「ぶは! と、紅憐が俺の言葉を聞いた瞬間、口の中のケーキを吐
き出した。おいおい、汚いな。うつ、と紅憐はティッシュで勿体無
わざうにテーブルの上のケーキを吹きながら、「な、なんていきなりそんな話になるわけ?」

「いや別に。ちよつと気になつただけだよ。で、いるのいないの」
紅憐は少しの間無言で、「……こりこりつちやいるけど

「え、いるのか。マジで? お前……それマジ?」

「……なこ、いて悪いわけ? あたしだつて恋愛ぐらうするもん」
まさか本当にいるとは思つてなかつた。いや、ちよつとは思つて
たけど、いやでもあの紅憐が　なあ。正直有利得なことまで思つ

てた。

「いや悪くはねーよ。ちょっと意外だつただけだ。で、そいつって
どんなやつ?」

「どんなやつ……つて、そうだなあ」紅憐は少し考えてから、「全
然優しくなくて、勉強も運動もあんまり出来なくて、それでいて他
人の想いに鈍いんだよね。それも異常なぐらいに」

「はあ? 何それ、最悪なやつだな。そいつのどこがいいんだよ」
ちょっと紅憐の好みが心配になつてきた。幼馴染として、それは
ちょっと応援できない相手だと思つ。いやまあ、紅憐の好みは元か
ら知つていたから、それこそ最初から応援すら出来ないつていう特
殊な好みだつたんだけど。

「そうだねえ。なんで好きなんだろ? ぶつちやけわかんない
かも」

「……おいおい、なんだそれ」

「でもね」紅憐は少し誇らしげに、「その人は、本当に大事なところでは絶対にあたしを見捨てたりしないんだよ。あたしが助けてつ
ていつたら、絶対助けてくれる。いつもは優しくないのに、大事な
場面では凄く優しくしてくれるんだよね」

なるほど、悪い部分だけではないらしい。そいつはきっと不器用
なんだろうな とか思いながら、

「ふうん。俺にはよく解らねーけど、そいつはきっと本当はお前のこと大切に思つてくれてんじゃねえか。それならいいだろ。きっと、
そいつはお前を大事にしてくれそうだし」

幼馴染として、そして何より普通に考えて まあ、紅憐を任せ
られるかは置いておいて、紅憐はきっと心底そいつのことを慕つて
るんだろう。なんだか、少し寂しい。ついでに悔しかつた。

「うーん、まあそうなのかもね。でもま、鈍いところだけはなんと
かして欲しこつて思うよ、あたし」

「そいつが鈍いなら直接言つてやりやいいんじゃねえか。紅憐が、
そいつのことを本当に好きなら……きっと、応えてくれるだろ。目

の前の壁なんて氣にすんなよ。お前ならどうとでもできると思つぜ」「言いながら、俺は少し後悔した。何故だか、紅憐をそいつに取られてしまつような氣がして。別にこいつをどうとか思つてゐるわけじゃないけど　なんだか、今までずっと幼馴染として接してきたこいつが、色んな意味で俺の前からいなくなつてしまつた。だが、そんな俺の気持ちを知つて知らずか、紅憐は少し悲しそうに、「実はさ、ちょっと前に告白したんだよ。まだ返事は聞いてないけど……多分、きっとその人はあたしを受け入れてくれない。どれだけ優しくても、大事に思つてくれても、それが、その人の本質なだけだから。たぶん、誰にだつて同じように優しくする。あたしを恋愛対象としては、きっと見てない」

それは、何故か確信に近い言葉だつた。どこのどいつかは知らないが、紅憐をここまで思い込ませるやつがいるなんて。もし俺がそいつと会うことのあるなら、一発殴つてやりたい気分だ。俺に殴れる資格はないけど。まあでも、恋愛対象として観れない　つてのは、あながち解らないこともないけど。

「はいはい、湿っぽいあたしの恋愛話は終わり！　こうこう話は得意じゃないんだよ、それぐらいあんただつて知つてるでしょ」「まあな。からかい返してやろうと思つただけなんだけどさ。まさか真面目に受け答えされるとは思つてなかつた」

「…………しつかし、あんたもあれよね」すると、突然紅憐が呟いた。「ほんと、相当鈍いんだから」

「…………はあ？」

「何でもないよ。さつてと、この『ミニ片付けなくちゃ』

それだけ言つて、紅憐はテーブルの上に散らばつている菓子の残骸を片付けはじめた。……俺が鈍いって？　いやまあ、確かにそんな気もする。沢宮さんの気持ちに気付けなかつた辺り、俺も紅憐の想い人同様に鈍いやつだつてことなんだろうな。他人のことは言えないとつてことか。

そして、夕日も沈み始めた頃　俺と紅憐は夕食を済ませ、交代で風呂に入ることにした。どうやら、紅憐は着替えも一式持つてきているらしい。あの大荷物はそれか。いやしかし、それ以外にも色々と入つてそうだけだ。

「んじゃあたし先に入るから。まああたし結構はや風呂だし、すぐ出てくるからちょっと待つってねー」

それだけ言い残し、紅憐はバスルームへと消えていった。覗くな、とかそういう釘を刺すようなことを言わない辺り、俺もそれなりに信頼されているんだね。期待には応えなければならぬ。

「さて、何すっかな……」

今のうちに、リビングで寝れるように準備しておくれのも悪くはない。そう思い立つた俺は、自分の部屋にある予備の布団と毛布を両手に、リビングへと戻った。戻つて、

「……えっと

そこには、黒いフードを被つた不審者がいた。

「ど、どろぼ　むぐつ！」

「落ち着いて」言いながら、黒フードの不審者は俺の口を手でふさいだ。「私は怪しいものじゃない」

「……ぶはっ。いや、そう言うやつが一番怪しいんですけど……」
するり、と黒いフードが脱がれる。その下には、見覚えのない少女の顔があった。

「ルナが昂に会つたと言つてたから、何かされてないか見させて」

「……はあ。ん、『るな』……？　あの、金髪か？」

「……」こくり、と頷く黒髪の少女。

ふむ、やはりあの金髪は『るな』だったわけか。ところどころは、

「これは一体誰だ？」

「見たところ、何もされてはいない……良かつた」

何もされてない、って　そりや、ただ話しただけだし、特に何

かされた覚えはないけど。あれ？ そういえば「コイツ、俺の名前を呼ばなかつたか？」

「本当は、もう関わりたくはなかつたけれど、事態が悪化しているから。仕方ない。貴方の記憶を戻す」

「なんだつて？ 俺の記憶……？』『るな』ってやつと何か関係があるのかよ」

「本来、私の『断片忘却』は一時的なものでしかない。だから『ずれ』は思い出す。それを早めるだけ」

『じけりの話はまったく無視のようだた。

「これ」と、黒髪の少女は鈴を取り出す。「これの音が合図になっている。私は、これの音色によつて対象に様々な魔法を掛ける事ができる魔術使いだから」

ちつん、と。

田の前で鈴を鳴らされ、ふと思ひ出す。

「……夜鈴、か？」

「……」じけり、夜鈴は頷く。

「おいおい……なんだよ、どうして俺の記憶を消したんだ。いや、そんなことは後回しでいい。なんていま俺の記憶を戻したんだ？ ルナとなくか関係あるのか？」

俺は一瞬にして全てを思い出していた。義理の妹だったルナミス＝サンクトリアのことも。偶然助けた魔術使い、守崎夜鈴のことも全て。

「と言ひよりは、私達のことに関係している。貴方と今一緒にいる、

朝雞紅憐についても

「紅憐だつて？ あいつが何があるのか？」

「気付いているはず。彼女は、昨日

俺ははつとする。

「昨日つて、あの連続殺人事件か？ そつだ、確かルナはそれを追

つて……」

「そう。そして、その犯人に目星がついた」

「何だつて？ 本当なのか、それ」

犯人　　目星がついた、つてことは、誰が犯人なのか解つたつてことだ。それは一体、誰だと言つんだ。

「詳しい事は、別の場所で話す。今は、ここにいては危ない。ここから出るべき」

「いや……そろは言つけど、俺は紅憐と一緒にいてやらないといけないし」

俺はそこまで言つて、気付く。何故、ここにいては危ないのか。

「……犯人がここにいるから。貴方は危ない。早くここを出るべき」

夜鈴がそんな俺の心境を察してか、具体的な言い方で呟く。まさか。本当は、真実は そうだと言うのか？

「いま起こっている連續猟奇殺人事件、その犯人の名前は　　夜鈴は冷静に真剣な面向きで、「朝離紅憐」

少女　　朝離紅憐がバスルームから出た時、

「……まさか、感付かれた？」

そこに、月城昂の姿はなかつた。バスタオル一枚を胸元に巻いているだけの格好で、彼女はチ、と小さく舌打ちする。まさか、このタイミングで連れ去るなんて。誰が　　いや、そんなのはもう決まつていて。瑠奈しかいない。彼女は今日、一度だけ昼に昂と会つているようだったが、その時に何もしなかつたと言う事は恐らくまだ気付いていなかつたのだろう。そして、ようやく気付いた彼女はこの絶好にして絶妙、絶対なタイミングを計らつて昂の奪取に成功したつてわけだ。

「こうなることは予想していたけれど……まさか私に気付かれずに

連れ出すなんて。なかなかやるじゃない。こんなことなら、もっと真剣に探しておるべきだったかな。結局、本当に『守崎』の人間なのかも何も解らず仕舞いだつたし

「

紅憐はバスタオルを剥ぎ、荷物の中に入れてある私服に着替える。着替えている途中、彼女は少し思考した。

（……やっぱり覚えてるってことはあの人に話すべきじゃなかつたのかもしれない。でもそうでないと聞き出せなかつたのも事実。結局、本当に何もかも忘れさせられていたみたいだけど。瑠奈もなかなか周到なことを……いや、ただたんに用済みになつただけだつたのかもしね、か）

それが何故今になつて？ やはり、ことの真相に気付いた。いや、存在しない事実に気付いた上でのとりあえずの安全策、といったところだろう。最悪、盾として使うことを恐れたのかも知れない。確かにそういう用途もあるだろうけど お生憎さま、私はそんなことのために彼の部屋に潜り込んだわけじゃない。なんとか連れ去つてことの有様を説明するつもりだらうけれど。彼がはいそうですかと信じ込んでしまう人間ではないつてことぐらい、私だつて解る。彼はそういう人間なのだ。身内にとても甘い。だからこそ好都合。私は余裕を持つて、高見の見物とさせてもらつのもこれまた一興だ。所詮、下等な魔法使い程度に私の策を見破ることなんて不可能なんだから。

「はいそですか、……つて信じるとでも思つのか？」

俺 月城昂は、自宅のマンションから少し離れた場所にある西条公園のベンチに座りながら、隣で話す義理の妹 ルナににそう返答した。彼女が宣告した内容はこうである。犯人は朝雞紅憐。土曜の夜 近くで悲鳴を聞きつけたルナが、とある路地裏の一角にて死体処理をしている朝雞紅憐の姿を発見。処理の方法は 燃却。

ライター等の火器は使用していない それだけ説明して、ルナは言い放つた。

「朝離紅憐は魔法使いよ」

「……、どういうことだ?」

「死体をまるごと、消し炭残さず燃やし尽くすなんて普通は不可能。それを成し遂げるにはどうあがいたって『魔法』の力が必要だわ。わたしが見た限り、あれは魔法を使ってでしか有り得ない。この魔法使いが言つてるのよ。まず間違いないと思つてくれていいわ」

俺が信じられないと言つた顔でルナの言葉を聞いていると、補足するように目の前に立つ守崎夜鈴が続けた。

「五大元素の一つ、『火』を操る魔法使い。それが恐らく朝離紅憐だと思われる」

「おいおい、待てよ。いくらなんでも話が突拍子過ぎる。紅憐が魔法使いだって? 俺だって一応あいつの幼馴染だから解る。魔法だなんて大それたこと、紅憐ができるわけがない」

突然俺の部屋までやってきた夜鈴に連れられこんなところまできたのはいいものの、話された内容はにわか信じ難い内容だった。

「突拍子なのは仕方が無いでしょう。貴方の場合、魔法使いが絡んでるだけでどんな話でも突拍子無く感じてしまうのだろうし」

「いや……そりゃそうだけど。でも紅憐が犯人だなんて、それはなつて。大体、あいつはその犯人とやらに狙われているからって俺のところまで逃げ込んできただけなんだぜ?」
「逃げ込んだ ね。それが、もし犯人から逃げるためではなく、ただ単に身を隠すためだけなのだとしたら?」
「どう言つことだ。身を隠す つまり、紅憐が犯人だつたとした

らの話か。

「昼間にわたしと会つたときあるでしょ? あの時点では確定ではなかつたのよね。確かに魔法使いだという証拠がそれだけでは、断定するのも難しいから。でも」

ちらり、トルナは夜鈴に目配せをする。それに応えるかのように、

黙つて頷いた夜鈴が話を続けた。

「……『朝籬』は、『守崎』と過去に接点がある。それは、魔法使いの家系としての接点。私自身、昔に朝籬紅憐と会った事もあるから覚えていた

「夜鈴が、紅憐と……？ 本当なのか、それ」

「こくり、と頷く夜鈴。

「厳密に言えばそれだけではない。『月城』『沢富』『波上』これらを含む、計五つの家系がそれぞれ過去に接点を持つている。魔法使いの家系、またはそれに関わる存在として」

月城？ 僕の苗字が、何でこんなところで出てくるんだ？

「驚いたわよ、まったく」ルナが心底呆れたように咳く。「ようするに、この街には魔法使いに関わる家系が ばか兄の家を含む五つも存在していたってことよ？ こんなちっぽけな場所に、ね。おかしいにもほどがあるわ」

「おいおい、それじゃ俺も魔法使いだって言つのかよ？」

「うん、否定はできないけど。少なくとも素質があるだけで魔法使いではないわね。魔法使いつてのは、文字通り魔法を行使できてこそその存在だから。貴方、そんなの使えないでしょう？」

「そりや、そうだが……」

「つまりはそう言つ事よ。何の間違いか、この街には魔法使いがいっぱいいるの。そして 今回の事件の犯人は、わたしがその場を目撃したんだからまず間違いなく 朝籬紅憐なのよ」

そんな事があつていいのか。魔法使いが何だと言つ それじゃあ、紅憐は俺に今まで嘘をついていたのか？ 五つの家系？ 何だよそれ、意味が解らない。それに、残る二つの名前 それにも聞き覚えがある。

「夜鈴。さつき『沢富』と『波上』って言つたよな

「言つた」

「俺、その名前知ってるんだけど。しかもクラスメイトと先生だ」「……どう言つう事？」

「一人は、紅憐いわく死んだらしい。今回の事件の被害者 それが『沢宮』。沢宮花凜つて言う俺のクラスメイトだ。ルナも知ってるだろ?」

「ええ。まさかとは思つたけど。彼女も魔法使いに関わる家系の人間で……そう、紅憐に殺されたわけ?」

「言つとくけど、俺はまだ紅憐を犯人だとは思つてないぜ。で、次だが……『海上』だな。これは俺のクラスの先生だ。海上葵 これも、知つてるよな」

「……知つてるわ」

「これは偶然か? なあ、ルナ。お前、本当はこの街に何をしにきたんだよ。学校にいったのだって 全部、本当に偶然だったのか。だつてお前、この数日で夜鈴の言つ家系つてやつに全部関わってるじゃねえか」

俺がそれだけ言つと、ルナは本当に驚いたような表情を浮かべた。
「……そつ。なるほど、そう言つことなの? わたしがこの街に送られてきた理由 ただの魔法使いによる事件の解決だけなんて思つていたけど、本当はそうではなかつた?」

「解らない。解らないけど、偶然にしちゃあ出来すぎてる。ルナ、お前本当に何も知らないのか?」

「知らないわ。少なくとも、わたしの仕事はこの街で起きている事件の解決 それだけよ。これは嘘じやないわ。ここで嘘をつく必要もないし」

「問題はさ。俺が魔法使いに関わる家系だか、その素質を持つているのかだかしてるとして。でも実際、魔法なんてもんを使えるわけはないし 他のやつらだつてそうじやないのか? 俺みたいに、魔法使いと関わりを持っているだなんて知らないんじやないのか。紅憐だつて死体を燃やしたつていうけど、本当に魔法でしか不可能なのかよ?」

少なくとも、俺は紅憐がそんな事を隠していたとは思えなかつた。だから、あいつは知らないんだ。自分が魔法使いだつてことを。今

まで俺に何も話さなかつたのだって、知らなかつたから、それだけかもしれない。

「不可能よ。跡形もなくなつてたんだから。でも、自分が魔法使いだって自覚はないのかもしないわ。ただ、ヘンな力を使えるってことを理解しているだけかも知れない」

「跡形もなくなつていた　か」

そう言えば、紅憐はこう言つていた。現場から逃げ出して、次の日の朝にもう一度現場に見に行つた、と。そのときにはすでに、死体はなくなつていたと。紅憐が犯人なのだとしたら、いちいちこんな事をするだろうか。

「ちなみに」ふいに、夜鈴が呟く。「貴方には追跡の魔法をかけておいたから、私には貴方と朝雛紅憐の会話のやり取りが聞こえていた」

「なんだって？　てか、それ盗聴　」

「必要だつた。……そして、朝雛紅憐は言つていたはず。目撃者は自分一人しかいない。狙われるのは自分だ、と」

ああ、確かに言つていた。次の日に死体がなくなつていたんだ。目撃したのは自分一人なんだから、狙われると思つてもおかしくはいや、待て。

「朝雛紅憐は自分で死体を処理した。そうでなければおかしい。そうでないならどうして目撃者が自分だけだと言い切れる？」

「あ」

「自分で死体を処理していながら、どうして逃げる必要があるのか、つてことよ。紅憐は犯人から逃げているのではなく　ただ単に身を隠しているだけ。この前のわたしみたいにね。貴方は利用されているだけに過ぎないってこと」

紅憐は「目撃者は自分一人しかいない」と断定するように言つていた。もう一度見に行つたのは次の日の朝。それなら、その間の空白に誰かが死体を発見していてもおかしくはない。だが　紅憐は知つていたのだ。自分が立ち去るときにはすでに死体はなかつたか

ら。だからこそ、目撃できたのは自分一人だと言い切った。嘘。

だつたというのか。紅憐は、俺に嘘をついてまでうちにやつてきて。あんなに怯えたような表情をしていたのも、全て演技だつて？

「……紅憐はそんなに嘘が上手くも演技上手でもねえよ。俺は紅憐を信じる。あいつが何をしてようと、あいつが言つたことを俺は信じてやるしかねえんだよ。頼られているんなら、俺はそれに応えるだけだ」いくら魔法使いでも何だつて、紅憐が紅憐である限り、俺は紅憐を信じる。「話はもういいか。あいつを待たせてるんだ。悪いけど、もう行くぞ」

俺がそれだけ行って立ち上ると、だが白と黒の少女はまるで予想通りというような顔をして、

「……まったく。だからばかだつて言つてるのよばか兄」

「私は貴方のそういうところを知つている。多分、こうなると言つ事も解つていた」

「なんだよ二人とも。止めなくていいのか」

「止める必要がないわよ。でも、もし貴方に危険がありそつたら、そのときは助けにいつてあげるわ。それぐらい、させてくれてもいいでしょう？」

「……そんなことは無いと思うけど。まあ、好きにしろよ」

答えて、俺は踵を返す。一人の少女は何も言わずに俺の背中を見つめていた。

こうして、俺は自宅へと戻つてきていた。ドアを開けて玄関へと入る。リビングからはテレビの音が聞こえてきた。どうやら紅憐は風呂から上がつてテレビタイムといったところだろう。一人ルナと夜鈴にはああ言ったものの、俺は俺でやらなければならぬ事がある。今までの事を振り返りながら、俺はリビングへと顔を出した。

「あっ、昴！　ばか、どこにいったのよ…」

「わりに、ちょっと知り合いで呼ばれてさ。公園でだべってた」

紅憐は立ち上ると、ふいにこちらまで駆け出してくる。ふわり、としたいい匂いがしたかと思うと、紅憐は俺の胸元へと抱きついてきた。

「お、おい

「ずっと一人で不安だつたんだから……。勝手にじぶんにいかないで。一緒にいてよ……」

ぎゅ、と服を握つてくる紅憐の両手。俺は何も言えず、何もでき

ず　ただそこで呆然と立つていた。いつの間に消したのか、テレビの電源はオフになつていて、部屋には静寂が訪れる。

不意に紅憐が上目遣いに俺の顔を見上げてきた。その目には、うつすらと涙さえ浮かんで見えた。

「昴……」俺の名前を呼んで、紅憐は俺の目を見つめる。「お願い。あたし、一人で寂しかったんだよ……。もう一人はいや。ずっと一緒にいて」

「お前……」

「頼れるのは昴だけなんだよ。もうあたしには昴しかいない。言わなきやだめなら、言うよ。あたしの気持ち、昴は気付いてないみたいだから」

す、と紅憐の顔が近付いてくる。田を開じながら、俺の首に両腕を巻きつかせて

「好き。お願い、抱いて……」

「……！」

決定的だった。本当に信じたくはなかつたけれど。まさか、ここまで自分が鈍いなんて思つてもみなかつた。本当に些細なことだつたじやないか。今思えばすぐにでも解る事だ。全てが全て、何かもも簡単に気付けたはずだ。自分がばからしくなる。こんなことも気付けなくて、何が幼馴染だつて言つんだ。ばたり、と互いの身体がもつれ合うようにして床に倒れ込む。上に乗るようにして、

彼女の身体が俺の身体を支配しようと動く。

「ねえ。キス、しよ……？」

そして、その顔が 脣が、俺の手の前で迫ってきて、

「 もうやめりよ

俺は、その身体を無理矢理引き剥がすよつて退けた。

「な、に？ どうしたの昂。いやだつた……？ あたしのこと、嫌いなの？」

涙目のまま、倒れるようにこちらを見る彼女に一瞥をくれてから、俺はゆっくりと立ち上がる。嫌いなわけがない。だがそれは、それが本当の朝雛紅憐であつたときだけだ。

「……おかしいとは思つてた。信じたいつて気持ちがそれを気付かせなかつたんだろうな。俺もばかだつたよ。どうしてこんな簡単なことに気づけなかつたんだか」

「何言つてゐるの……？」

「知らないのも無理はねえよ。……俺さ。他人にはああいうけど、実は紅憐のこと一回だけ本気で好きになつたことがあるんだ」

俺の目の前にいる少女は、何のことか解らないと言つた風に顔を見上げる。

「ま、昔の話だけど。一年ぐらいたしかな。告つたけど即フられた。ま、当たり前っちゃ当たり前だよな。あいつと俺はただの幼馴染だつたんだから。だから、あいつが俺を好きになるなんてことはあり得ないんだよ」

「……、でも今はあたし昂のこと」

「もういい。それにわ、そんなことは別にどうでもいいことなんだ。本当にどうでもいいことなんだよ。決定的ではあるけどやうじやない。色々とおかしい」とはいっぽいあるんだから」

「昂、あたし……」

「おかしいんだよ。思つ出せば思い出すほど矛盾が湧き出していく。

お前さ 憐く紅憐に似てるし、本当は 僕の考えている事は、
本当は違つんじゃないかつて今でも思うけど。本物の紅憐じゃない
だろ?」

「それは」

「知らないんだよ。紅憐はさ。俺が、朝早く学校に行つていた事な
んて。ましてやルナに起こされてたなんていう事実をあいつは知ら
ない。知つてるのは、ある一人だけなんだよ」

そう 思えば全てがおかしかつた。これだけではない。もつと、
探せば探すほど矛盾点は数多く存在している。

「一人だぜ。俺が話したのは一人だけだ。クラスメイトの防人。あ
の女好きと 今、俺の目の前にいる沢宮花凜だけだ」
そこには、朝離紅憐の姿をしただけの少女。

沢宮花凜は、にたりと笑みを浮かべて立ち上がつた。

「…………いつから気付いてたの?」

「気付いたのはついさつきだよ。それに、確証はなかつた。最悪ハ
ツタリで済ますところだったが……沢宮さん。やっぱり、そうなの
か」

ぶわ、と少女の身体が光に包まれる。ルナのあの『光の衣』とは
ドレスオブライト

また違う 赤い光。

「まさかこんなに早く気付かれるなんて、予想外だつたな」
瞬間。少女の姿は、いつの間にか朝離紅憐のものではなく 正
真正銘、沢宮花凜のものに変わつていた。

「…………へえ。それが、沢宮さんの『魔法』か?」

「あれ、もしかして全部思い出したの? ……ふうん、じゃあ話し
てもいいかな。そう、確かにこれが私の魔法だよ月城くん。そうだ
ね、『擬似変装』って呼んでる」

「トレース……」

「それにして、他にも色々と間違えちゃつたところがあるみたい

だから、参考までに教えてくれないかな？ できれば全部。私がどれだけ間違いを犯したのか。覚えているならでいいんだけど」

沢宮花凜は平然と、別に何の気兼ねもなくそう言った。ただ興味があるから、と言わんばかりに。

「……そうだな。多分、これが最初だろ。 金曜の帰り道、ルナの事を俺に問い合わせたとき。あのときからすでに紅憐の姿をしていたんじゃないのか？」

へえ、と感嘆するように微笑を浮かばせる沢宮花凜。俺は構わずに続ける。

「今考えればおかしいからな。俺が学校から帰るとき、紅憐は部活やつてたんだから。なのに俺とあの場で会うのは物理的に不可能だろ。確かに少しおかしいとは思つたけど」

「そうだね、当たつてるよ。他は？」

「あいつに好きな奴がいるって話だよ。あのさ、何で俺がフラれたかつて話、しただろ。 その理由つてのがさ。あいつ男嫌いなんだよね」

「……男嫌い？」

「ああ。いやまあ、普通に話す分には問題ないからちょっとと言い方が違うかな。正確には 男を恋愛対象として見れないんだ。 あいつ自身、何だかやけに性格が男勝りだったりするのはそれなんだよ、実は」

「ふうん。月城くんがそれを知ったのは、告白してからなの？」

「ああ、そうだよ。その時、あいつは俺の目の前でとんでもないことをいやがつた。『あたし男に興味ないから。付き合いたいなら女になつてよ』ってさ。笑えるだろ？ 笑うしかねえ。ここで俺の幻想はことごとく打ち崩されたってわけ」

「……でも、じゃあどうして好きな相手がいるって話をしたときにそこまで追求しなかったの？」

「簡単。 ただ女を好きになつたんだろうって思つただけ。だからこそ、俺はまさか自分のことだなんて思う訳がない。 でもま、動搖はした

けどな。本当にあいつに好きな奴ができるなんて思つてなかつたし。あんまりあいつがそういう話得意じゃないつてのも、解つてたしさ」そして、その好きになつた相手　それが女子ならなおさら、あいつはなんとモテる。あの性格もわかる」とながら、スポーツ万能・成績優秀な美少女　ときた。これがそのテの女の子にモテない理由がない。だが、紅憐自体はその事実を知らない。鈍いのはあいつだつてそうだ。だから不安に思つ気持ちも、地味に理解はできた。同姓愛なんて理解したくもないが。

「そつかあ。それは知らなかつたよ。まさかあの朝離さんがね……さすがにこればかりは解らなかつたな」

「……なあ、沢宮さん。あいつは　紅憐は無事なのか」

「うん？　もちろんだよ。今は自分の部屋でぐつすりじゃないかな」
「うか　ひとまずは安心する。だが、そうだとするなら。一体、何のためにこんな事件を起こしたのだろう。」

「俺は問い合わせた。じゃあ次はこつちから質問する番だよな。何でこんなことをしたのか、ことの経緯を全部話してくれないか」

沢宮花凜は、それが当然の反応だと呟つよつにこりと笑い、「いいよ。それじゃあ、どこから話そつか　」

金曜の放課後。私　沢宮花凜は、血迷つたのか場の空氣に押されて告白をしてしまつた。相手の名前は月城昂。同じクラスの同級生にして、とても仲の良い男子生徒。本当は告白なんてするつもりはなかつたけれど　今言わなければならぬような、そんな不安感に苛まれた私は、ついつい思わず言つつもりのなかつた本音を口にしてしまつた。言つたが遅し、相手は何を言られたのか良くなれないといつた表情で呆然としていて、私はやっぱり言わなきや良かつた　と、後悔しながら涙を浮かべてその場から駆け出した。後ろから追いかけてくる声が聞こえてきたが、それをなんとか振り払

う。もし、彼に捕まつてしまつたらきっと返事を貰うに違いない。
そして、その返事の内容はもう解りきっていた。

「はあ、……は」

息が切れてきたところで、気が付けば校舎の外だった。追いかけ
てくる気配はない。諦めたのだろう。なんとか振り払つたことに、
す、と胸を手で撫で下ろす。とにかく今日は帰ろう そう思つた
時だった。

「あれ？ ……あんなところに」「

校門の壁に背を預けるようにして、一人の金髪を靡かせた少女が
立つていた。彼女のこととは知つてゐる。月城瑠奈 いるはずがな
い、月城昂の妹。昨日初めて聞いたときから確信していた。口では
とぼけていたものの、實際、心の中では疑いの念でいっぱいだった。
そんな唐突に、実は妹がいましたなんて有り得るのだろうか。まし
てや、幼少時代に一緒にいた なんて言われても信じられるはず
がない。と言うか、月城くんは覚えていないようだったけれど、小
さい頃、私こと沢宮花凜は月城家と少なからずの縁があり、よく子
供同士で遊んだものだった。その時にいたのはあと一人 朝雛と
守崎。思い出したのは、月城くんに朝雛紅憐が幼馴染だと話しても
らつたときだ。どうして忘れていたのか、はたまたどうでも良かつ
たのか ともかくにも、月城昂に妹なんて呼べる存在はいなか
つたはずなのだ。一人だけ、お兄ちゃんだと呼んでいた少女がい
たけれど。守崎 苗字だけは調べられたが、名前までは解らない。
もしかすると、瑠奈の正体はその守崎なのではないかとも思えた。
月城を名乗つているのは何か事情があるのかもしれない。少なくと
も、私の家系である沢宮 そして、朝雛と守崎は魔法使いの家系
だ。朝雛紅憐に自覚はないようだが、守崎のほうはわからない。も
し、瑠奈がそうなのだとすれば納得がいく。昨日見事に学校中の教
師生徒を『洗脳』して見せたあの魔法 他の目は誤魔化せても私
は誤魔化せない。魔力の動きぐらいは掴めるからだ。彼女は、間違
いなく魔法使いだった。そして久しぶりなどと言つていたことから、

最有力候補としては『守崎』の銘が浮かび上がる。必然の結果と言えばそうだ。私は校門にいる金髪の少女のもとまで歩いて行く。何故だかは知らないが、どうやら彼女は月城くんを待っているようだ。なら、ちょっとこじわるしてみたくなるのも無理はないと思つ。

「あ、沢富さん。今からお帰りですか？」

ふとこちらに気が付いたのか声を掛けてくる猫かぶり娘。いや、それを言つなら私も人のことは言えないけれど、それでもこの少女の猫かぶりは異常だと思う。私は内心少しイラつきながらも、平常を保つた表情のつもりで答える。

「はい、ようやく委員会の仕事が終わつたんですね。もうくたくたですよ」

「大変ですね。あ、ところでうちの兄を見ませんでしたか？」

「え？ 月城くんならとっくに帰りましたよ？」

ここでハッタリをひとつ。月城くんと毎日一緒に帰るなんておかましい。今日ぐらいは一人で帰つてもらおう。そうじゃないと私の気がすまない。

「あ、そうなんですか。いつまで経つてもこないから……やっぱりそうだったんだ。それじゃあ、わたしも帰りますね。ありがとうございました」

それだけ言つて、礼儀正しく（見かけだけは）その場を去つていく彼女。ふと、ここで『擬似^{トレス}変装』を使って彼女に成り代わつてやろうかとも考えたけれど、それは意地が悪過ぎる。さすがに悪趣味も良い所だし、そう言つ手はここぞつて時まで取つておかなきや意味がない。それならば、もっと有効に使うべきだろ。私は月城くんの帰り道を歩きながら、真実を確かめる為にひとつ芝居を打つことにした。

というわけで、『擬似^{トレス}変装』を使って朝離紅憐の姿を借りた私は、

帰り際の月城くんに瑠奈の正体について問い合わせてみた。だけど、結果は微妙だつた。どうやら守崎という名前に心当たりはあるみたいだったが、その名前を聞いたあと、彼は何かを思い出したかのようにその場から立ち去つてしまつた。

「……ふうん。月城くんつて結構、朝離さんには軽いんだなあ」

まあ、なんというか得た感想がまずそれだつた。本人は幼馴染だからと言つけれど、朝離紅憐のほうはそうとは限らない。と言うか、昨日のことといい彼女は明らかに月城昂に好意を抱いているように見える。私のこともあるし、月城くんは相当鈍いのかも知れない。それだけ考えて、今日のところは帰路に着くことにした。本来、私の家はこっちとは逆方向だ。また学校のほうへと戻ることになるけれど、仕方がない。

ふう、と溜め息をひとつ。魔法使いとしての力を使つたのは結構久しぶりだつた。実のところ、この力の存在に気付き、魔法使いとしての自我を得たのはここ一ヶ月の間の出来事である。今、街で噂になっている連續猟奇殺人事件。それが、魔法使いの仕業だと言うことを知つたのは、私が魔法を覚えた日だ。つまりところ、私が魔法を使えるようになつた瞬間に、眞実は全て明かされた。どうしてか、なんて話をする、また過去に遡ることになるのだけれど

それは、とある休日の深夜だつた。世間で言つ、連續殺人事件の一人目の犠牲者が出了日、私はその現場に居合わせてしまつた。犯人はいない、というよりは見逃してしまつた。長身な体躯を持つ男性だということは把握できたもの、それ以上のことは解らなかつた。そして、私はその時、犯人を逃がしたことに何故か憤怒していた。私らしくもない感情が渦巻く。人殺しを許容するなんて、目の前で許してしまうなんて、なんという体たらしく。

「悔しいかい？」

そこで聴こえてきた声、それが全ての始まりだった。背後にいつの間にか立っている男。先ほどの殺人犯ではない、体型も少しばかり痩せ細った、どちらといえばインテリ系の、顎廻目に見てもそこまで格好のいいとは思えない男性。何故だかその姿を見た瞬間、私の背筋が凍った。酷く、突き刺さるような感触を覚える。

「君はようやく舞台ステージに上がることになるよ。魔法使いたちが舞い踊る、華麗で優雅で そして残酷なショーサ。君もその主役の一人と成り得るんだ。これ以上に光栄なことはないよ？」

何を言っているのかまったく意味不明だった。せめて日本語で喋つて欲しい。いやまあ、実際、日本語じやないのかと言われるとほんとうには日本語ですと答えるけども。

「さつきの彼が今回の敵だ。彼を捕まえることが出来れば君の勝ち。どうだい、参加したくはならないかな？」

「……さつきから意味が解らないんですけど、その。魔法使いたかって、一体どういうことですか？」

男は笑った。嘲るように。本当に君は何も知らないんだね！ と、こちらを挑発するかのように、高らかに。

「いいよ、凄くいいね。なら教えてあげよう。君はね、魔法使いなのさ」

「は……い？ どう言うことですか？ 魔法使いつて」

「この街にはね、魔法使いが暮らしているんだ。おどぎの国さ。素晴らしいだろう？ 夢溢れる世界にわくわくしないかい？ そして、君がその魔法使いだと言うのだから、そりやもうきっと大興奮に違いないね！」

ああ、もう早くこの場から逃げ出したいなあ。そんな事しか頭に浮かばないまま、私はただ淡々と、田の前で踊るように笑い喋る男の言葉を聞いていた。

「それじゃあ姫様プリンセス 君の『回路』を開いてあげるよ」

ふつ、と、気が付けば男の姿が消えていて。次に気が付いたとき、

すでに私の意識は消えていた。そして目が覚めたときに、私は理解していた。何故だか、どうして解るのかそれが解らないけれど

不意に、私は魔法使いなんだってことを自覚した。でも、何が出来るのかは解らない。というよりは、まだ何も『組み上げていな』い状態で、魔法なんて何も扱えなかつた。魔法使いではあるけれど、魔法を使えない。これじゃただの滑稽な人形だつた。人形というフレーズを思い浮かべた瞬間、私は思いつく。そうだ。それなら、きっと出来る。どうしてかは解らなければ、今の私は魔法使い。あの気持ちの悪い男が言つていたように、確かに魔法使いなのだつた。だから、出来る。やろうと思えば、それを使つするためには必要な事が全て頭に浮かんでくる。あの男が言つていた『回路』というのは、こう言う事だつたのかな。なんて少し考えて、解らないからどうでもいいと切り捨てて、自分の魔法を完成させる。その瞬間から、私は『人形遣い』の肩書きを背負うことになつた。

私が魔法使いとなるきっかけは本当に唐突で、殺人犯が魔法使いだとわかつたのも、やっぱり必然なのだつた。でも、普通の人間と私はさほど変わらない。おかしな魔法を三つほど扱えるだけで、あとは何も変わりはない。だから魔法使いである『敵』を探すこともしなかつた。あの気味の悪い男ともあれ以來会うことはないし、完全に蚊帳の外の出来事として放置していた。でも、それでよかつたのか、と最近思うようになつてくる。私以外の魔法使いである、あの瑠奈が現れてから。私は、何か焦りのよづなものを感じるようになつっていた。

「……ただの杞憂だといいけど」

帰り道を歩きながら呟く。すでに学校の横を通り過ぎていて、あと数分と歩けば自宅の屋敷に着く。沢宮の一家は、古ぼけた和風なイメージを彷彿とさせる屋敷に住まう両親と私、そして使用人が數

人だけで構成された家庭である。金持ちとも言えるのだろうけど、あまりそう言う風に感じたことはない。しかし、私が魔法使いだと理解出来たときから認識の変化はあった。この沢宮家はどこかおかしな空気を持つ家系だとは思っていたけれど、まさか魔法使いの家系だとは。数年前に出て行った姉なら、その事を知っていたのだろうか。まあ、どうでもいいことはどうでもいい。とにかく今はそんな事も全て忘れて、自宅の自室でゆっくり休みたい。勉強もしないきやいけないし、なんだか今日は家から出たくない気分だった。焦る気分はあった。あの魔法使い、瑠奈が何のために月城くんに接觸したのか。守崎が動き出したのかも知れない。そう思うと、何故だか心臓がぱくぱく動く。あの気味悪い男の言うことを真に受けるわけではないが、舞台の幕が上がるうとしているのかも知れない。まだ確信があるわけではない。瑠奈が本当に『守崎』の人間であるかは解らない。その可能性が一番高いというだけで、もしかしたらまったく関係無いのかも知れない。でも、それでも彼女は魔法使いだった。そんな彼女が、私の前に現れた。これは偶然なのだろうか？ 本当に『その日』が近付いているのだとしたら、私は一体、どうするべきなのだろう。あの時 犯行を目撃し、犯人を見逃してしまったときに感じた悔しさは、確かに今でも思い出せる。やっぱり、そろそろ潮時かも知れない。今日のところは家でゆっくりするとして。そう、明日からはちょうど休みなんだし。ほんの散歩がてら、外の空気を吸いに出かけるのもオツじゃないかな と、口元をひどく歪ませながら私は思い立つた。

そして、土曜日。突然の来訪があつて、私は屋敷の玄関へと出た。私にお客さんなんて珍しいなー と思いながら、それが月城くんだったなら良いのに なんて期待も膨らませつつ、

「こんにちは、沢宮さん」

しかし、期待を裏切るかのように、そこには月城瑠奈の姿があつた。

「……あれ、どうしたんですか？　こんな朝早くに」

私がそれだけ応えると、目の前にいる瑠奈はしかし黙つてこちらを見つめている。感じ取れるのは、魔力が蠢く鼓動のようなもの。まさか、私にあの魔法を使うつもり……？

「ええ、ちょっとお別れに。『さよなら沢富わん。もう一度と会うことはないわ。貴女も全部忘ることになる』」

……、はつとする。恐らく魔法を使われた。魔力がこちらに流れ込んでくるのがわかる。

「……え？　あれ？　あの、貴女は　？」

「あら、間違えたみたいね。ごめんなさい、人違いでした」
私がただとぼけただけなのだと露知らず、まんまと術中に掛かつたと踏んだのだろう。ルナはしつとそんな事を口にして、その場から立ち去ってしまった。あの瞬間、微弱な魔力が私に接触してきたけれど、それだけだった。力が弱すぎたのか、私に彼女の魔法が掛かることはなかつた。恐らく私の体内にある魔力と反発したのかも知れない。とにかく、記憶を消されることはなかつたわけだ。でも、どうして今になって記憶を消す必要があつたのか。解らないけれど、何がが始まっている　そんな気分になる。

「私のところにまできたつてことは、すでに他の人の所にも行つてる……」

そうなると、すでに朝離紅憐の記憶は消されているかもしない。いや　今はまだでも、その内消されるのは目に見えている。それはそれで、好都合。彼女が瑠奈のことを忘れるのなら、それでいいとにかく、今はまだ動くべきではないと踏んで、私は部屋へと戻る事にした。

昼になり、またもや来訪者がやつてきた。おかしい。今日は絶対に何かが違う。ここまで私あてにお客さんがくるなんて、今までにはなかつた。偶然だとは思うけれど、そうではないと私の中の何かが訴えている。今日にして一度田の玄関。靴を適当に履いて、ガラガラと扉を開く。

「あ、沢富さん。『めん、急に押しかけて

「……あ」

そこには、朝離紅憐がいた。まさか。どうしてここに? 「あの……や。本当にごめんなんだけど。中 入れさせてもいい? ちよつと話があつて」

話は何だらう。彼女とは仲が良いと言つわけではないけれど、まったく接点がないわけでもない。私がクラスの委員長を務めているように、彼女も彼女のクラスの委員長を務め、委員会でたびたび顔を付き合わせる程度にはお互いのことを知っていた。たまに会話もするし、今日だって学校がらみの相談かも知れない。むげに断る事も出来ないし、ここは黙つて受け入れるとしよう。

「いいですよ、どうぞ入つてください。うわ、古臭くて馴染まないかも知れなけれど……」

「あ、ううん。ありがと。お邪魔します」

私はいつもの調子で応え、朝離さんを部屋へと案内した。木の板で出来た床は歩くたびにギシギシと唸るので、朝離さんは少しばかり緊張しているようだつた。まあ、無理もない。外見はまともそうに見えるこの屋敷でも、実のところ中は相当古い。うちは立派そうに見える屋敷を持つてゐるだけで特別そこまで金持ちはないし、リフォームする余裕だつてない。私が金持ちな自覚がないのは当たり前と言えた。いやまあ、それなりの家系ではあるのは確かなのだけ。私は部屋に着くと、先に朝離さんを中へ招きいれ、そのままお茶の用意を取りに台所へと向かう事にした。すぐに戻つてくるから、とだけ言って、私はその場から踵を返して立ち去つた。それにしても

「今日はなんだか、忙しい一日になりそう。……」「

そう思い立つて、自然と溜め息が出た。

部屋に戻ると、朝雞さんは本当に大人しく待っていた。物珍しそうに周りを眺めるでもなく、ただ静かに私の帰りを待っていたようだ、その姿勢にはなかなかに好感を持てる。

「はい、どうぞ。安いものだけど」

「ありがとうございます、気を使わせちゃって」「めんね」

さて、とりあえずは用件よりも世話話から入るべきか。いきなり用件を問い合わせるも、客人を扱う場合としてはあまり宜しくない。向こうが話を切り出すまではそれなりに相手を務めなくては、部屋まで招待した意味がないというものだ。しかし、そんな私の気を知つてか知らずか　朝雞さんは、間を置く事無く用件を切り出した。「あのね。今日ここまで来たのは、ちょっと聞きたい事があつたからなんだ」

「……聞きたいこと?　学校のこととかですか?」

「ううん。違うんだ。その……なんていうのかな。へんなこと言つやつだとか、思わないでね。あのさ、沢富さんは　瑠奈つて子のこと、覚えてる?」

……、瑠奈だつて?まさか　覚えているのか。

「……いいえ、覚えては、いませんけど。どうして?」

「覚えていない、か。そうだね、それだけで十分だよ。眞とは違う反応だ。沢富さん　本当のこと、話してくれないかな?」

なるほど、迂闊だつた。言い方がまずかった。私は隠し事が苦手だからなあ、と心の中でぼやぐ。仕方がない。隠していくもしょうがないし、ここは話を合わせよう。

「……そうですね。覚えては、います。でも、忘れろって言われたので、話してもいいものなのかなと……」

それだけ私が言つと、朝離さんはまるで女神にでも会つたかのよう、救われたみたいな顔をする。

「覚えてるんだね！ やっぱり、あたしだけじゃなかつた……！ ねえ、瑠奈は今どこにいるのか、知つてる？」

「ごめんなさい、さすがにそこまでは……」

探しているのだろうか。

「そつか。……でも、あたし以外に覚えてる人がいるだけでよかつたよ。あのばかも覚えてないって言うし」

「……あのばか？」

「あ、うん。昴のこと。あいつの家まで押しかけたけど、何も知らない、何も覚えてないって顔するんだよ。瑠奈は瑠奈で、今朝会つたと思つたら別れの台詞だけ言つていなくなるし……」

やはり、彼女の魔法は行使されていたんだろう。だけど朝離さんは覚えている。どうしてだらう とまで考えて、ようやく思い出した。朝離はこの街の魔法使いの家系だ。ならば 彼女だつて魔法使いであつてもおかしくない。この私のように、瑠奈の魔法に掛からなくても何もおかしいことはないんだつた。そんなことを見落としていた自分に呆れつつ、しかしだからといって別に何が変わるでもなし、私は冷静さを失わないように、平常心を保つ。

「私のところにもきましたよ。それで、別れの言葉も確かに聞きました。でも忘れるといわれても忘れるわけがないし 他言するなつてことなのかもしれないと思つたんですけど」

「うん。あたしも最初はみんな口を閉ざしてゐただと思ったよ。でも、昴のは明らかに何も覚えてないとしか思えない態度だつた。おかしいよ、何かが……上手くいえないけど、何かおかしい」

そこまで聞けば十分だつた。ようするに、やはりこの少女は魔法使いであつて魔法使いではない。素質はあるけど自覚のない魔法使いで、瑠奈の魔法は効かなかつたものの、実際何をされたのかまで理解に至つていない。ならば言いくるめることはできそうだ。いや それより、もっと効率のいいことが出来るかもしぬない。

「私もおかしいと思います。何だらう、何かが始まろうとしている、そんな感覚が。……あの、朝離さん。せっかくここまできて貰つたんだし、ちょっと長話に付き合つてくれませんか？」

時間にして一時間と少し。私は、私の知り得る全ての情報を彼女に話した。魔法使いが存在すること。私が魔法使いであること。瑠奈が魔法使いであると思われること。今この街で起こっている連續殺人事件と魔法使いの関わりを。そして、

「……じゃあ、あたしもその魔法使いだつて言うんだね」

「ええ。私もついこの間までは信じられませんでしたけど……自分のこの力だけでは把握できなかつた魔法使いの世界というものが、瑠奈さんや朝離さんを通じて見えてきた。これから何かが起ころうとしているって事も」

「にわかには、信じられない……ううん、信じたくはない、かな。あたし、そう言ひ話つて話すだけなら凄く好きだけど、現実として捉えるタイプじゃないから。……でも、うん。そうでないと説明のつかない事がある時点で、信じないと話も進まない、か」

彼女はなんとも理解力のある人物だった。私の突拍子もない説明だけで、ここまで理解し、現状を把握してものを見渡している。才能だな、と思う。少し妬ましいぐらいに。

「そうですね。私もそろそろ覚悟を決めないといけないと思ってたところです。私が会つたあの気味の悪い男性の言つていた言葉も気になるし……もづすぐ、何かが始まる。それは恐らく確実だと思うんです」

「沢宮さんは、これからどうするつもり？……こんな話を、信じるかも解らないのにあたしに話したつてことは、あたしに何か出来る事があるんじゃない？」

「……はい。察しが良いですね。今日ですけど、夜に街を徘徊しよ

うと思います。『敵』であるらしい殺人鬼 言うところのこの街で起きている事件の真犯人ですけど、その男性も魔法使いだと言う事は解つてるので。事件が起ころとしたら夜です。だから、動くなら早いほうが良い。今日の夜 そうですね、十時過ぎに学校の近くにある坂を降りたところのコンビニ、その裏側にある路地裏で待ち合わせましょう

「オッケー、解った。一人よりは一人のほうが安全だからね。あたしも協力するよ」

もはや他人事とは思えなくなつたのだろう 朝離紅憐は、容易くこちらの用件を許諾した。その後、一、二度会話を交えた後、朝離紅憐は屋敷を後にした。

夜の街は静かだ。この辺りは特に静かな部類に入るだろう。特別、コンビニに不良が頓挫するわけでもなし、車もそう多くは通らない。人通りもあまりなく、コンビニの光だけが唯一、その街が生きていることを証明するかのようだつた。そんな静かな街だからこそ 事件は起こる。私、沢宮花凜は『餌』を用意した。この舞^{ステージ}台の幕を速やかに下ろすには、ようするに殺人鬼の魔法使いを捕まえてやればいい。そうすれば、あの気味悪い男の言葉をこれ以上脳の隅っこに残さずに済む。ずっと気になつていたが、今日で全てを終わらせてやるんだ。私は今までに無い昂揚感を覚えながら、コンビニ裏の路地裏 朝離紅憐との待ち合わせ場所へと『餌』を撒く。餌と言う名の人形を。人形と言つ名の私を。自分を『人形遣い』たらしめた私の初めて行使した魔法 それが『人形精製』。基本は土に魔力を注いで形を形成し、私の魔力を遠隔操作して送り込み、それを動かす。見た目だつて私にしか見えないし、殺されれば血も流すように作つてある。あまりに精密過ぎて自分自身少し嫌気がさしたが、どうせやるのならこれぐらいないと『魔法』とは言えな

いだろうと言つのが私の考へでもあつた。路地裏に私を立たせ、魔力を強く放たせる。こうすれば、魔法使いなら嫌でも誘えるはずだ。近くに寄ればすぐに解るだろう。私が感じるよつに、他の魔法使いが感じるならば だが。

時刻は九時過ぎ。朝雛さんとの約束の時間は十時だから、あと一時間の猶予がある。これで釣れないなら朝雛さんと合流して今度は動き回つて探す。当初の予定はそれだけだつた。そう、朝雛さんの存在もあくまで保険程度でしかない。……でも、なんていうか。物凄く滑稽なのだけど。自分でもまさかここまでとは、なんて自惚れてしまふけど。

(釣れた…… !)

人形配置から數十分足らず。路地裏に、確かに記憶にあるあの男が現れた。

(『人形』に意識を集中 間違いない、あいつ……あの時の)
にたあ、と不気味に笑う長身の男。それは間違いくなく、私が魔法使いになつたあの日に逃がした、殺人鬼だつた。
(にしてもこんな簡単に釣れるなんて。私、もしかして才能あるのかな?)

駄目だとは解つていてもつい自惚れてしまう。む、とりあえずは目の前の『敵』をなんとかしよう。

「 オマエ。魔法使いだろ。ならオレと勝負しろ」

「 ……勝負? 」

私は人形越しに問う。この人形、何が凄いって遠隔操作できるだけではなく喋ることすら出来るのだ。

「 ああ。もう大分殺してきた。これで何人目だつて……いや、別にそんなことはどうでもいいんだけど」

「 ひとつ聞いてもいいですか? 貴方 まさか、今まで殺してきたのは全部が全部、魔法使いなんですか? 」

「 そうだ。どいつもこいつも弱くて仕方がない。ちまたじや連續猟奇殺人事件だとか言われてるけど。この犯人はオレだぜ」

魔法使いを殺してきた 理由は何であれ、ともかくこの男こそがこの街で起こっている連續殺人の犯人であることは解った。あとは、どうやって仕留めるか

「あのさ、オレをこうやって誘い込んだってことは。 オマエ、それなりに強いんだろうな？」

「……！」

ダツ、と男が駆け出す。いや 駆け出したと思った瞬間、その肉体はあるうことか空を飛んでいた。弧を描くようにぐるりと半回転しながら、私目掛けて飛び掛かる。魔法使いをこれまでに何人も倒してきたと言う事は この男、恐らくかなり強い。しかも魔法使いならば尚更だ。この人間技とは思えない動きも、魔法の力だと言つんだろうか。

「オイオイ、突っ立つてると一撃だぜ……！」

「こしゃ、と頭がひしゃげる音がする。同時にノイズが走り、途切れそうになる人形との意識。

「……なんだこりや、本物じゃねえのか。こうも容易く死ぬわけねえよな、魔法使いが。 チ。抵抗もねえから何かと思つたが、ようは試されたつてわけか」長身の男は舌打ちして、「 でもよ、甘いぜ魔法使いさん。オレも魔法使いだつてことを忘れられちゃあ困る。本体の居場所ぐらい、すぐに探知できるんだから」「

しまつた、と思った時にはもう遅い。長身の体躯を軽やかに、男はその場から文字通り飛んで去つていった。そこには、私の作り出した精密な人形の死骸だけが残されて。すぐに意識のリンクを断つ。だが、本物の私の居場所がばれてしまつては意味がない。すぐここから立ち去らなければ。私は二つ目の魔法、『擬似変装』^{トレイス}で朝錫紅憐の姿を被る。こんなのは外見だけの気休めに過ぎないけれど、やらないよりはマシだつた。出来るだけ自分の魔力を閉ざすよう神経を使いながら、私はその場から逃げるよう立ち去つた。

そうして、十時を過ぎた頃 ようやく追跡を交わし切れたらし
い。私は安堵しつつも常に気配を隠しつつ、人形の始末をするため
に路地裏へと戻ることにした。だが、ひとつ忘れていた。

「……あ」

そこには、朝離紅憐が立っていた。人形であるはずの、私の死骸
を見つめながら。

（死体を見られた……か。計画はこっちに進むんだね。うーん、一
応想定はしていたけど、どうしたものかな）

私はこうなることも考えてはいた。そうなったならそうなったで、
一番自分にとつて都合の良い展開を作り上げたいところだが や
がて、その場にいることが耐えられなくなつたのだろう。朝離紅憐
は恐怖の表情を浮かべつつ、悲鳴をあげながらその場から逃げ去つ
た。恐らく、これで私は死んだと思われて間違いない。人形に私だ
と思わせるためのフェイク 携帯を持たせていたのがあだとなつ
たか、朝離さんは私の携帯を拾つて行つた。本当は私であることを
『敵』に証明できればそれでよかつたんだけど、持つていかれてし
まつたのなら仕方がない。あとでなんとかして取り戻そう。さて、
とにかく今は私も朝離紅憐の姿をしているのだ。彼女の姿が見えな
くなつた頃合いを見図つて、私は人形の焼却を開始。この人形、魔
力を直接送り込めば簡単に、そして完全に消滅させられるのもメリ
ットの一つだろう。跡形もなくなつたことを確認すると、私はその
場から静かに立ち去つた。

次の日。昼頃に朝離邸へと赴くものの、反応がない。帰つていな
いのだろうか。 まさか、とは思うが。

「……前からはさすがにマズい、かな」

私は朝離邸の裏へと回り、窓を破つて中に侵入した。一人暮らし

だとは聞いていたけど、本当に静かだった。誰もいる気配がない。やつぱり家にはいないのかも知れない。二階まで上がり、朝離さんの部屋を発見する。もうここまでくればノックなんて必要ない。私は扉を開いた。

「……いない、か」

どこにいったのかは解らない。最悪、あの殺人鬼と出くわして殺されてしまった?とにかくいい事は事実だった。不法侵入してしまったからにはばれるわけにはいかないけれど、ここに今住んでいるのは彼女だけだ。説明すれば解ってくれるとも思える相手だし、少し調べ物をさせて貰おう。調べる事は『朝離』の家系について。魔法使いの家系ならば、何か手掛けりがあるかもしれない。

色々と調べてみたけれど、特に田舎しいものは見当たらなかつた。本当に魔法使いの家系なのだろうか?しかし、そうでなければ朝離さんが瑠奈の魔法に掛からなかつた理由も解らない。素質はあるはずなのだ。それに、私の実家でそれなりの調べはついている。そもそも、この街には魔法使いが多くなる。この街を仕切る魔法使いの代表とも言える家系『守崎』。私の家系である『沢宮』。それら二つと過去に接点のある『朝離』。朝離紅憐が素質を持つていることが証明にはなるが、魔法使いとしての証拠が何ひとつないのはどう言つことだろう。すでに身を引いている、という線もあるか。
「解らないことだけ、か……。うーん、結局あの『敵』のことについてもあんまり解らないままだし」

あの長身の男は、最後に目に見えない攻撃を放つた。上空から急降下してきた寸前、肉体と肉体がぶつかり合うその前に、何かしらの攻撃が私の人形にぶつけられた。恐らくかわす事は不可能。直視できない攻撃なんて、それこそ意味不明だ。魔法だということはわかるけれど、それにしても情報不足が否めない。あの『敵』には、

ただ闇雲にぶつかつていっても勝てる気がしなかつた。ふう、と一息つく間に、私はリビングのソファーに腰掛ける。自分でも何をやっているんだろう、とは思うのだけど、一度やつてしまつとなんだか割り切れてしまうところが、ある程度の安心感があると特にこを離れる理由も見つからない。今日一日ぐらいはここにいて、彼女が帰つてこないようなら本格的に探す事になるかもなあ　なんて考えている矢先、

がちやり、と。扉のカギが開けられて、朝雛紅憐が現れた。

「……あ」

やばい、見られた。この姿　朝雛紅憐の姿のままリビングに居座る自分を目撃されてしまった。

「あ、あたし……っ？」

慌て出す朝雛紅憐。私は仕方なく、『擬似変装』^{トレイス}を解除し　元の姿へと戻つた。

「さ、沢富さんっ！　無事だつた、の……？」

「……無事、とは？」

朝雛紅憐はあの現場を目撃している。だが、私自身はその事實を知らないフリで通しているため、ここはとぼけた返答をしておいた。「う、うん。約束通り、あの路地裏まで行つたら……そこに死体があつて。沢富さんだと思って……」

「あれを見たんですね……。あの路地裏にあつたのは私が魔法で作り上げた『人形』です。さつきの姿は、これも私の魔法で作り上げた『変装』です」

「そ、そうなの？　じゃああれは沢富さんじやなかつたんだ……。携帯が落ちてたんだけど、これ……沢富さんでしょ？」

「ええ、人形にもしものことがあつたら、それが私である証明になるように持たせておいたんです。あ、返して貰つてもいいですか？」

「うん、もちろん」

私は自分の携帯を受け取ると、人形の血に塗れたその機械をポケットに突っ込んだ。

「……本当は、『敵』に私が死んだと思わせたかったんですけどね。さすがに騙せなかつた。魔法使い相手なのに、少し舐めてました」「やっぱり、あれは『敵』とやりあつた後だつたんだね？ 殺されたんだと思って、あたし……」

「心配かけてしまつてごめんなさい。でも大丈夫。私はまだ生きています」

そう、生きてさえいればここから巻き返すことだつて出来る。だが、朝離さんはそんな私の言葉に「そうだよね」と、何故か気が乗らないと言わんばかりに答えた。

「それで、今までどうしていたんですか？ 心配になつて、ここまでやつてきたんですよ、私。勝手に入るのは、少し悪いかなと思つたんですけど……」

「そうだったんだ、ごめん。それがね」

そうして、私は朝離紅憐の今までの行動について詳しく話を聞いた。

月城くんの家に行つていたとは少し予想外だつた。しかし、私とかかるわりを持つた後で私が死んでいたとなれば、自分が狙われると思うのも無理はない。一通り話を聞き終わると、朝離さんは言い難そうに、

「……あのさ、やっぱり危険だよ。その『敵』ってやつは殺人犯なんだよ？ いくら沢富さんが魔法使いだからって、危険なことに変わりはない……！」

「そうですね……。でも」

何故だか、引き下がる気にはなれなかつた。瑠奈の件もある。私が魔法使いとしての自覚を持つてから数週間としないうちに、こうも事態が動き出した。あの気味悪い男の言葉が再現されようとしている。勝ちたい とは思わない。別に他の魔法使いに遅れを取りたくないとか、そんな理由ではない。ただ、なんていうか。

「……ねえ、やっぱり瑠奈に話さない？ なんとか探し出してさ。続けるにしても、あたし達だけじゃ

パシ、と。そこまで言われて限界を感じてしまった私は、朝顔紅

憐の後頭部を突いて意識を失わせた。

「……ごめんなさい。でも、それだけは 出来ない」

そうだ、やつと気付いた。私は、あの魔法使いが許せないんだ。『敵』なんてどうでもよかつた。そう、ただ一人の魔法使いのことが許せなくて。

「瑠奈……貴女の思うようには、させない。私は私のやり方で、この事件を終わらせる。他人の記憶を操作してまで自分の手柄を欲するような魔法使いに、私は負けられない」

彼女のことを知りたかったのだって、多分そうなんだ。私、沢宮花凜は。月城くんに寄生し、果てには他人を操作してまで首を突っ込んできた、あの女が許せない。

そして、私の加速は止まらずに。

私は一人の少女を演じきろうとして 結局、失敗した。

第一章／失うモノ、取り戻すモノ 下

「……私欲を交えたから失敗した、なんて良くある話だよね。そうは思わないかな？ ねえ、月城くん」

彼女 沢宮花凜の説明を聞いて、俺はことの真相を理解した。ただ単に彼女が全て紅憐の真似事をしていたわけではなく 交互に入り交わった二人の朝離紅憐。それが、この もはや事件と呼ぶことすらないだろう 事実の真相だった。ようするに、

「昨日、帰り際に会ったのは沢宮さん。昨日うちにきた紅憐は本物で……今日きたのも本物だつたが 紅憐邸で一人が入れ替わった。……つまりはそう言つ事か」

「そう。本当は死体なんて最初からなかつた。人形だつただけで、目撃した朝離紅憐はただ勘違いしただけ。まあ、携帯を持たせていた私のミスもあるけど、『敵』はああも簡単に見破つてくるし……」

「ルナが見たつていう死体処理をする紅憐つてのは、沢宮さんのことだつたのか。くそ、ややこしい」

「瑠奈……に、会つてたんだね。やつぱり」

「ああ、今更隠しはしないけどな。にしても、それじゃ……あいつらも勘違いしてるんじゃ ねえか、ちくしょう」

「勘違い？」

「そう。あいつら ルナと夜鈴が、紅憐を犯人だと思い込んでる。正確には今ここにいる沢宮さんだけど、あいつらは見破れてないみたいだつた」

俺がそこまで言つと、目の前の沢宮さんは目を丸くして、

「 あいつら？ まさか、二人もいるの？」

「ああ、そうだけど。知らなかつたのか？ ルナは外国からきた魔法使いで、名前は エーと、確かルナミス＝サンクトリアだつたつけか」

「……守崎じや、ない？」

「守崎は夜鈴のまづだな。守崎夜鈴。この街の魔法使いらしいけど、

あんまり詳しい事はまだ聞いてない」

「じゃあ、妹つていうのは？ その、瑠奈つづん、ルナミス＝サンクトリアはどうして月城くんの妹になんか……」

説明しにくい事情なんだよなあ、と俺は呟いて、

「まあ、ちょっと長くなるけど。話すか

これまでの経緯を、出来るだけ簡単に伝わるように話した。

一方、その頃 朝雛紅憐は、ベッドの上で目を覚ました。ゆつくつと身体を起こして、ここがどこなのかを確認する。……自分の部屋だ、間違いない。なら、あれは夢でもなんでもなく、現実だったのか。

「沢宮さんが生きていた……」

死体を見た時は見間違いではないと思つたから、確信していた。沢宮花凜は死んだのだと思い込んでいた。だが、実際にはああして生きていって、今はどこにいったのか解らない。下のリビングで恐らく氣絶せられたのだろう。今まで、自分はここで眠っていたのだ。

「いま、何時……だろ……」

部屋は薄暗い。かすかに窓から照りつける月の光があるだけだ。彼女と会つたのが昼頃だったから、大分長い間眠っていたのだろう。あたしは机の上に置いてある田舎まし時計を手に取つて、今現在の時刻を確かめる。 九時半。

「うわ、昂……待たせてたんだった。なのにもうこんな時間じゃ、さすがに帰っちゃったかな……。あいつにちょっと悪い事したかも」でもまあ昂だしいつか、とやけに早く気を取り直して立ち上がる。部屋の電気を点けて、身支度を開始。少し遅れる事になつてしまふ

けれど、行かなければ。待ち人を待たせるのは好きではない。自分が待つ事を嫌うから、他人を待たせるのも嫌いなのである。

ポケットに突っ込んである自分の携帯電話を取り出し、メールチェック。特になし。まあ、あいつは頻繁にメールなんてしないからなあ、と適当に考えて、携帯電話をしまう。とにかく、ここにこうして滞在していたのにも関わらず襲撃がないと言つ事は、恐らく

『敵』はあたしの事を解つていない。それはそれで、もう怯える必要も今はないと言う事。昂に頼り続けるのもさすがに悪い気がするし、安全さえ確認できたならそれでいい。それにしても、やはりさすがと言うべきか 沢宮花凜は余程の魔法使いのようだった。あの時死体を見て死んでしまったんだと思った時は、まさか死ぬと思つていなかつただけにかなり動搖したけれど。魔法使い同士の戦い

それは皮肉にも、互いの奇襲の応酬で、沢宮花凜は見事、持ち前の『切り札』を上手く使って死を逃れたのだろう。これをさすがと言わざして何と言おう。でも、やっぱりこれ以上関わる事はないほうがないんじゃないかな、と思う。沢宮花凜は確かに優秀だが、彼女の『敵』には勝てないと思う。殺人に特化した魔法使いと、他人を欺く事に特化した魔法使いなら 殺し合いになつた時、最後に立つている魔法使いがどちらなのか、言つまでもなく誰だつて理解出来る。これ以上は危険だ。死にたくないのなら、今すぐ辞退するべきだろう。力の差は理解出来た。それで十分だと思う。彼女だって解つているはずだ。このまま続けばいずれ負ける。殺されてしまうと。それでも 彼女は戦うのだろうか。

「……ああ、考えてたら寒気がしてきた。さつさと急いで」

俺 月城昂は、沢宮花凜にこれまで起こつた事を簡略に説明した。ルナとの出会い、妹になつた訳、守崎夜鈴の事。

「そつか……、それじゃあ、瑠奈っていうのはただの名前の略称、

ルナをもじつただけなんだね。ふうん、漢字だつたから日本人だと思つて勘違いしちやつた」

「……まあ、あの金髪見れば日本人じゃないつて気付いてもおかしくはないと思つうけど」

「うーん、まあ、私つてどつか抜けてるところあるからね」

いつもの、学校のときと変わらない調子で話す沢富さん。先程までの魔法使い然とした態度は何だつたのだろう。ああ、もしかして沢富さんはルナと一緒に何かそうなのか……とか一人心の中で泣いた。

「それにしても、外国からの魔法使い……か。私はてっきりこの街にしかしないと思ってたけど 考えてみれば、他所に魔法使いがいても何の不思議もないんだよね。うーん、一体、魔法使いつて何なんだろうね？ 月城くん」

そんなの俺に聞かれても、と思いながら、

「沢富さんだつて、魔法使いじゃないか」

「うん、まあそなうなんだけど。あんまり実感ないつていうか……この力だつて、唐突に使えるようになつただけで、魔法とか言われてもピンとこないし。でも、確かに魔法なんだつて、なんとなく理解はできるんだよ。あはは、おかしいね」笑いながら、沢富さんは少し間を空けて、「……『守崎』がルナと別人なんだとすると、ルナはその守崎夜鈴さんと一緒に行動してる、魔法使いが一人いるつてことだよね？」

「ああ、そう言う事になる」

「その守崎さんが今回の事件解決のために、ルナに協力しているんだっけ？」

「そうだな」

返答しながら、いつの間にか沢富さんがルナを呼び捨てにしている事に気がついた。

「……そつか。それじゃあ、事件が解決されるまではルナは守崎さんの助力を得ている状態だから……こつちが不利、か」

「不利? 『ひつじつ』こと?」

「え? あ、いつご。こっちの話。気にしないで」

「気にするよ。まさか沢富さん、まだ続けるつもりなのか?」

沢富さんの話を聞く限り、『敵』は相当強力だ。だと『ひつじつ』、『てつじつ』、まさか彼女はまだ続けるつもりなのだろうか。

「え? あ、殺人鬼のこと? それなら心配ないよ、もう戦おうとは思つてないから」

「……そうなのか?」

「うん。だつて、あれは無理だよ月城くん。考えてみたけど、『ひつじつ』って対処法が見つからない。相手の正体も解らないんじゃ、お手上げだからね。素直に私は身を引いて、高見の見物かな?」「それでいいのか?」

「うーん、正直に言つちやうと悔しいよ。本当はルナに負けたくはないし でも、向こうが一人で動いてるとなると話は別。『敵』の強さも思い知つたし、ここは引き下がるかな」

彼女が本当にそう思つてゐるのかは解らない。だが、今そつすると言つのなら、俺はそれを信じるしかなかつた。

「……ねえ、月城くん?」ふといつものように、田の前にいる彼女が呟いた。「あのね。今、こんな事を聞くのは野暮かも知れないけど」

「沢富……さん?」

「私さ、あの時の言葉 本気、だつたんだよ?」

どくん、と心臓が跳ね上がる。あの時の言葉、と言つたらあれしかない。思い浮かぶのは、放課後の教室で聞いた

「こんな騙すような事して、拳句に無理やり迫つておきながら、ほんとに今更かも知れぬけど。……私、月城くんが好き。これは、ほんとなんだよ?」

「……それ、は」

「嘘じやない。ずっと、ずっと見てた。気付いて欲しかつた。あの時、月城くんの朝離さんに対する気持ちとかを聞いて、なんだかい

けそうな気がして……本当に、言つつもりはなかつたのに……私、告白して。でもね、あれは嘘偽りない私のほんとの気持ち。さつきああして朝離さんの姿で迫つたのだって、本当は朝離さんのことを探つてゐるんじゃないかと思つて……。」うして月城くんの部屋まで朝離さんの姿でやつてきたのだって、それを確かめるためだつたんだよ?」段々と声に力がなくなつていく彼女の言葉の真意は、いくら鈍感な俺だつて解る。沢富さんは　本当に、俺の事を好いてくれているんだと。「ねえ、月城くん。やつぱりだめなのかな?　私みたいな、猫かぶりで、人を騙すような子で……拳句に意味わかんない魔法使いみたいな私じゃ、月城くんは嫌い……?」

「いや、そんな事は……でも」

俺はルナに対して好意を抱き、果ては告白紛いの事までしている。ルナだつて、俺の事を好きだと言つてくれた。あの夜に聞いた言葉が恋愛対象としての意味だつたのか、ただ兄に対する妹の好意のようなものだつたのかはまだ曖昧だけれど、今の俺には確かにルナがいた。だが　記憶を取り戻してなければ、俺は沢富さんを選んでいただろ。皮肉にも、どうやら俺は惚れっぽい性格みたいだつた。困り果てた性格である。自分を殴りつけくなつてしまつ。

「……やっぱり、まだ朝離さんの事が好きなの?」

「え、あ……いや、そうじゃない」

「ならどうして?　どうして、私じゃダメなの?　やつぱり、私の事嫌い……?」

「嫌いなわけないじゃないか。そりゃ騙されはしたけど……沢富さんはちゃんと本当の事を話してくれたし、紅憐は無事。事件の犯人とだつて全然関係ないんだから。眞実を知つた上で、俺が沢富さんを嫌いになる理由がないよ」

「じゃあ」それだけ呴いて、沢富さんは立ち上がる。テーブルの向かい側からこちらまで歩いてくると、俺の隣に膝をつけて、すっと顔を寄せてくる。「今度は、ちゃんとした私の姿でお願い。キス、しよ?」

そう言って、俺の田の前で瞳を閉じる沢宮花凜。

「まっ……待つてくれ沢宮さん！」た、確かに俺は沢宮さんの事は

好きだけど…… そつぱいのは

.....応えて、くれないの？ どうして？」

「……言へべきなのか、俺か今好きな相手か、誰なのかを
振ると言う事だ。彼女を傷つけてしまうかもしない。でも、それを伝えなければ、彼女はきっと諦めはしないだろう。俺だから、同じ立場ならきっとそうだから。

「…………もしかして、月城くん
それは 他に好きな人がいるの？」

「朝離さんじやないなら、誰？ 誰なの？ 月城くんの心の中にいる人は、誰？」

もへ、いいまできたら誤魔化せない。沢富さんは好きだ。でも、俺はそれ以上にあいつの事を想つていてる。選ばなくてはならないと言つのなら、選ぶしかない。

「……………ルナだよ。俺、あいつの事が好きなんだ」

「たった一日だけださ、気付いたら好きになつてた。惚れやすいのかも知れないけど でも、ルナへの気持ちはそんなちっぽけなものじやないと思ってる。だから」

「…………」せないふと、沢富さんが何かを呟いた。「許せない、あの女…………まさか、一緒に住むだけでは飽き足らずに月城くんの心まで魔法で奪つてしまつなんて…………」「…………」

「うむ、只頃……そこへ。」

「…………月城くん」

可放か放語口調になつてしまひの俺。

「月城くんはね、あの女の魔法にかかりっているだけ。たつた一日でそこまで好きになっちゃうなんておかしいとは思わなかつたの？」確かに異常だとは思つけれど、それはただルナにそれだけの魅力

があつたからで つて言いつか、『あの女』つて。呼び捨てからさ
らに酷くなつてないか沢富さん。

「だからね」

「はい」

「私が忘れさせてあげる」

「……はい？」

がばつ、と押し倒されること一秒。上半身の服を無理やり脱がさ
れるのに、九秒ぐらい。その約十秒間、俺は何をされたのか解らず
に畠然として、

「ちょ、ちょっと待つてくれ沢富さん…」

「待てない。私、本気だもん」

「う、うわ！ それはまずい、まずいって！ 上だけならともかく
下は本気でやばいから ツ！」

なんなんだ、まさかここまで大胆だとは思つてなかつた……！ 紅
憐の姿で迫つてきた時と同じように迫られる俺。まずい、この体勢
は押しのけるのも難しい。ピンチ。俺の上に馬乗りになつている沢
富さんはと黙つと、にたりと笑みを浮かべて俺の顔へと一気に近寄
つて、

「ん……つー」

無理やりに唇を重ねられた。しかも、強引に舌まで突つ込んでく
る。

(「、これは本格的にやばい ツ！」)

つていうか、こんなところをルナに見られたら終わりだ。

「 ん。月城くん、好き……」

さりに田と鼻の先で、頬を真っ赤に染めながらそんな事を言われ
ると もう、なるよくなつちまえ！ みたいな気分にさえなつ
てしまつ。やばい。流れに乗つてしまつのは嫌いではないけれど、
今に限つてそれはマズ過ぎる。……誰か助けてくれ。

「心配しなくても、ここ月城くんの部屋だから。誰もこないし、誰
にも見られない。だから……ね？ 好きなだけ私とくつづいててい

いんだよ？」

「さ、沢宮さん……やめて、くれ」

「やめない。あの女にかけられた魔法が解けるまで、私は月城くんの側から離れないんだから」

くそ、なんて頑固なんだ。これじゃルナと変わらない。この瞬間いや、少し前からだけど、俺の沢宮さんにに対する印象が崩れ落ちてしまった。いやまあ、そう言う女の子も可愛いとは思うけどね？（つて、違うだろ俺　ツー）

する、と、沢宮さんの上着が脱がれる。その下は下着だけで、白い肌がさらけ出されていた。これでお互いに上半身は裸に近い状態。このままだと、本当に取り返しがつかなくなってしまう。

「ねえ、月城くん……私つて、魅力ないかな？」

「う……」

ないわけがない　とは思うだけで口には出せない。その白い肌は本当に綺麗で、まるで汚れをしらない少女そのもの。普段の彼女からは想像もつかないぐらい大胆な事をされているのにも関わらず、何故だかそんな彼女の身体は、沢宮さんらしさを見せているような気がした。普段着やせしているのだろう、胸も結構大きい。ルナとは大違いだ。あいつ実は割と賣乳だし。それに比べると、沢宮さんのそれは女性らしさが溢れていて実に

（……何考てるんだよ、俺）

そこまで考えてふるふると首を振る。もうだめだ。俺だつて男なんだから、こんな事態になつて流れに流されないなんて事は多分有り得ない。このまま俺は、沢宮さんを抱くのか？　いや、抱かれるのか？

「これ、邪魔だよね。それじゃ外すね……」

ぱち、と音がする。見れば、沢宮さんは胸元のそれを外そうとしていた。

「ばつ、ばか！　それ以上はまず　ツー！」

俺が最後の理性を振り絞つて声を上げた瞬間、

がちやり、と。玄関の開く音が聞こえた。

「……え？」

沢宮さんが驚いたように振り返る。この部屋は俺の部屋だ。俺が一人暮らしで使っている部屋に違ひはない。だから、ここに誰かが来る事はない。しかし、それはついこの前までの話だった。俺は考える。

そこにいるのは金髪ロングな義理の妹か。

いとも簡単に不法侵入してくる幼馴染か。

それとも、神出鬼没な黒フードの少女か。

その誰かなの解る。それ以外に俺の部屋に入つてこれるような人物はいない。つまるところ。それが誰でさえ、この状況を見られたら俺は終わるわけで

「何してるのかしら、お二人さん？」

「沢宮さん……？ わ、こ、こ、昂なにしてんの ッ！」

「……、不潔」

まあなんていうか、そこには全員いた。

「私は貴女には絶対に協力しない」

それが沢宮花凜の返答、その第一声だつた。

「どうして？ 理由をお聞かせ願いたいわね、沢宮さん」

「……もう私の名前を気安く呼ばないで、この寄生虫。ついでに月城くんからあと十メートルくらい離れてくれない？」

うわあキレちゃつた……と、俺と紅憐は顔を合わせて咳く。夜鈴はそんな二人を、だがいつもの無表情で黙つて見つめている。いつの間に沢宮さんはルナの事をこんなに嫌つてたんだろう。沢宮さんの挑発じみた言葉に、さすがのルナもキレた。ピキリ、と空気が割

れる音が聽こえるようだ。

「寄生虫、とはわたしも言われたものね……。なに、それ上半身裸でばか兄に迫つていた貴女が言えるセリフ?」

「ばか兄つて誰のこと? 月城くんのこと? だとしたら訂正して。月城くんはばかでもないし、貴女の兄でもないんだから」

「……、なら訂正してあげる。『わたしの』昂で良かつたかしら?」

今の言葉に今度は沢富さんが力チンときたのか、いつもじや間違いなく聽けない、彼女の本音が次々と飛び出してくる。もちろん言われるままで終わるルナではない。互いに罵声に怒声を浴びせ合いながら、しばしの口喧嘩が続く。俺と紅憐は見てられないと、リビングから逃げ出すように俺の部屋までやつてきた。

「……はあ。なんなんだよあの二人。これじゃ話し合いもなにもないじゃないか

「つていうか。いつの間にあんたはあんなにモテるようになつたわけ……?」

誤解だ　とは言えなかつた。なんというか、確かに俺の取り合ひみたいな感じになつていて。はたから觀れば嬉しいけど、實際被害を被つてるので微妙な心境だつた。事の成り行きはいたつてシンプル　俺が沢富さんに襲われていたところに、ルナ、夜鈴、紅憐の三人がやつてきた。沢富さんはルナの姿を見るなり俺の上から退いて、黙つて服を着始めた。俺はルナと紅憐に状況説明を強いられ、

『ここまで来た理由を説明するわ。ちょうどいいから、沢富さんも同席して貰える?』

この一言から、沢富さんの機嫌が最高に悪くなつた。ルナが夜鈴と紅憐を連れてやつてきた理由は、簡潔に言えば真犯人の捜索である。そもそも何故、紅憐と一緒にいるのかというのが不思議だつたのだが

「おーい、瑠奈！ 探したよ、こんな所にいたんだね！」

朝離紅憐は、街の路上でルナの姿を見つけて走り寄った。ルナは振り返るが、そこに何故彼女がいるのか解らない。彼女は今、確か昴の家にいるはずだ。

「……紅憐？」

「瑠奈。ちょっと話があるんだけど、いい？」

一体いきなり何の話だろう、と思いながら、ルナは「ええ」とだけ言つて頷いた。

「あのわ。……瑠奈、本当に魔法使いなの？」

「え？」

「沢宮さんから聞いたんだよ。瑠奈は魔法使いなんだって。それって本当なの？」

「沢宮……？ まさか、わたしと同じクラスの？ でも、どうして彼女がそれを？」

そこで、ルナはハツとする。守崎夜鈴が言つていた『沢宮』とは、確かに彼女の事だつたはずだ。そして沢宮は魔法使いに関わる家系の一つ。つまり彼女にルナの『言葉の魔法』^{ワードオブマジック}は効いていなかつた、といふ事。そもそも『言葉の魔法』^{ワードオブマジック}はその行使頻度から本当にごく僅かな魔力で行使されている魔法だつた。なので、相手が魔法使いならば、その魔法使いの持つ魔力量によつてはこちらの魔力が反発され、無効化されてしまう。対魔法使いの武器として使用できないのは、そう言つた理由があるためであつた。そして、夜鈴の調べで朝離紅憐も魔法使いだと解つた。自分も実際に彼女が死体を跡形もなく焼却しているところを見つけていたから、魔法使いだとは解つていた。だから、こうして自分の事を覚えていた事に不思議だとは思わないが、沢宮花凜でさえそうであつたとは少し迂闊だつた。

「瑠奈、教えてよ。今この街はどうなつてゐるの？ 連続殺人事件に魔法使いが関わつてゐるつて聞いたけど、瑠奈はそれと関わりがあるわけ？」

「……、ちょっと待つて紅憐。貴女、昨日死体を」

「死体？　ああ、うん……確かに見たよ。沢富さんが死んでた。

それで、怖くなつてその場から逃げ出したんだ」

嘘をついている、トルナは思つ。だつて、彼女は確かに見た。昨

日、死体を焼却している朝離紅憐の姿を。だが、

「でも、沢富さんは生きてる」

「……え？　どう言つ事、紅憐」

「今日、あたしの家で会つたんだ。昨日死んだように見えていたのはフェイクで、本当は死んでなんかいなかつたんだよ。あたしが逃げ出したあと、沢富さんは自分の魔法であたしそつくりの姿になつて、その死体を処理したつて。今日の朝、死体を見に行つた時になかつたんだけど、それはつまりそう言つ事だつたんだ」

紅憐の言つている事が本当ならば、紅憐は犯人ではない。死体がフェイクだと言うのがいまいち良く解らないが、そうなると沢富花凛にも詳しく話を聞く必要がある。

「……その、紅憐そつくりの姿になる、つて言つのは？」

「あ、うん。それが沢富さんの魔法なんだつて。他人と同じような顔や姿に自分を変装できるつて言つてた。あと、他人そつくりな人形を作ることもできるつて。あたしが見た死体はその人形だつたんだ」

「ねえ紅憐。今、昂はどうしてるの？」

「え？　ああ、それがさ。あたし昼間に一度家に帰つたんだけど、その時沢富さんが家にいて　それから多分氣絶させられて、あたしさつきまで寝てたんだよね。だから、昂なら今は家で一人なんじやないかな」

「それはおかしいのよ紅憐。わたし知つてるの。貴女が一度家へ戻つてから、その後もずっと、あのばか兄は朝離紅憐と一緒にいるのよ」

「それじゃ、まさか」

「ええ……、多分それはあなたの姿をした沢富花凛だわ。急ぎまし

よう紅憐、何だかいやな予感がする……！」

そうして、ルナは紅憐と共に月城昴の住むマンションへとやってきていた。入り口付近に見慣れた顔がいる。守崎夜鈴だった。

「守崎さん！ ちょうどいいわ、貴女も来て。……あ、もしかして今の昴の様子、解つたりする？」

「……解らない。『鈴の呪縛』はすでに解いているから」

「そう、なら尚更ね。一緒に行きましょう守崎さん。昴が危ないかも知れない」

「わかった」

こうして夜鈴が加わり、紅憐と夜鈴は互いに自己紹介をする暇もなく、マンション内部へと突入。そのままエレベーターで一気に七階まで上がり、昴の部屋までやってきた。部屋のカギは、紅憐がスペアを持っていていたので楽勝だった。そんな紅憐は、特に誰も聞いてすらいないのに、

「なんか昔のよしみで持つてるんだよね。別に深い意味はないよ」と言い訳っぽく弁明した。そんなわけでドアを開いて中へ入った三人は、ナイスタイミングと言つべきか 沢宮花凜に、別の意味で襲われている月城昴を発見した。

「ここまで来た理由を説明するわ。ちょうどいいから、沢宮さんも同席して貰える？」

事の成り行きを聞き終わったルナは、ある程度納得した後、唐突にそんな事を切り出した。この場にいるのは全員合わせて五人。

月城昴 不憫にも両頬に張り手の痕が一つずつ。それぞれルナと紅憐のものである。この中で一番の被害者。

ルナミス＝サンクトリア　昴の義理の妹で、この場を仕切るよううにそう言い出した『月光の聖女^{ムーンライトプリンセス}』と呼ばれる魔法使い。

守崎夜鈴　この街で起きていたる事件の解決の為、ルナに付き合つている『幻想遣い』と呼ばれる魔法使い。

朝離紅憐　昴の幼馴染にして、魔法使いの素質を持つと思われる少女。

沢宮花凜　昴のクラスメイトであり、ルナを明らかに敵視している『人形遣い』と自負する魔法使い。

そんな五人を集めて話をすると言う事は、確実に魔法使いに関する話だ。それは、ここにいる誰もが恐らく理解していた。

「まず、話を聞く限り沢宮さんも紅憐も、この街で起きていたる事件の首謀者ではない。真犯人は他にいる。さらに、沢宮さんはすでにそいつと一緒に戦っている　　そうよね？　沢宮さん」

「……ええ」

「ふむ。となると、わたし達はとんだ勘違いをしていたってわけね。でもこれでようやく色々と見えてきた。犯人を誘き寄せる手段があるなら、あとは簡単よね。誘き寄せて倒せばいいだけの話なんだし「ルナがいとも簡単そうに」そう言い放つのを見て、花凜は顔をしかめた。

「そんな簡単じゃないと思うけど。私は確かに一戦交えたけど、かなり強かった。とても敵う相手だとは思えない」

大分機嫌が悪いのだろう、花凜は口調を尖らせてそう言った。だが、そんな事は気にしていないと言う風に、ルナは続ける。

「沢宮さんが弱かつただけかも知れないわ。わたしと夜鈴、二人でかかれば確実よ」

どうしてそう言い切れるのか解らない、と言った顔で、花凜はルナの言葉に返答する気も失せたのか黙り込んだ。この辺りから、場の空気が不穏な方向へと流れ始める。

「とにかく。まあ一步譲つてその殺人鬼が強力な魔法使いだとしましょう。それなら仲間は多いほうがいいわ。……ねえ、沢宮さん

わたし達に、協力する気はない？」

以上、回想終わり。俺と紅憐は何度目だか解らない溜め息をついた。

「……にしても、これからどうなるんだる。沢富さんは、瑠奈ううん、ルナミス＝サンクトリアだつけ？ 彼女……ルナには絶対に協力しないだろし。でも、そうしないとなると、ルナは守崎さんと二人だけでこの事件の犯人と戦うことになるんでしょ？」

紅憐はさぞ不安だと言わんばかりの表情と声色でそう呟いた。確かに、それはいくらあの一人だからといって心配だ。俺は既に彼女達の強さを知っているからまだ不安は少ないだろうが、それを知らない紅憐は本当に不安なのだろう。

「俺にも何か出来る事があれば……な。実際はただの足手まといにしかならないって解つてるから、余計にイライラする」

「だめだよ、昴。あんたはただの一般人なんだから、こんな事に関わっちゃダメだって」

紅憐はそう言うが、しかし 見てるだけなんてのはいやだつた。放つて置く事は、俺自身が許せないだろ。何も出来ないと解つても、何かをしたい。この俺に出来る事があるなら。

「なあ紅憐。それなら、お前はどうして沢富さんの力になろうとしたんだ？ お前だって俺と立場は同じじゃないか。危険なのは解つてただろ？ それなのにどうして」

「それは……」

「放つて置けなかつた、……違つか？」

紅憐は黙り込む。恐らく団星なんだろ。

「俺だつてそうだ。ルナも夜鈴も、沢富さんだつて放つて置けない。もちろんお前もな。だから、何も出来なくたつて何か出来る事を探す。それに、危険なのはこの街に住んでるつてだけで一緒にねえ

か

「……どうして、昂はそこまでするんだひつね。いつも思ひなび、あんたちよつとお人よし過ぎ」

「お人よし、ねえ。ちょつと違つ気がするけどな……」

結局の所、俺はただ目の前で誰かが傷付くのを見過さすのが許せないだけだ。自分の知り合いがそうやって傷付くなんていやだ。見たくもない。これはただの俺の独りよがりで、お人よしとはちょっと違う気がする。

「ま、でもあんたがそう言つならあたしもそうだよ。今回のはちょっと目を瞑れないかな。沢富さんは何だかんだ言ってまた『敵』と戦いそうで危なつかしいし、かといってあれじやアルナに協力するとも思えないし 誰かが側にいてあげないと、ね」

「なんだ。お前、沢富さんみたいなのがいいのか？」

「……は？ なにそれ、どゆこと？」

俺がそれだけ言つと、紅憐は本氣で意味が解らないと言つた顔で目を丸くさせながら言つ。

「え、だつてお前女の子好きじゃねーの？ 一年前の言葉、一応まだ覚えてんだぜ。『あたし男に興味ないから。付き合いたいなら女になつてよ』だっけ？」

「……、あんた。まさかあれ……本気にしたの？」

「え？ いや本気もなにも……え？」

紅憐は飽きたような表情で、

「あのねえ、言つとくけどあれただの『冗談だから』つーかあんたも冗談でしょ？ こきなりばかみたいな事言つから、適当にあしらつただけなんだけど」

「……お、お前。それはマジテスカ？」

「マジですか？」

「いや、あの。……俺こそ、あれマジだつたんですけど」

瞬間、凍つたように空気が固まつた。俺の部屋の静寂とは裏腹に、洒落にならないくらいの口喧嘩がリビングから聞こえてくるが、そ

れが聽こえなくなるくらいの空氣。なんていうか、えーと。

「……へえ。そうだつたんだ」すると、突然 紅憐がにたりと不気味な笑みを浮かべて呟いた。「なんだ、そつかそつか。昂つてばあたしの事。ふーん、昂があたしの事をねえ。……うん、なんていうか、その。ごめん」

「うが ツ！ ごめんじゃねえよこのばか！ あのなあ、俺があの後どれだけ思い悩んで涙流して後悔したか解るか！ 人生で初めて告つた相手が同性しか愛せないだなんて言われて、それつくりジンクスにさえなりかけたつづーの！」

「そんな事言われても……さすがにあれじや、勘違いもするつて。なんだつけ……『なあ紅憐、とりあえず俺と付き合つてみねえ？』だつたつけ？」

「こいつは古い話を……いや、俺もか。

「しようがないだろ、初めてだつたんだし。しかも相手はお前だし。幼馴染だし。今更つて感じじやねえかよ」

「そりや、それは解るけど。……あー、そつか。そりや気付けなかつたなー。ううん、こりやあたしの人生最大のミスだね」

「なんでお前の人生最大のミスなんだよ。こっちが言いたいって、それ

「ん？ まあ、だつて……」紅憐は何故だか急に頬をほんの少し紅潮させて、「今更だけど あたしも昂の事、好きだつたから」

「……は？」

「一度も言わせないでよ。だーかーらー、あたしもあんたの事好きだつたんだつて」

え、何それ告白？ 告白ですかよりにもよつて一年後の今日？

「お前……それはないわ。それはねーよ。じゃあなんだ、実は一年前の俺達は見事に両思いでしたーつてことかよ？」

「だねえ。あはは

笑い所なのか、これ。俺も笑うべきなのか。

「なんだよ……。うわ、シケる……。俺の青春時代……」

「「」、「ごめんつて。ほ、ほら。別に　　その、さ。今からでも遅くはないわけだし」

「はあ、今つてお前……お互いい好きだったのは一年前の話で　　」

「そうだ。俺の初恋は一年前、ただの冗談でとっくにぶち壊しにされてるんだ。それを今からでも遅くないって　　あれ、それってどう言う意味だ？」

「だから　　」紅憐は今度こそ、耐えられないといった表情で顔を赤らめて、「あたしは、今でも昂のこと……好きだから」

守崎夜鈴は、目の前で口論する一人の少女を見つめながら、無表情を装っていた。実際、内心では正直な話早く終わってくれないものかと心底思っている。と、いうか逃げ出した昂と朝離紅憐について行けばよかつたのかもしない。今ではもう、立ち去るタイミングさえない。しかしこの一人、放つておいたら何をやり出すか解らない。確かに一人くらい、こうして監視役が必要なのかも知れないけれど。いつもそう言つ役目は私だな　　なんて、柄にもなく心の中でぼやく夜鈴だった。

「とにかく、もうこれ以上月城くんに付きまとうのはやめてよ。月城くんは私が貰うんだから！」「何そのエゴ？　いい加減にしてよね雌豚。貴女みたいな性欲の塊にわたしの昂を預けられるわけないでしょ？」「め、雌豚　　ツ！？　この寄生虫が、よくもそんな言葉を吐けるもんね！　どうせ月城くんのことだって、貴女の非人道的な洗脳魔法で無理やりそう仕向けたんでしょう！」「…………なにそれ、心外にもほどがあるわ。それにそれを言つなら貴女の魔法だって十分非人道的だと思うけれど？　他人の姿になつたり、他人そつくりの人形を作つたり。ばかみたい。それなら家にこもつて、昂の人形でも作つて一人で自慰行為にでもふけつとけば？」「こ、この……！」さつきから聞いてれば下品な言葉ばっかり！　雌豚で性欲

の塊なのは貴女のほうじやないの！？」「言つてくれるわね。貴女みたいな弱小魔法使いが、このわたしに楯突こうなんてのがまずそもそもの間違いだつてことに気付きなさいよ」「弱小？私が弱いつて何で言い切れるの？そんなに言つなら今ここで決着をつけようよ」「へえ、面白いぢやない。いいわ、受けて立つてあげる。ま、どうせ一分も掛からずにわたしがボコボコにして終わりだらうけど？」

言い合いながら一人は立ち上がり、今にも本当に殺し合ひを初めてしまいそうな雰囲気だつた。夜鈴はそろそろか、と思いながら二人の間に割つて入るように、

「……いい加減にして。ここは昴の部屋。それに、今ここで貴女達が潰し合つたら、今回の事件の解決はどうするつもり？」

「う、と二人は同時に夜鈴を見て呟く。なんだこの二人、つまりそう言つ事か」と夜鈴は理解する。

「でも、守崎さん。こいつは仲間にしてもいつ後ろから攻撃されるか」

「私がいつ仲間になるつて言つたの？心配しなくて仲間になんてならないから。寄生虫の力なんて借りなくとも、こんな事件」

「黙つて」

ぴしゃり、と。夜鈴が今までにないくらい怒氣のある声で言い放つた。それには、さすがの一人も驚いて、言葉を失つてしまう。「今ここで貴女達が口論するのは構わない。でも事件の解決に支障が出るようなら私は見逃せない。それに、そんな事をして昴がどう思うか、考えたら解らない？」

「……ふう。そうね、ちょっと頭に血が上つてたみたい。ここでこんな雌豚を叩きのめすために、限りある魔力を消費するなんて、無駄にもほどがあるものね」

「……ルナ」ぴしゃり、と軽く怒氣の籠つた聲音で夜鈴が言い放つ。「私はもうこれ以上、貴女達がいがみ合つてゐる姿を見るのは耐え切れない。私だって我慢出来ない事はある。……もしそうなつてしま

まつたら、さすがの私も加減が出来ない」「

うわ怖っ、ヒルナは心底思い、それ以降喋る事はなくなつた。夜鈴は次に花凜のほうへ顔を向けると、静かに呟く。

「沢宮さん。貴女が本当に昂の事を想つているのなら。一人で喧嘩している場合ではないことぐらい、解る?」

「……そうですね。私がちょっとばかでした。ルナの事は嫌いだけど、今は私情を挟んでいる場合じゃないですから」

花凜の言葉に夜鈴はこくりと頷いて、

「そう。解ればいい。一人とも、無理に協力し合えとは言わないけれど。この事件が終わるまでは、とりあえず一時休戦」

「……解ったわよ。ふん」

「意義ないです。月城くんのためですから」

「オッケー。それじゃ、チームを分けることにするわ」

「喧嘩が終わったのか、唐突にルナが俺の部屋までやつてくるなり俺と紅憐をリビングまで呼び出すと、そんな事を言い出した。結局、紅憐の言葉の真意を聞き出すことは出来なかつた。まさかとは思うが、あいつはずつと俺の事を好きだつたのか。いや、でもよりもよつて紅憐がなあ なんて考えながら、俺はルナの話を聞いている。

「とりあえず、二つに分けるわ。わたしのチームと沢宮花凜のチームね。敵は強力な魔法使いよ。油断して掛かれば負けてしまうかもしないし、策は多いほうがいいわ。だから、ここは団体での戦闘行動における基本『『陽動』と『奇襲』を用いようと思つ

つまり、まずチームを二つに分ける。

『『陽動』 敵を誘き出すためのチーム。

『『奇襲』 誘き出した敵を倒す事だけに専念するチーム。

ある程度のチームワークが必要になるだけに、俺は少し不安を隠

せない。ルナと沢宮さんの先程までの仲を見ていれば尚更だった。「まずは『陽動』チームだけど、これは沢宮花凜に担当して貰う。一度誘き出すことに成功しているのなら、一度目だって出来るはずよ。何か意義はある?」

「……特には。それで、具体的な作戦内容は?」

なんと、沢宮さんは呆気なくルナの要望を受け入れた。この短い間に何があったのだろう 仲直りをしたわけではなさそうだから、とりあえず一時的なものなのだろうか、と考える。

「まず『陽動』チームが敵を人目のつかない場所 そうね、西条公園辺りがいいから。あそこは夜になると人がいないし。そこには誘き出して、わたし達『奇襲』チームが敵の不意をついて倒す。これだけよ。シンプルで解りやすいでしょ?」

「……ふうん。逆にシンプル過ぎて、相手にバレるんじゃないの?」

「それは解らないけれど、少なくとも今回の事件を見る限り、敵は複数の魔法使いを相手に戦った形跡は皆無。つまり、わたし達みたいなのを相手にするのは初めてなのよ。それなら、複数で攻める一番効率の良い方法を使つたほうがいいわ」

「ま、いいですけど。それで、チームのメンバーは?」

「そうね。『陽動』チームには沢宮花凜と、その率いる人形。貴女はわたし達の姿をした人形を遣つて、敵を欺く。そして『奇襲』チームはわたしと守崎さん。基本的に気配を隠し、姿も消せる守崎さんが奇襲攻撃の担当で、わたしはバックアップに回らうと思つてゐる。どうかしら」

ルナがさくさくと作戦を説明していく中、俺 恐らく紅憐もだは、何も力になれることがないのかと考える。ルナの説明を聞く限り、俺と紅憐ははたから戦力外扱いだ。これではただの蚊帳の外である。

「私は構わないけれど。……沢宮さんは、どう?」

「別にいいですよ。本当は一人でやるつもりだつたけど、月城くんのためだと思えば、これくらいの屈辱は甘んじて受けます」

「……そう」

見る限り、どうやら夜鈴と沢富さんは仲が良いように見える。沢富さんが嫌いなのはあくまでルナだけのようだった。ていうか、俺のためつて何だ？

「よし、作戦決行よ！」

ルナが立ち上がり、そう言って声を張り上げる。結局、俺と紅憐は何も出来ることが決まらないまま、作戦タイムは終了してしまった。

西条公園、その中心部に位置する噴水広場。沢富花凜は複数の人形を精製し、そこに配置する。噴水の前に立つのは三体。ルナ、守崎、そして自分の三つである。三体の人形が、まるで本物の彼女達のように立ち竦んでいた。術者である自身は身を隠し、出来る限りありつたけの魔力を人形に注ぎ込む。昨日はこれで、膨大な魔力を感知したあの殺人鬼が現れた。誘い込まれたと承知の上でやつてきた様子だつたし、あの殺人鬼は恐らく戦いを望んでいる。だから来るはずだ。危惧など必要ない。必要なのは、迫り来る殺人鬼との戦いへの心構えだけ。時刻はもうすぐ今日が終わりを告げる程度のものになつていた。薄暗い公園にはかすかな電灯の明かりと、空に浮かぶ月の光だけ。これから始まるのは、正真正銘 魔法使い同士の殺し合いだ。相手に加減と言つ言葉は求められない。ならば、自分は自分でやれるだけの事をするだけだ。それについても良く考えると、私はそれなりに魔力感知が出来るほうだと思う。魔法が行使された時 ようするに体内から魔力が外側に放たれた時なら、それがどんな極僅かの魔力であつても感じ取れる。だが、それも自分の周囲での話だ。いくら強大な魔法が行使されたと言えど、実際に感じ取れるのは恐らく自分の周り、半径十メートルくらいだと思う。しかし、あの殺人鬼はかなり敏感に魔力を感知している。

恐らく自身の意思で、だ。そして、ルナや守崎さんはあまり魔力を感知するのが上手だとは思えない。感知さえ出来るのなら、今回的事だつて簡単に見破れたはずなのだから。魔法使いにもそういう風に感知しやすい人としにくい人がいるのだろう。それがイコールとして強さに比例するかどうかは別として、敵は魔力を感じ取りやすい相手だと言うのは確かだつた。今回の『陽動作戦』私の『陽動』は成功するだろう。しかし、本命である『奇襲』は成功するのだろうか？解らない。もし失敗したらどうなるのか。そうなつたら作戦も何もない、総力戦になるかもしない。

（あの殺人鬼の魔法の正体さえ掴めれば、なんとかなるかも知れないのに……）

それは、目に見えない攻撃。触れる事なく私の人形をバラバラに切り裂いた魔法。どうすればそんな事が出来るのだろう。念じるだけで人間をバラバラにしてしまえるのだろうか？ここで少し後悔する。ルナはともかく、守崎さんならもしかすれば何か掴めたかもしれないのだ。作戦会議の時にでも聞いておけばよか

「なあ、オマエさ。もしかして一度も同じ手が通用するとでも思つてんの？」

すぱん、と言つ音がする　　気が付けば、左腕がものの見事に切斷されていた。

「挨拶代わりだ。氣に入つて貰えたか、魔法使い」

「い、あ……いやああああああああああああああああああッ！」

あまりの気持ち悪さに、悲鳴を張り上げる。背後に立つている人物に振り返つて、絶叫しながらその顔を凝視する。間違いない、こ

いつが『敵』の殺人鬼

「あのさア。一応言つておくけど、あの人形じやもう俺は欺けないぜ？　なんてつたつて匂いが一緒だ、いくら姿形を精密に作り上げたところで、通う魔力がおんなじじやあバレバレ」

「ぶおん、と風が震える音がする。音が聞こえたのと同時に、次は右腕が無くなつた。

「 ッ！」

声にならない悲鳴。痛みなんてものを超越した、腕がない不快感。両腕はいともあつさりと、地面に落ちて鮮血を撒き散らしている。

「次はどこがいい。」こはセオリ一通り、脚か？」

また風の音。今度は両足がいつぺんに切り落とされる。四肢をなくした身体は不自由にも地面に落っこちる。広がる血。辺りが真っ赤に染まっていく。だけど、私はここでようやく理解した。この殺人鬼の魔法を。仕組みさえ理解してしまえば、後はなんとかなる。「ああそうそう、一応言つておくけど仲間はこねえぜ？俺の魔法でオマエの悲鳴は向こう側まで届かないようにしてある。ま、本来は殺す時の悲鳴を聽こえないようにするために使うんだがな……複数の魔法使いを相手にするつてのは初めてだが、こいつ言つ風に使うこともできるわけだ」

作戦の形式があだとなつたのか。人形だけを立たせ、この私はこうして隠れていたことが裏目に出てしまつた。こうなつてしまえば、『奇襲』チームの参戦は期待できない。だが、それならそれで、やつてやる。こうなつたのは、私があのルナの力を借りずとも殺人鬼を倒せるチャンスなのだと思えば良い。

「……貴女の魔法　『風』ですね？」

四肢を失つた醜い姿で、地面に転がりながら目の前の殺人鬼に言い放つた。

「へえ、良く解つたな。……そつ。オレの魔法は風を操れる。オマエの身体を切り裂いたあれは、一般で言う『カマイタチ』つてやつで、悲鳴をふさいだのはただ空気を振動して伝わる音を、空気の壁を作り出して止めただけだ」

風、というよりは空気を自在に操る魔法　五大元素の一つである『風』系統を操る魔法使い。それがこの殺人鬼の正体であつた。「なるほど、説明感謝します。これで、心置きなく対策が練れる」「は。今のオマエに何が出来るつて？　大体、四肢を失つておきながら……」

それだけ言って、殺人鬼ははつとした表情になつた。でも、それはさすがに気が付くのが遅すぎる……！ 私は人形との意識リンクを解除して、本体へと意識を戻す。

「チュックメイト」

そして。私は、殺人鬼の背中に長い剣を突きつけた。第三の魔法『^{ワークス}物質精製』によつて作り上げた、私の得物である。

「……なるほど。これでさえ『人形』だつたつてわけか？」

「そう。貴方が魔力に対し敏感だと言うことは解つてましたから。あの噴水上に置いていたのは一つ目のフェイク。ここで隠れていたように見せかけていたのが二つ目のフェイク、つてこと」

チッ、と殺人鬼は舌打ちする。

「魔力の質でさえコントロールできるなんてな。なかなかどうして、今までに会えなかつたタイプの敵だ。嬉しいぜ。だが――」

「ふと、背筋が凍る。何故だか解らないが 嫌な予感がした。」

「オマエ、何か勘違いしてないか。……これは殺し合いだ。ただの力比べじゃない、正真正銘の命のやり取りだ。その点で言えばオマエは今まで会つた魔法使いの中じや、一番アマい」

「ぶわ、と。風が殺人鬼の周囲を包み込むように巻き上がり、私はその勢いで吹き飛ばされてしまった。

「 背後を取れば身動きができるとも思つたのか、ド素人。オマエはさ、俺の背後を取つた瞬間、ソイツで『口』を一突きしておぐべきだつたんだよ」

「言いながら、自分の左胸を親指で差す殺人鬼。迂闊だった。そして、甘かつたのだろう。この男の言う通りだ。私はなんというミスを犯してしまつたんだ

「さて、と。ま、確かにオレは視覚で認識できねえとソイツの身体を切り刻むことは出来ない。だからまあ。 今度こそ、本当に終わりだぜ。魔法使い」

やられる、と思った。今度こそ本当にこれは自分の身体だ。人形ではない、本体である。あの身体を切り裂く空気の刃を食らえば、

さつきの人形のときと同じことになるに違いない。相手の魔法の正体は把握した。何か、対策を

ぶおん。

風の唸る音が聴こえ、思考が途切れ、瞳を閉じ　しかし、切り裂かれる痛みが身体に走る事はなく。

「……なんだ、オマエ？」

閉じた瞳を開くと、そこには見覚えのある少女の背中姿。

「助つ人だよ」

朝離紅憐が、立っていた。

「助つ人、だと？ 魔法使いだな。　オレの魔法に何をした？」

「さあ？ 別に。何もしてないんじゃない？」

「ウソを吐くな 確かに魔力の動きを感じた。オマエ……どうやつてオレの魔法を消した？」

「君は鋭いなあ。あたしは初心者だから、そんな事わかんないや。……でもまあ、何かをしたってのは本当だけど それを君に教える必要はまったくないと思うよ？」殺人鬼に対し不敵に笑う朝離紅憐は、まるで本人だとは思えない口調でそう言つて、「沢宮さん。とりあえずこいつさ、あたしだけで楽勝みたいだから。ルナと守崎さんのどこまで、走れる？」

「え、ええ……でも」

「何、ちや、ちや言つてんだよ　！」

殺人鬼は頭にきたのか、こちらへ目掛けて『風の刃』^{カマイタチ}を放つ。だが、

「だから効かないって。……ごめんだけど、あたしとあなたの相性は最高に悪いみたい」

朝離さんは何もしていない。いや、見た目では何もしていないだけで、確かに魔力を行使しているのが解る。　まさか魔法を使えるのか？

「ま、まおっとしてないで。早く逃げてよ沢山さん。」これはあたしに任せで

「わ、解りました……すぐに守崎さん達を呼んできますから……！」
それだけ応えて私はその場から逃げ出すように立ち去った。背後からの攻撃はない。恐らく全て朝離さんが防いだのだろう。朝離紅憐まさか、彼女に魔法使いとしての自覚があつたなんて。

「ふう、行つたみたいだね。ま、この様子じゃ守崎さん達が来る頃には終わつてそうだけど」

あたし 朝離紅憐はそう挑発的に咳いて、殺人鬼に振り返る。
男はただ、ワケが解らないと言つた表情であたしを見つめていた。
「なんなんだよオマエ……！ どうしてオレの魔法が効かない？」
「言つただろ、相性が悪いって。あたしを、こう見えて結構短気だから。そろそろ終わらせちゃつてもいい？」

「ツ……！」殺人鬼は魔法を使ふする。馬鹿の一つ覚えみたいに何度も『風の刃』^{カマイタチ}を連発し、あたしはそれをことごとく潰す。

「もう飽きたよ殺人鬼さん。これが殺し合いだつて言つのなら。殺されても、文句は言わないよね？」

あたしはそれだけ言つて、殺人鬼に踵を返す。

「おい、オマエ……どこに行くつもりだよ……！」

「え、だつて」あたしは振り返ることなく去りながら、「もう終わつてるからね」

そして、背中越しに、声にならない悲鳴を聴いた。

朝離紅憐が魔法を使ふ出来るようになつたのは、つい数時間前のことだつた。しかし、彼女が自身を魔法使いだと認識したのはそれ

より以前、沢宮花凜の部屋で話をした時。

「この街には、私が調べる限り三つの魔法使いの家系が存在します」

沢宮花凜は淡々と、この街に住む魔法使い達の話を始めた。

「私が知っているのは、この街の魔法使い達を統制していると思しき家系である『守崎』、それと過去から親密な関係を持つていたらしき『沢宮』と『朝離』。他にもいるのでしょうか、私にはこれだけ調べるので限界でした」

「この街に潜む魔法使い 現実的に考えれば有り得ない存在が、こんな身近にあるとは思わなかつた。

「『守崎』は置いておくとして、その他の一いつの家系。これはもう、言わなくとも解ると思いますけど、私の実家である『沢宮』、そして貴女……『朝離』の家系です」

「……それで？」

「はい。残る『守崎』ですが、正体が掴めません。存在自体は解つてゐるけれど、その中身まで手が出せない。私は、瑠奈さんがその『守崎』ではないかと疑つてます」

「瑠奈が？」

「ええ。彼女も魔法使いなんです。どんな魔法を扱うのかはいまいち解りませんけど、恐らく他人の意識を操作する類のもの……。それも、無い事がある事だとと思い込ませるものだつたり、記憶を失わせるものだつたり」

記憶喪失にする魔法、と言つ事は、昂はその魔法にかかつてしまつた？ と、紅憐は考える。

「でも、それじゃあどうしてあたし達にその魔法は効いてないの？」

「それは恐らく私達が魔法使いの血を受け継ぐものだから。身体の中に秘められた魔力の影響で、瑠奈さんの魔法が効かなかつた」

そう考えるのが妥当ですね」

「……続けて」

「はい。そもそも、私だつて昔から魔法使いだつたわけではないん

です。ほんの少し……一ヶ月くらい前に、とある男性に会いました。

その時、私は一瞬で自分が魔法使いなんだと自覚したんです」

そう言つて、沢宮花凜は自分が魔法使いになつた経緯を語り始めた。この街で起こつてゐる連續殺人事件の犯人を逃がしたこと。その場で気味の悪い男に出会い、気が付けば魔法使いになつてしまつていたことを。

「私の魔法は、主に『土』を利用して形のあるものを精製するというものです。これも、魔法使いになつた瞬間から何故か理解していました。まるで、昔から知つていたかのように。あと、例外として人体　人間や動物の『肉体』、あとは一部の『物質』を自在に変化させる事もできるみたいです」

「なんだか、あたしのイメージとはまた違うんだね、その魔法っていふのは」

「……でしょうね。と言つても、これは私の魔法と言つだけで、魔法使い個人によつて扱う魔法の種類と言つのはまったく異なつてくるみたいですけど……」

「ここまで来ると、さすがにちょっと話が突拍子すぎて信じたくても信じられないな」

「それは解ります。ですけど、実際に私は魔法を扱える。そして、

朝離さん　貴女にも確實にその素質が、魔法使いの家系に生まれた血が眠つてゐるはずなんですよ」

私　沢宮花凜は、逃げるよつに走る自分に對してこれまでにないほどに憤怒していた。朝離さんに任せた事はまだいい。彼女がどう言つ経緯で魔法を使つ出来るようになつたのかは知らないが、あの殺人鬼の魔法を一切にして無効に出来るよつた相性を持つ魔法を使える　それだけの事実があれば、彼女があれの相手をするのは至極当然だ。その点に関して特に負い目を感じてゐるわけではない

し、問題はそこではない。私があの殺人鬼の扱う魔法を見事看破できたと言つのに、何も出来なかつた。相手の正体さえ解れば対策なんて簡単だと頭で思つても、実際は何も思いつかなかつた。なんて体たらく。あの時、背後を取つた時に致命傷を与えなかつた事と言い、私はどうして詰めが甘いのか。実戦慣れしていないと言えば聞こえは悪くないが、それはただの言い訳に過ぎない。私は、一時でも殺し合いに参加していたのだ。魔法使い同士の、互いの魔法をぶつけ合う殺し合い。魔法使いとなつてまだ一ヶ月程度だけど、それなりに自分の納得がいく魔法を作り出せたし、結果も出してきた。

第一の魔法『人形精製』で作り出す人形は、どこまでも精密で完璧さを誇る自慢の人形だし、

第二の魔法『擬似変装^{トレース}』によつて自らの肉体や服装を変化させ、他人に偽装する事だつて、姿形だけではなく、中身もそれなりに真似が出来るようになつてきた。

第三の魔法『物質精製^{ワーカス}』の精度だつて悪くない。自分が思い描いた物をきちんと作り上げる事が出来る。

だと言つのに、どうして私は、こうしておめおめと逃げているんだろう？

「……ああ。そっか」

そこまで考えて、私はようやく一つの結論に至る事が出来た。どれだけ上手く魔法が使えるといつても、私は結局その三つの魔法しか扱えない。つまり、相手の魔法の正体が解つたところで、それに対応した魔法なんて呪嗟に使えるわけがなかつた。

「は……はは」

なんて無様。結局、私はただの初心者だつたと言つ事か。朝雞紅憐がただの偶然、相性の良さでの殺人鬼と対峙できているのだとしても、それが何故か今は少し羨ましかつた。

あたし 朝雞紅憐がその男と初めて出会ったのは、沢宮花凜の作り上げた死体を偶然発見し、逃げ出した後だつた。もうすぐ自宅に到着する、その道端にその男はいた。見るからに身体の弱そうな、どちらかと言えば頭を使う人間のような印象を受ける。クラスに人はいそうな眼鏡生徒みたいなイメージ。しかし、年齢は外見だけで見ると自分より一回りほど上に見えた。

「……だ、誰？」

あまつでさえあんな死体を目撃した後だ、あたしは自然と警戒心を強める。まさかこの男が殺人犯とは思えないが、しかしこの人に間だとは到底思えない何かを感じ取つたのである。

「お初にお目にかかるよ、お嬢様。見たところ逃げているようだけれど、何かあつたのかな？」

なんだこいつは、と思う。だが口が開かない。何か目に見えない
重圧感^{プレッシャー}を押し付けられている そんな気がして。

「……ふむ。死体でも見たような顔だね？」

「 ッ！？」

「大丈夫、安心していいよ。死体はもうあそこには無い。目撃者は君だけだ。アレは処理すべき人間が処理したからね」

今、この男は何と言つた？ まるであたしが見てきたものを知つてゐるかのような いや、違う。知つてゐるのだ、この男は。あの死体の事も。あたしがそれを目撃し、逃げてきたことさえも。

「そんな疑うような眼をしないでくれ。……いやなに、僕も『監視者』なんて役割を担つていて、知りたくないことも知つておかなくてはならなくてね。舞台の準備は最終段階に入つていて。あとは君だけさ。全てが目覚めた時、ようやく幕は上がる事になるのさ」

「魔法……使い？ まさか」

「そう、お察しの通り。僕が沢宮花凜の魔法使いとしての『回路』を開いてあげたんだ。もう話は彼女から聞いているね？ それならもう知つてゐるはずだ。君もこの街に根付く魔法使いの血筋を引く

者の一人なんだよ！」

この男が、沢富さんが言つていた氣味の悪い男か。確かに氣味が悪いという点は同意見だ。何か得体の知れないものをこの男から感じる。これ以上この場所に留まつていてたくないぐらいに。出来る事なら早く家に帰つて部屋でベッドに籠りたい気分だった。

「とにかく今日は待ち合わせの約束をしにきたんだ。君がもし、明日の夜まで生き延びる事が出来たら、夜の十時にあの路地裏まで来るといい。その時、君に『力』を授けよう」

「生き……延びる？ それってどういう」

「それくらいは自分で考え、悩んでくれよ。そうでなくては意味がない。そう、この戦いに参加するというのなら、それ相応の覚悟を示して貰わないと。なんてつたつて君はあの沢富君とは違う」

何かを言いかけたまま、男はその場から踵を返し、立ち去つた。

これ以上何かを聞きだせるとも思えなかつたあたしは、やりきれない気分の中、その場から走り出した。生き延びる事ができればそれはつまり、生き延びる事が出来ない可能性があると言つ事。あたしは、まさか誰かに命を狙われている…………？ と、そこまで考えて氣付く。先程言つていたあの男の言葉、

『死体はもうあそこには無い。目撃者は君だけだ。アレは処理すべき人間が処理したからね』

目撃者はこの携帯を拾い上げてその場から逃げ出した自分だけ。そして、それを処理した者がいる。

『あ、は……はは。なんだ、そう言う事か』

つまりもう巻き込まれていたのだ。この魔法使いだなんていう馬鹿げた存在達の戦いに。沢富さんを殺した犯人、それがこのあたしを狙つっている。あの男はそう警告し、もし一日逃げ切る事が出来れば 逆に言えればこのまま一日生き残り、この戦いに自ら参加する勇気があれば、このあたしにその戦いに参加するに相応しい力を与えよう、と言う事。

なんてことだ。あたしはすでに、その選択肢を選ぶ権利すら失つ

てしまつていいだなんて。生きて戦うか、死んでしまつか　そんな理不尽な選択肢は、もはや二択とは言えない。一方的な、こじつけるような悪意のある強制だ。　生き延びるしかない。ひとまずは自宅に帰つて、これから一日生き延びる為の術を考えよう。あたしは出来る限り冷静さを保つように、夜の街を駆け抜けた。

そうして生き延び、力を得たあたしは。
そのついでと書つように、この戦いの意味

真実を知つた。

俺　月城昴は、戦いの終わりを知らされ、西条公園までやつてきていた。何の力もない俺と紅憐は、自宅待機を命じられていたのである。確かに俺がしゃしゃり出る幕ではない事も明かだつたわけだ　実際問題、俺が出ていつてもただの役立たず、彼女達の足を引っ張るだけに違いなかつた。まあ個人的な意見を言わせて貰えば、不服ではないと言えば嘘になるんだが。だがそんな独りよがりな気持ちを抑えてでも、俺は彼女達の邪魔だけはするわけにはいかない。確かルナや夜鈴が言うには、俺にも魔法使いとしての素質があるらしいが……まったくそんな力を使えるような気配はないし、正直まだ半信半疑もいいところだつた。俺みたいな一般人は一般人らしく振舞つていろ　とはルナのキツい言葉なのだが、俺はそう言われ、納得するしかできなかつた。力が欲しい。彼女達を手助けできるよう、そんな力が　そうは思うものの、もうそれも意味はない。終わつたのだ、全て。俺の知らぬうちに、俺の手が届かない場所で、何もかもが終幕を迎えている。それでいい……これ以上、彼女達が戦い傷付く姿なんて俺は見たくないから。

「……よお、ルナ。夜鈴から知らせを受けてきたんだが、結局どうなつたんだ?」

俺は、噴水の前で腕を組んで何か不服そうな表情を浮かべている

少女・ルナに向かつてそう問いただす。何やらルナは物足りなさそうにそわそわしている。一体何があつたというんだろう、俺は事が終わつたといひことしか知らないから、あらましを説明してもらいたいのだが。

「なあ、おい。……ルナさん？」

「あーもー、うるさいわね」何ともご機嫌ナナメな妹が答えた。「この街で起きていた事件の殺人犯である魔法使いは死んだわ。それも、わたしの出る幕なしにね」

「何だつて？ どういうことだよ？」

「ようは陽動チームだけで力タをつけちゃつたつてわけ。とは言つても、そこにいる沢富さんはまったく役に立たなかつたらしいけど」とか言いつつ、ルナは公園の端っこにあるベンチに座つてぐつたりとしている沢富花凜に向かつて親指を立てた。……なんだか沢富さんがひどく落ち込んでいるように見えるのは、俺だけだろうか？「つて、ちょっと待て。陽動チームには沢富さんしかいなかつたじやないか。それでその沢富さんが役に立たないまま、陽動だけで力タをつけた……つてのは一体どういうことだよ？」

「それはあたしが話すよ」ふと現れたのは、紛れもない紅憐だつた。「あの魔法使い、風や空気の力を自由自在に操る魔法使いだつたんだよね。だから、あたしの魔法がとっても相性よくてさ、ボツコボツにしてきちゃつた」

紅憐は何でもないかのような仕草で言い放つ。……おいおい、待てよ。魔法だつて？

「紅憐、お前……」

「あたしもね、魔法使いなんだよ。昴」

「ウソだろ……？」だつてお前、話し合ひのときには何も喋らなかつたじやないか！

「うーん、とは言つても、魔法使いになつたのだつてつこさつきなんだよね。だからあたし自身、どうしていいのか解らなくなつてさ。こんななり立てほやほやの新人が、いきなり戦力になんてなれっこ

ないじやん？まあ、結果だけ見ればちゃんと役立てたから良かつたんだけど

魔法使い。ルナや夜鈴、沢富さんと同じ存在 紅憐でさえも、そつちの領域に脚を踏み入れちまつたってのか。

「それで……その、犯人は」

「うん？ああ、今頃は多分灰になっちゃってるね。あたし、火の魔法が使えるんだ。何でも燃やしたり、炎を放出したりできるわけ。ネタバレしちゃうと、敵の魔法は風というか空気を媒介に使った魔法だったから、その空気 言い換えれば酸素だよね。それらを跡形もなく燃やしてしまえば、敵の使う魔法による攻撃だってあたしは食らわないってわけ。あとは好きなように、敵自身を燃やしてしまえば、終わり。あつけないよな、こんな終わり方つてさ」

「……紅憐、貴方間違いなく天才よ」ふと、唐突にルナが呟く。「今日、その力を手に入れたつて言うけど……それでそこまで使いこなせちゃうなんて、わたしの常識を逸脱してしまってるもの。正直、驚きを通り越して呆れちゃうくらい。確かに敵の力を見抜いたのは他の誰でもない、沢富さんだとしても、それを知つてすぐに対応できるなんて、初心者じゃまず不可能だわ。才能あるわよ、紅憐。間違いなく、わたしやそこの役立たずよりはね」

ギロリ、とベンチに座っている沢富さんがルナの言葉に反応して睨みつける。ただ、距離が結構あるためか、それとも言葉を発する気力さえないので 彼女はそれだけすると、また落ち込みモードへと戻つていった。……重症じゃないか、あれ。

「つてことは、これで一件落着……もう争い合つ必要はない、つてことでいいんだよな。夜鈴の疑いも晴れだし、街で起きてる事件の犯人もいなくなつた。これでルナは目的を達成できたり、俺たちは平穀無事な生活に戻れる」そこまで俺が言った辺りで、ルナも紅憐も何故か顔を伏せてしまう。「……おいおい、なんだよ二人とも。せっかく全部終わつたつてのに、辛氣臭いツラしてんじやねーよ……なあ、聞いてるのか？」

いやな予感、とはこういう事を言うのだろうか。何かまだある終わったはずなのに、まだ終わっていない。そんな予感、とうよりは、場の空氣から感じられる確証めいたものがひしひしと伝わってくる。まさか、まだ何があるってのか？ 殺人鬼を倒して、全て終わったはずなのに。

「……終わったよ」口を開いたのは紅憐だった。「確かに、この街で起きていた事件は全部力タガついた。でもね、まだ続きがあるんだよ。やり遂げきれない、果たせていない事が。……だよね、ルナ？」

紅憐は、隣にいるルナに向けてそう告げる。だが、それを聞いているのかいなか、顔を伏せたまま黙り込む一人の少女「……なんだよ、まだ何があるのか？ なあ、ルナ。お前はこの街で起きている事件を片付けるためにきたんだろ？ それならもう、全て終わったじゃないか……！」顔を上げて答えるよ、ルナ。一体、まだ何があるっていうんだ？」

「言いたくないんだよ、昴」一人、全てを知っているかのような口調で呟く紅憐。「ルナだつて、きっと本意じゃないはずだからね。もしルナにその氣があるんなら、今頃ここは第二の戦場になつてる」「戦場……？ まさか、まだ戦いがあるってのか。敵は？ 今度はどこのどいつが俺達の敵なんだよ！？」

「……わたしよ」前髪で目を隠したまま、ルナが口を開いた。

「なん……だつて？」

「わたしは、ロンドンから特殊作戦遂行の為に派遣された、『月光^{ムーンライト}の聖女^{ブリジンセス}』ルナミス＝サンクトリア。サンクトリア家の次女にして、光を司る魔力をもち、精神学に通ずる魔法を使ふ魔法使い。そして、そのわたしが請け負つた任務の内容は……次第に震えていく声を噛み締めながら、ルナは宣言する。「この街で起きていく事件に関わる、全ての魔法使いの存在の抹消。実力行使を持つて、それらと交戦し排除すること……それが、このわたしの背負つた使

一瞬、俺は彼女の言つている言葉の意味が理解できなかつた。

「ようするに殺し合いなんだよ、昴」紅憐が捕捉するように、「ルナは、元々この街に潜む魔法使いの排除のためにやつてきた。本来なら一人倒して終わらせるはずだつたのに、予想外のことが起きた……何の間違いか、この街には魔法使いが数多く存在していたつてわけ。そして、ルナが請け負つた任務の内容は全ての魔法使いの抹消。ようするにあたしや守崎さん、沢宮さんもその対象に含まれてゐること……あたし、この力を手に入れたときに得体の知れない奴から事の全貌を聞かされてさ。ハメられたよ、力を手に入れてしまつてから教えられるんだから。その後、昴の部屋で話してたときにつの力のことを言い出せなかつたのだつて、あたしが魔法使いだつて事を知られたくないからだしさ。結局、沢宮さんのピンチを救つたことでバレちゃつたんだけど」

殺し合い。味方だと思つていたルナが、本当は紅憐や夜鈴、沢宮さんまでをも殺すためにやつてきた魔法使いだつたなんて 冗談にしては、笑えない。それどころかこんなこと、すでに冗談で済ませるような話ではなくなつている。

「……ルナ。どうして黙つてた」

「言えるはずないじやない……！」まさかこんな辺鄙の街に魔法使いがこれだけ存在しているだなんて、わたしだつて完璧に予想外よ」口惜しそうな、それでいてどうしていいのか解らないといつた表情で顔を背けるルナ。俺は何と言つていいのか解らず、ただ口を閉ざし続けるしかなかつた。

「あたしも守崎さんも、出来ることならルナと戦いたくなんてないよ。沢宮さんはどうだか知らないけど……。でも、ルナはあくまでこの街の住人じゃない、外から任務を遂行するためにやつてきた魔法使い……使命は果たさないといけない」

「だからつて、今まで仲良くしてきた奴同士で殺し合いなんて……そんなのアリかよ？ ルナだつてそんなことはしたくないはずだろ！？」

「それはそうよ、そうに決まってるじゃない。……でも他に手段がないのよ。わたしの帰る場所はひとつしかない。そして、わたしが帰るために……」

「任務を果たさなきゃならねえ、ってか？　なら捨てちまえよ、そんなんもん」

「な」

「帰る場所がないだつて？　ふざけんな、その程度の理由でビリして仲間を殺さなきゃならない？　んなモンおかしいだろうが！　ルナはやりたくないつて思つてるんだろ、俺達の敵なんざに成り下がりたいわけじやないんだろ！　なら今ここで決める、そんなクソッたれな任務なんざ放棄して、俺の家に帰つてこい！」

そうだ、ルナに帰る場所が一つしかないなんて事はない。ルナは俺と出会い、俺と共に過ごしたその時から、他のどこでもない一つの居場所を見つけているんだから。

「ルナは俺の妹だ。月城瑠奈、それがルナの名前だろ。サンクトリアだの、『^ス月光の聖女』だの、そんな肩書き全部投げ捨てちまえよ！　それでも何の問題もない、残るのは俺の妹、月城瑠奈っていう存在だけなんだから！」

「なによ、ばか兄……。そんな簡単に、言わないで」

ルナだつて、俺達と戦いたいわけがない。今の今までこうして耐えてきたんだ、いづれこうなつてしまつという事に気付いていながらも。そして今もなお悩み、苦悩し続いているルナの姿を見れば俺にだつて解る。こいつは決してそんな未来を望んじやしないんだ、と。

「……ちょっと待つて、月城くん」ふと、ベンチに座っていたはずの沢富花凜が、ふらふらとこちらへ向かつて歩み寄つてきていた。

「……話は聞いてたよ。でもね、私に言わせて貰えば、それって月城くんの独りよがりじやないかな。ルナにも本当に帰るべき場所つて言つのはあると思う。それって本物の家族とか、そういうのがいるところだよ。月城くんは、ルナの本当の家族でもなんでもない。

ただ数日間知り合つただけの赤の他人。こうしてルナが悩んでいるのつて、そういう『本物』があるからこそでしょ？私は『人形遣い』だから、誰よりも本物と偽者、その比べようのない差つていうのが解るし……もしルナが簡単に本物を捨ててしまえるなら、こんなに悩んだりしないで、月城くんの言つようにしてると思う。……でも、実際はこんな状態。未だにどうしたらいのかわからないまま、本物への執着心を残してる。私達を皆殺しにしてでも戻りたい場所つていうのが、彼女の中には存在しているんだよ。それこそ、その本物を捨ててこちら側を選ぶっていう選択肢と天秤にかけられるくらいには、ね」

「…………」ルナは、何も喋らない。

「私はどっちでもいいと思つてる。ルナが私達を殺して、本物を取り戻そうとするのなら、その時は私が月城くんを守るから」

「…………あたしは」まだ少し戸惑いを残したまま、紅憐が口を挟むよう、「…………うん。やっぱり、それだけはルナの自由だと思う。あたしは出来ることなら殺し合うだなんて勘弁つて感じだけど……でも、ルナがそれを選ぶんだつたら、あたしは何も言えない、かな」「ふ…………一人とも、正氣で言つてるのかよ！？」それって、つまりルナを

「殺すことも厭わない、という意味。

「『冗談じやねえつ！ そんな結末、俺は絶対認めない！ ルナにも皆にも、もうこれ以上戦うだなんて馬鹿げた事は絶対にさせないからな…………！』

「…………言つだけなら簡単」唐突に背後から聞き覚えのある少女の声
夜鈴だった。「それでも、もしルナが戦つという選択を取ったとき、昴は彼女も私達も止められない。それに、言葉だけではどうしようもない事もある。決断するのはルナ自身。私達じゃない」

夜鈴でさえ、紅憐や沢富さんと同じような事を言つ。おかしい、何かが間違ってる そうは思えて、俺は言い返すことができないでいた。心のどこかで、彼女達の言つている言葉もまた正しいの

だと理解してしまつてゐるからかも知れない。……だが、それでも俺は諦められなかつた。たとえこの身に力がなくても、言葉だけでは解決できないのだとしても、何もしないまま、ただ行方を見つめるだけだなんてのはごめんだ。

「俺は……っ！」

「……もういいわよ、ばか兄」俺の言葉を遮るように、ルナが重い口を開いた。「確かにそう、みんなの言う通りだわ。わたしは迷つてゐる。任務を捨ててしまふことを恐れ、今まで築き上げてきた全てを投げ出す覚悟さえ出来ないまま……果たすべき使命を果たして、何もかも忘れて樂になる事をどこかで望んでいるのかも知れない。みんなを殺してしまうことになるつて言うのに、そんなことは結果のひとつでしかない、だなんて隅つこのほうで考えてしまつてゐる。……正直、辛かつたわ。ここまで成り上がるため、こうして一人前の魔法使いとなるまでの長い時間。そんな簡単に捨てちやえるわけないぢやない。努力して、涙して、時には血を流してようやく手に入れた今を、こんな任務ひとつせいで、全て台無しにするなんて

「ルナ、お前」

「お前はやめて、つて言つたでしょ。……そう、わたしには名前がある。ルナミス＝サンクトリア、『^{ムーンライトプリンセス}月光の聖女』」
そんな、わたしがわたしである証明。長い年月をかけて手に入れた、ちっぽけだけど大きな一步。もう一度と『お前』呼ばわりされないで済む地位。立派な一人の魔法使いとしての権威。生まれてから決められた道をひたすら歩んできたこの十四年という歳月は、決して軽いものじゃないのよ。それこそ……たつた数日で手に入れた絆でさえ、本当に小さく見えてしまうくらいに」

ルナが伏せていた顔を上げた。その瞳には大量の涙、顔は真つ赤に染まつてゐる。それだけでも十分に彼女の心境が理解できると言つうのに

「……どうやら決めちゃつたみたいだね。あたし的には本当に残念

だけど……ルナがやるつていうのなら、あたしは自分と仲間の命を守らなきゃ」

「やっぱりそんなものよね、予想はしてたけど。……正直、今まで以上に失望しちゃった。でもまあ、私は月城くんさえ守れたらそれでいいかな」

「……あくまで敵対すると誓つたのなら。容赦はできない」

「お、おい、三人とも」

俺の制止などもはや通用しない。ルナに向かつて対峙する三人の少女達は、すでに臨戦態勢に入っていた。ルナもルナで、本当に決断してしまった様子が見える。未だ涙を流し泣いているというのに、それでも立ち向かう少女達に向けて言葉さえ送らない。まるでそれが正しいのだと言わんばかりに。

「……ごめんね、兄さん。短い間だつたけれど、わたし、貴方と出会えてよかったです」

「おい……待てよ。今更そんな風に誓つた。まだ、選べるはずだらうが!」

「つづくん、もう選べない。決めてしまつたから」「ルナは悲しそうに」
だが決意を込めた強い口調で、「……わたしは貴方達を皆殺しにして、もとあるべき場所に帰る。そこに、わたしの全てがあるから。

わたしはもう、迷わない」

これが 結末。一人の少女が苦悩し、決断した結果だつて言うのか。

「 クソッ！ やらせたまるかよ、ちくしょう！」

俺は駆け出す。ルナをこの手から離さない為、こんな馬鹿げたことを今すぐ止めさせる為に

「駄目」いきなり目の前に現れたのは、夜鈴だつた。「貴方こそ、これ以上関わるべきではない。魔法使いではない貴方は、まだ死なないで済む唯一の人間だから」

ちりん、という鈴の音色が聞こえる。

「やめろ、夜鈴……！ まだ俺が無関係だつていうなら、今すぐに

でも魔法使いになつてやる！だからそこを退いてくれ……！」

「誰も貴方が死ぬことを望んでなどいない。解つて、昂。貴方は今度こそ、全てを忘れて今までと同じ場所へと戻るべき。……だからちりん、一度目の鈴の音。『……わよつなら、昂』

ちりん 、

ちりん。

合わせて四つの鈴の音色が、俺をその場に崩れ落とさせた。

月曜の朝というのは、なんとも憂鬱な気分になるものである。俺こと円城昂はベッドからギシギシ痛む身体を引きずり起こすと、ぼやける視界を瞬きで徐々に正常へと戻していく。どうやら寝違えたのか、身体のところどころが痛い。昨日何か運動でもしたつけいや、特に何もせずいつも通りの休日生活を満喫していたような気がするのだが

「ふわーあ。……しつかし、珍しいこともあるもんだ」

俺は壁にかけてある円形時計に目を向ける。時刻はなんとまだ七時前つまり、かなりの余裕を持つた起床ということになる。これまで学校は遅刻ぎりぎりで登校する、というのが日課だった俺にとって、正直これは驚くべき事態だ。まさか朝食を食べる時間ががあるのか。授業中に腹をすかして音を鳴らし、そのたびにクラスメイトから失笑されるような日々とオサラバできてしまうのか？

「……とは思うものの、朝食なんて作る習慣のない俺には結局パンを焼く程度のことしかできないんでしたとさ」

一人呟きながらリビングへと向かう。確かに、もうすぐ賞味期限の切れてしまつ食パンが何枚があまつていたはずだ。それでも焼いてしまおう そこまで考えて台所へ向かうと、そこには何かおかしなモノが置いてあった。

「なんだこれ。……いつの間に作ったんだっけ」目の前にあるモノ

鍋の中には、カレーが入っていた。「昨日カレー作ったんだつたか？　いや、でも俺ってカレー作つたりしないよな……、んん？」

「じゃあ、なんで置いてあるんだろう」

一人暮らしの俺が、まさか残るほどカレーを作り置くとも思えない。大体、自分で作るのが面倒なので、大抵は「コンビニ弁当やらで済ましてしまうのが俺の基本的な食生活なのに、このカレーの存在は意味不明、というより謎過ぎてわけがわからなかつた。

「いやまあ。ここにあるつてことは、俺が作つたんだろうけどさ。

……つかしいな、寝ぼけて記憶喪失にでもなつちまつたか？」

すきん、と脳裏で何かか傷む。感觸的なものではなく、何か大切なことを忘れてしまつているような、そんな感覚的な痛み

「……ま、いいや。とりあえずラツキーツーことで。今日の朝食はカレーだな」

そういうえば、ヘンな夢を見ていた気がする　何だか上手く思い出せないが、とても大切で、ずっと覚えていたいような儂い夢を。自分でも少しばからしいとは思うけど、何故だか今日はその夢の内容を思い出したくなるような気分だつた。たまにそういうこと、ないだろうか　きっと良い夢を見ていたに違いない、覚えてもいいないのにその夢のことがやけに脳裏にこびりついているような感覚。皿を取り出しご飯を盛り、その上に暖めたカレーをかける　やけに上手そうな匂いが鼻をつんと刺激する。カレーはかなりの好物だし、じうして久しぶりの朝食を彩るには文句なしの一品であること間に違いはなかつた。だが、何故か既視感のような、何かもやもやとしたものを感じるのは何故だろう。昨日も食べていたからかもしれないが、何故かこの気持ちがはじめてのものとは思えなかつた。……やっぱり記憶が曖昧だから、記憶喪失になつたのか。なんて、有り得もしないことを考えながら食事を開始。ものの数分で一気に平らげられた残りのカレー（全部）。

「ふう、食つた食つた。久しぶりの朝食だけど、結構入るモンだなあ」

俺は食事を終えると、そのまま食器を台所へと運ぶ。一人の食事はいつもの事なのだが、今日は何故だか少し寂しい気分になつた。柄にもなく手作り料理なんてするからだろうか　なんて考えていると、すでに時間はそろそろ出発の時刻へと差し掛かっていた。いやまあ、いつもはこれより大分遅いのだが、今日はせっかくの早起きデーである。どうせなら早く登校してみるのも悪くはないだろう。いつも遅刻ギリギリに教室に現れることで有名な月城昂が珍しく朝一番に登校　なんて、クラスメイト達からしてみれば驚きわめくくらいの一 大事に違いない。……自分で言つていて少し情けなくなつてくるが。

「んじゃあ、今日もはりきつて学業に励むとしますか　」
孤独はもう慣れている。一人暮らしも板についてきた頃だし、とつぐに自立できているとは自分でも確信している　だというのに、今日は何故だか一人の部屋がやけに広く、自分がちっぽけな存在のように思えて仕方がなかつた。

それはとある春の一日、その早朝。

全てを失い全てを取り戻した少年は、行き場なく生まれた意味さえ解らない感情だけを胸に秘め、今日もまたいつもと変わらぬ平凡な人生を歩んでゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2585d/>

ウィザード～魔法使いは月に照らされて～

2010年10月10日14時36分発行